
リュートの大陵

木川明彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リユートの大陸

【Nコード】

N0759M

【作者名】

木川明彦

【あらすじ】

西暦1274年。

大モンゴル帝国は、ユーラシア大陸を席捲し、東は日本、西はイスラム国家に侵略の手を伸ばしていた。

中東の地は、十字軍・イスラム・モンゴルの三竦みによる世界大戦争の様相を呈していた。

その闘争を背後で操る邪悪な集団。彼らは、太古の戦いで封印された？深淵？を復活させようと暗躍する。

？深淵？は人類誕生の鍵を握る存在であり、もし甦れば、人類は、

さらなる闘争の兵器として使役されることになってしまつのだ。

人類の歴史の要所で、？深淵？シンパと激闘を繰り広げてきた、天空丸の一族。今また？深淵？本体の復活を阻止すべく天空丸烈斗とリュート
リュートの父娘が戦いを挑む。

？深淵？を再び封印するためには、天空丸の守護神である？天空？と接触しなければならない。だが、？天空？が存在するのは、遙か大西洋の彼方、謎の大陸。そこには、龍人^{りゅうと}という恐るべき魔物が棲み、？天空？を守っているという。

天空丸龍斗は、船乗りシンドバッド、モンゴルの將軍アヴァカ、聖十字騎士シーガード、ギリシアの科学者メランシアスらの協力を得て、謎の大陸への決死行に旅立つ。

バラレヒストーリー
異歴史の幕が開く。

第一章 激突する文明

第一章 激突する文明

博多湾からの風が、硝煙と屍肉の焼ける匂いを運んでくる。

空は黒煙が覆い、浜には日本の武者の粉碎された死骸が散乱している。渚に打ち寄せる波は血の色で紅く染まっていた。

時に西暦一二七四年（文永十一年）十月十九日。

日本が初めて迎えた本格的な対外戦争は、その圧倒的戦力と技術力の差を見せつけられる結果となった。

湾を埋め尽くす大艦隊。その数、実に千隻。兵員数は十四万人にもおよんでいた。大モンゴル帝国イェケ・モンゴル・ウルスの日本侵攻軍である。ユーラシア大陸を席捲する大帝国が、今、極東の島国に怒濤の如く襲いかかってきたのだ。

モンゴルの上陸作戦、それは日本の従来の合戦の常識を覆す異様なものだった。

まず、湾上の軍船から博多を中心とする玄界灘沿岸に向け、艦砲射撃が加えられた。火薬の爆発力によって噴進する鉄管である。その弾頭部にも強力に調合された黒色火薬が詰まっており、着弾するや爆発し、日本側陣地に大被害を与えた。

徹底した艦砲射撃の後に歩兵を中心とした大部隊が上陸を開始する。大陸を席捲したと言われる騎馬軍は使用せず、重武装の歩兵が小型舟艇より続々と降り立った。彼らは「鉄砲てつぱう」と呼ばれる携帯火器を持ち、先の艦砲射撃で総崩れとなった日本側に対して一方的な攻撃を加えた。鉄砲も強力な弾丸を撃ち出し、その一撃で鎧兜を粉碎し、日本武者に致命傷を与えた。

特に侍達を震え上がらせたのは、上陸軍の先陣を切る鈍色に輝く装甲兵達であった。その装甲は胴や手足だけでなく顔面にまで及んでおり、能面のように無表情な仮面を被っている。そのため日本側

の弓矢や刃も全て弾かれてしまう。しかも、これだけの鎧を身につけていながら、その身のこなしは敏捷で、剣技においても日本の侍どもを凌駕する。まさに死角無しの無敵の兵团であった。

圧倒的な勝利にも関わらず、モンゴルの上陸隊は日没と共に海上の船団へと引き上げていった。まるで猫がネズミを殺す前にいたぶるように。

すでにこの第一次攻撃により博多の街は夜半を過ぎても濛々たる黒煙を上げている。日本西南の守り太宰府は負傷兵の呻き声で溢れかえっていた。頼みの鎌倉からの援軍はもとより、本州および四国からの救援も間に合わない。明け方と共に行われるであろう本格的な侵攻作戦によってこの戦いが決することはもはや火を見るよりも明らかだった。

満月より数えて二日目の晩。たちまちつき 立待月と呼ばれる月は、右が一分ほど欠け、完全な円ではないものの煌々たる光を放っていた。

博多湾の中央に浮かぶ能古島。その南西の白鳥崎。ここから望む湾には停泊中のモンゴル船団が月明かりに浮かび上がっていた。

白鳥崎に一人佇む長身の影。男だ。手を広げたまま瞑目している。その指先からは無数の細く輝く銀の線が伸びている。糸だ。銀色の糸だ。月光を受け、朝露に濡れた蜘蛛の巣のように輝いている。その銀糸は海中へ没し、さらに枝分かれしながら、モンゴル船団へと伸びていく。まるで生きているようだ。糸の先端は、船団の要所要所の船へと取り付くと、そのまま横腹を這い登っていった。

男がゆっくりと目を開く。灰色の瞳が不敵に輝く。

「機は熟したな……」

モンゴル艦隊旗艦に構えるは、総大将キントウ。腹心数名と戦勝の祝い酒を啜っている。周囲には微動だにしない仮面兵士が整列している。上陸戦の重装備を解いているものの、無表情の鉄面だけはそのままである。

ポツポツと雨が降り出し、キントウの杯に落ちた。

「無粋な……いや。日本の最期を哀れむ天の涙雨か……」

キントウが乾いた声で笑う。そのたびに首筋の牡丹のような痣が蠢く。追隨して笑う数人の参謀達。その首筋にも同じような痣が脈打っている。

その笑いは、耳をつんざく轟音によつて断ち切られた。停泊中の軍船の一隻が火柱を上げて爆散したのだ。

「何事だッ!？」

紅蓮の炎に浮かび上がる幽鬼のような影。そして低く響く声。

「今のは警告だ。大モンゴル帝国^{イエケ・モンゴル・ウルス}の諸君。大人しく軍を畳んで、降りたまえ」

この長身瘦躯の男こそ、先ほど岬で不思議な技を用いていた怪傑。その全身は月夜に艶やかに輝く深紅の革衣に包まれている。明らかに日本の武士ではない。

「何やつ!？」

キントウ將軍が怒鳴る。

それに応えるように男は、自らの胸を親指で指す。

「我が名は烈斗^{レット・テンクウマル}。天空丸烈斗」

「一人で、どうやってこの船に乗り込んできたかは知らんが、その度胸だけは褒めてやろう。だが、度胸だけでは戦には勝てんぞ」

キントウが手を挙げると、今まで不動だった兵が、一斉に手にした長槍を構える。

「ほう……ただの木偶^{でく}ではなさそうだな」

兵の数五十名。多勢を前にして、天空丸は、何の恐れもなく平然としている。

「ひとつ問う。今回の陣は、貴公の王フビライ殿の意志なのか」

烈斗の問いにキントウは黙したまま。

「それとも……? 深淵? なる者の仕業か?」

キントウの首筋の牡丹のような痣がピクリと蠢く。

「? 深淵? ……その名を知っているとは……思い出したぞ。天空丸。

あの？天空？か？」

「我は天空丸。？天空？を守りし者」

「ならば容赦は無用。その首狩って、？深淵？への土産にしよう」

「出来るかな？」

天空丸が初めて構えた。その左腕が光り輝く。見れば、左手の甲に蒼い宝玉が埋め込まれている。

前衛の兵士が一齐に長槍を突き立てる。槍袞だ。だが、烈斗はそれはるか上方高く飛び上がる。まさに深紅の化鳥けちよう。槍の柄に降り立つや、爪先立ちで滑走する。

「蹴ッ！」

閃光の蹴り。兵の頭が薙ぎ払われる。吹き飛ばされた首は甲板に落下するや、銀色の泥のように飛び散った。

「やはりな……聖泥セーデの傀儡くぐつか」

接近戦の剣が一齐に舞う。烈斗は、その全てを寸で見切って、拳を放つ。

「打ッ！」

兵の胴体に風穴があく。天空丸の打撃と共に、宝玉の閃光はさらに激しく輝き、その光を浴びた兵の体は蠟のように溶解していく。

「こ、これが、天空丸！？」

旗艦の大事に他の船から怪兵士が小舟で押し寄せてくる。

「所詮は多勢に無勢。戦は数よ！」

味方の援軍にキントウは勢いづく。

「どうしても懲りないと見えるな」

この窮地にも天空丸の余裕は消えない。

「ならば吹かせてやろうか……神風を」

天空丸の十指には、今もなお、銀色の糸が繋がっていた。

「烈！」

天空丸の気合いと共に、銀糸がピンと張る。その先端は船倉の火薬庫に繋がっていた。糸の先端に火花が散る。引火する火薬。上がる火柱。大気を振るわす轟音。濛々たる黒煙。船の爆炎は、さらに

隣の船へ燃え広がり、大艦隊はたちまち業火に吞まれていく。

翌朝。博多湾の海面は、焼け焦げた船の残骸で覆われていた。湾を一望する砂浜で天空丸烈斗は、その惨状を無言で眺めていた。彼の傍らには、巨漢の武者が付き従っていた。伊予の国（愛媛県）より馳せ参じた河野通有である。

「申し訳ござらん。お役にも立てず……」

勇猛で知られる伊予水軍を率いる将が、申し訳なさそうに頭を垂れる。

「水軍は貴重な存在、兵力は次の戦いに温存しておきたまえ」

古き友に静かに返す天空丸。

「次が来ますか？」

「ああ、来る。ただし、狙いは関東」

「なんと！？」

「だが、この時期に、この場所に攻めてくるとは……おかげで、戦力を分散されてしまった。これは大モンゴルだけの知恵ではないな」

「では、やはり？深淵？なる者が」

「おそらく」

白浜には、大モンゴルの船の残骸と共に多くの兵士の死体が打ち上げられている。

「大モンゴルの兵士は、わずか。征服地である高麗の民が徴兵されて来ていると聞きます。哀れですな」

死体には薙むしろかけられている。それを見た、通有が不審そうに言う。

「しかし、あの船団の数にしては、上がった骸が少ないような気がしますな」

「ほとんどは、セーデで形作った傀儡であつた」

「やはり？深淵？」

烈斗は無言で頷く。その双眸は遙か西の空へ向けられていた。
「今頃はいずこでございましょうなあ」

その心中を察した通有が問いかける。

「今頃はバグダッドか……順調に行けばな」

まだ明けきれぬ西の水平線に幾筋もの流星雨が降る。烈斗の表情が翳る。

「不吉な兆しよ」

日本各地で地震など天変地異が頻発している。昨年は大彗星が接近し、今年に入ってから連夜の流星雨である。

「うちの星読みによると、我らが住んでいるこの星は、かつてない濃さの塵の中に突っ込んでいるらしい」

「塵？ 星空に？」

「ああ、星の類が粉々になって漂っているらしい。その塵が、この星の大地や海に昼も夜も墜ちてきているというのだ」

「くわばらくわばら」

通有は気味悪そうに空を見上げて、思わず落雷除けの呪文を唱える。

低く静かな読経の声が海風に乗って聞こえてくる。見れば、ボロボロの法衣を纏った僧が日本人、モンゴル人を問わずに弔っている。

「一遍いっぺん殿じゃ」

通有が意味ありげにうなづく。

「今に、神も仏も無くなる」

天空丸烈斗は何かを振り払うように岬を後にして、一路東を目指した。

博多から西へ三万八八〇里（七七二〇キロ）。

バグダッド。チグリス、ユーフラテス川に挟まれた歴史ある交易地。西暦七六二年にアッバース朝の首都となり、ムスリムの発展とともに繁栄した。だが、その五百年に及ぶ栄華も一二五八年にモンゴル軍の侵略により断ち切られた。

そのバグダッドの街に不思議な風体の旅人が入ってきた。

羽織った長い外套マントは砂埃で煤けており、かなりの長距離を旅して

きたことを窺わせた。外套の下には紅い革衣がチラチラと見える。目には遮光器ゴーグルをかけ、口元は防塵のためのマフラーで覆われ、人相は分らない。肩に掛けられた銀色のロープが陽光に輝き異様に目立つ。体格は小柄で華奢だが、肩で風切る堂々とした歩き方で、どこことなく高貴な雰囲気さえ醸し出している。しかし、供の一人も連れず、また武器一つ纏スークっていない。

旅人は人々で賑わう市場へと入って行った。モンゴル占領下と言えども、商いは盛んに行われ、通りには屋台が建ち並び、人でごった返っていた。

旅人が遮光器を外す。大きく切れ長の双眼。不敵に輝く灰色の瞳は油断無く周囲を見回している。何かを探しているようだ。

「旦那、旦那、本日のお泊まりは？」

宿場の客引きが呼び止める。如何にも胡散ぐさげな男。大方、無知な旅人からぼったくるつもりなのだろう。

旅人は男の存在を無視する。だがしつこく前に立ち塞がる。旅人は、客引きの胸ぐらを掴むとグイと引き寄せる。体格に似合わず、ものすごい腕力だ。

「シンドバッドという船乗りを知っているか？」

「し、しらねえよ」

それを聞くと興味を失ったように手を離す。客引きの男は一目散に逃げていく。

旅人が耳を澄ますと呼び込みや商談の声の中に飛び交う様々な噂話が聞こえてくる。

「エジプトのバイバルスがアイン・ジャルートでモンゴルを打ち破ったそうだ」
クルセイダーズ

「聖十字軍を率いるフランス王は重病らしい」

「いよいよ、俺達の解放の日も近いのか」

「……おい」

屋台の片隅でたむろっていた一団の一人が指さす。警邏のモンゴル兵士が近づいて来たのだ。一団は目を合わせないようにしながら、

ちりぢりに分かれていこうとする。だが、モンゴル兵は何人かの退路を断ち、尋問しようとする。

「ライラツィラー！（アラーの他に神は無し！）」

一人が叫ぶや腹にくくりつけられていた麻袋に火をつける。市場のど真ん中に上がる火柱。モンゴル兵が吹き飛ぶ。兵ばかりではない、周囲にいた商人や買い物客、中には幼い子供までもが、火だるまになってのたうち回る。

旅人は惨劇を遠くから見つめているしかなかった。下唇を？んで、必死に激情を抑え込んでいる。

「何を……何をやっているんだ……？ 奴ら？ の思いつきなのに」

旅人はその場から逃げるように離れた。

旅人はシンドバッドなる船乗りを捜し彷徨^{さまよ}ううちに奴隷市場の区画へやって来てしまったことに気づいた。

市場では女奴隷達の売買が始まったところだった。台の上に立った彼女達に値を付ける男達。ある者は商品を品定めする冷徹な目。ある者は欲望に狂う血走った目。どちらにしろ、およそ人間に向けられる眼差しではない。

まるでモノのように扱われる少女達。特に異教徒、西欧の金髪碧眼の少女達の扱いは非道い。彼女達を待ち受ける運命を想像するだけに、旅人は吐き気に似た嫌悪を感じた。

見上げた旅人の視線が、偶然にも壇上の少女の救いを求めるような目と視線がぶつかってしまった。

ユイガ？

髪の毛の色も肌の色も違う。だが、旅人は思わずその名を呟いてしまう。

同時に両の掌に生暖かい感触。恐る恐る手を見る。そこには深紅の鮮血が滴っている。

頭を振る。焦点が定まる。もう血の感触は無くなっている。白昼

の幻覚だったのだ。

壇上に視線を戻すと、女奴隷の商談は破談に終わったようだった。

「別嬪だが、喋れねえんじゃな……」

「ちっ！ この役立たずが」

奴隷商人に不良品のように手荒く扱われる少女。倒れ伏した少女にさらに鞭くれようと振り上げられた商人の腕が激痛と共に捻り上げられる。

「痛！ な、何しやがる！？」

「女は男の財産ではない」

止めてしまつてから旅人は後悔した。これは単なる感傷に過ぎない。それは分かっている。だが、思わず体が動いてしまったのだ。商人の悲鳴を聞いて、駆けつけてくるモンゴル兵が目の端に映った。

「まずいな」

モンゴル兵など怖くもない。だが、騒ぎが大きくなるのを恐れた旅人は、ひとまず逃げることにした。

スーク

市場の裏道を駆け抜ける旅人。だが、慣れない異国の地に次第に追い詰められていく。ついに、路地は分厚い土塀に阻まれてしまった。行き止まり。モンゴル兵達の物々しい足音が近づいてくる。

その時、壁からヌツと手が出てきて差し招く。よく見ると建物と土塀にわずかな隙間がある。手はそこから出ていたのだ。旅人は、迷わずその隙間に滑り込んだ。

建物の隙間をすり抜けると意外に広い空間へ出た。壊れた荷箱や欠けた壺、車輪の取れた荷車などがうずたかく積まれている。その山の上に若い男が座っている。どうやらこの男が救いの主らしい。「なかなかの身のこなしだ……。けど、バグダッドは初めてみたいだな」

褐色の肌。ヒョロリと細身だが、鍛え抜かれた肉体。ターバンの巻き方、そして、ほのかに香る潮の匂い。

船乗りだな。

旅人は直感する。

「なぜ、シンドバッドを捜す？」

若者が探るような目つきで旅人を見下ろす。油断のない黒い瞳。

「知っているのか？」

旅人は期待を抑えつけて、わざと素っ気ない声で問いを返す。

「もう一度聞く。なぜ、シンドバッドを捜す？」

「素性も知れぬ者に、なぜ話さなければならない？」

「素性ね……ま、たしかに、どこの馬の骨とも知れない奴に大事な目的は話せないよな」

若い船乗りはため息の後、耳の後ろを掻く。

「素性という点なら、あんたは俺に話すべきなんだ」

「どうということだ？」

若者のもったいぶった調子に旅人はいらつきを隠せない。

「俺が、そのシンドバッドだからさ」

若者は、十分な間を置いてから、胸に手をやり芝居がかった調子で自己紹介した。

「若いな」

旅人は、驚くどころか、一言のもとに片付けた。

「何だと？」

今度は、シンドバッドを名乗る若者の方が狼狽した。

「シンドバッドは、人生で七回の航海をした老練なる船乗りのはず」

旅人は諦めたような表情でため息を吐いた。

「どうやら、またクズのようだな」

「八回だ」

自称シンドバッドがあわてて遮る。

「なに？」

「八回目がある」

若者の言葉に旅人が感心したように眼を細める。

「さすがは自分で名乗ってくるだけあって、くわしいな」

「まだ、疑っているのか？」

「それでは問う。八回目の航海、その目的地は？」

「地中海の果て、西の大洋の彼方……幻の大陸」

旅人の瞳が輝く。

「私の目的地は、そこだ。船乗りシンドバッドならば、幻の大陸への航路を知っている、と聞いている」

「あそこは悪魔の土地だぞ……」

「知っているのか？ 大陸への海路^{みち}を？」

「もちろんさ……」

詰め寄る旅人に、もったいぶった調子でシンドバッドが返す。
だが、その内心は諸手を挙げたいほどに浮き足だっていた。

メランシアスの言うとおりだったな。久しぶりにバグダッドに帰ってきたら、とんでもないヤマにぶち当たったぜ。……けれど、ちよいと問題がある。

「本当だな？」

「ああ、新大陸に案内してやる。けど、ちよつと相談が……」

「金か？」

旅人が指を見せる。そこには見たこともないような宝石が煌めいている。思わず、シンドバッドの眼が吸い付けられる。

「そ、そんなもんじゃ、俺は動かねえ。俺を動かせるのは、真の冒険……」

旅人が、シンドバッドの言葉を手で制する。

「何だよ？」

「……困まっている」

「なに？ モンゴル兵か？」

「違うな……」

旅人が油断無く周囲を探る。

「出てきたまえ！」

旅人が凜とした声で呼ばれる。

すると、積載されたガラクタの影から鈍色の仮面の一団が忽然と

立ち上がった。どこにこれだけの人数が隠れていたのだろうか？

「またお前達か？　ならば容赦はせん！」

「なんだ？　知り合いか？」

旅人を庇うように素早く前へ出るシンドバッド。手慣れた挙動で短剣を抜き、構える。

「女の子に大の男が数人がかりとは、黙っちゃいられねえな」

「女の子！？」

「どう見たって、お前、女だろ？」

「な、なんで？」

旅人、いや少女は正体をあつさり看破され、思わず口ごもった。

「胸、腰、尻、身のこなし、声、匂い……どう見たって女だ」

「……」

二人のやり取りなどお構いなしに、鉄仮面が半月刀を振り上げて襲いかかってくる。

上段からの半月刀をシンドバッドは寸で見切ってかわす。敵の内懷に踏み込むや、刃が閃く。鉄仮面の喉笛が一文字に切り裂かれる。鈍色の裂傷。だが一滴の血も出ない。それどころか、傷口がみるみる塞がっていく。

「こ、こいつら……」

驚きと恐怖のあまり、動きが止まるシンドバッド。そこへもう一人の鉄仮面が斬りかかってくる。

「うわっ！」

「邪魔だ」

シンドバッドを突き飛ばして、鉄仮面との間に少女が割り込む。

左の拳を胸の位置で構える。シンドバッドは、少女の左手の甲に水晶のような蒼い石が埋め込まれているのに気づいた。

「霸道！^{はどう}」

かけ声と共に宝玉が蒼く輝く。その光を浴びて、少女の肩に掛かったロープが蛇のように蠢きだした。そのままスルスルと少女の左手に収まるや、細身の剣と化す。

少女の剣が鉄仮面の半月刀を迎え撃つ。噛み合う瞬間に少女の剣が、流体化し、半月刀に巻き付く。動きを封じておいて、少女の右鉄拳が敵の腹にめり込む。

「打^だアッ！」

鉄面の背中から鈍く輝く結晶体が飛び出す。だが一瞬にして四散する。それと同時に、鉄仮面の体がぐずぐずと崩れ出す。跡に残ったのは、銀色の液体と朽ち果てた人骨。

「なんだこりゃあ！」

「人ではない」

少女は瞬く間に数人を打ち倒す。シンドバッドは知る由もないが、これは天空丸烈斗がモンゴル船上で見せた体術と全く同じものだった。

形勢不利と見たのか鉄仮面は、現れたのと同じように忽然と消え去った。

「おお！ す、凄ええ。あんた、何者だ？」

その言葉を待っていたかのように、防塵マフラーを下げ素顔をさらす。

整った鼻筋にちょこんと胡座^{あぐら}をかけた鼻翼が続く。そしてピンク色のふつくらした唇。鋭く大きな灰色の双眼とはアンバランスな可愛らしい顔立ちだ。

少女は快活不敵な笑顔を浮かべると、親指を突き上げ、自らの胸を指した。

「我が名はリュート。天空丸龍斗^{てんくうまるりゅうとう}。人呼んで深紅の快男児」

「快男児？ 快男児って、あんた女だろ？」

笑顔が瞬時に消え失せ、シンドバッドの胸ぐらを掴み引き寄せる。片眉をつり上げてシンドバッドを睨みつける。頭一つ大柄のシンドバッドが為す術もない。

「細かいことは気にするな」

と、急に掴んでいた指の力が萎え、リュートは白目を剥いて、へなへなと崩れ落ちる。

「お、おい……」

シンドバッドはリユートを慌てて助け起こす。

「参ったな、こりゃ」

波止場近くの船乗り酒場でシンドバッドは目を丸くしていた。卓の向こうでは、リユートが旺盛な食欲を見せているのだ。肉、野菜、果物……来る料理を次々と平らげていく。急に倒れた時には、どうなることかと思ったが……、何のことはない、空腹だったのだ。シンドバッドは、その食べっぷりに呆れるを通り越して、圧倒された。「何だか、一週間、何も食べてないみたいだね？」
「三週間だ。正確には、水だけは飲んでいた。カビル砂漠では水も無かったがな」

最後にスープレ皿を両手で持ってズズと飲み干す。ふう、とため息。

「あのさあ、どうでもいいけど、礼ぐらい言っただけで欲しいな」

「命を助けてやった。当然の報酬だ。礼を言うならお前の方だろう」

なんちゅうヤツだ。

内心悪態を吐いたが、たしかに、銀仮面どもとあのまま戦っていたら、確実に殺されていただろう。恐怖が再び背筋を走る。

「奴らに並みの武器は通用しない。だが、あの初撃をかわせたのは、なかなか筋が良い」

どうやら褒められたらしい。シンドバッドは多少気を取り直す。

「ところで、いつもあんな物騒な連中に追いかけているのかい」

？ リユート姫

「姫？」

「テックウマルなんて、大仰な名前。大方どこかの王族のご息女なんだろう？」

リユートの眉が吊り上がる。テーブル越しに腕が伸び、シンドバッドの胸ぐらを掴む。食器と料理が音を立てて踊る。

「天空丸は快男児の血筋。ちゃらちゃらした姫など縁遠い」

「わかった！ わかったから！ みんな見てる、目立ってる」

周囲を見渡す。何かと他の客が注目している。先ほどの自爆騒動で客はピリピリしている。また、警邏の兵でも呼ばれてはかなわない。リユートは鼻を鳴らすと仕方なくシンドバッドを解放した。

「ところで、何で西の大陸に行きたいんだ？」

リユートが眉間に皺を寄せてシンドバッドを見やる。

「なあんだ。まだ疑ってるのかよ。じゃあ、こっちから言ってるあ。？ テンクー？とかいう究極のお宝を狙ってるんだろ？」

リユートの眼が開かれる。

「凶星だな。何でも手にした者は万能の力を得るとか。だが、恐ろしい魔物が守っていて、誰も手が出せない」

「商談成立だな」

リユートは満足げに頷くと、右手の人差し指の指輪から宝石を抜く。リユートが一瞬躊躇するのにシンドバッドは気づいた。両手のほとんどの指に指輪がはめられているが、宝石が残っていたのは人差し指だけ。これが最後の宝石だったのだ。

「これで航海の準備をしてくれ」

「綺麗だなあ」

受け取った宝石をシンドバッドは物珍しげに眺める。

ダイヤモンド

「金剛石だ」

「あのおっそろしく硬い石だな。インドで見たことがあるぞ」

「それを磨けば、このような輝きを放つ」

「ふうん。こりゃ、たしかに高く売れそうだ」

シンドバッドは知る由もない。この研磨技術が三世紀も先進の技術であることを。

「で、ひとつ相談があるんだが」

「何だ？ まだ不足か？」

「実は希代の船乗りである俺様も、海図がなければ幻の大陸にはたどり着けない」

「海図？ 持ってないのか？」

「ああ。だが在処は分かっている」

シンドバッドはケロリとした顔で答える。

食えない奴だ。

苛立ったリユートは、またもやシンドバッドの胸ぐらを掴んだ。

「では、どこにある？ 海図は」

「ぐあつ。く、苦しい…… アヴァカの野郎が持っている」

「アヴァカ？…… モンゴル西征軍の総大将か？」

リユートは驚きのあまり手を離してしまった。椅子を倒して尻餅をつくシンドバッド。周囲の客がまたシンドバッド達を見て、コソコソ話を始めている。

「海図と言っても宝玉の中に収められている。ある特別な方法で、その宝玉から海図を浮かび上がらせるんだ。？ 龍の眼？ とかご大層な名前が付いている。もともとはアッバース朝のカリフの持ち物だったんだが…… 王朝がモンゴルに滅ぼされた時に…… カリフとその一族は殺され…… その？ 龍の眼？ もモンゴルの大將フラグに奪われたってわけだ」

シンドバッドは、なぜか一瞬口ごもり、目を伏せた。

「で、フラグが死んで、今じゃ息子のアヴァカが、これ見よがしに首飾りにしてぶら下げてやがる」

「アヴァカから、その宝玉を取り返そうというのか？ 無茶な話だ。奴がいるのは、モンゴル西征軍の都・タブリーズだ。嚴重警備の王宮にどうやって忍び込むつもりだ？」

さすがのリユートも呆れたように肩をすくめた。

「ところが、アヴァカは、このバグダッドに来ている。見ただろ？ 市場で起きた自爆特攻。あんな騒ぎが日に何度も起こっていて、駐屯しているモンゴル兵の被害も尋常じゃなくなってきた。そこでアヴァカ自ら、視察と士気高揚のためにやって来ているのさ」

シンドバッドは身を乗り出して話を続ける。

「そこで、俺の頭と姫の身のこなしを合わせれば、きっと取り返せるはずさ」

「簡単に言ってくれな」

軽快な音楽とともに走り込んで来た踊り子達が腰をくねらせながらダンスを始める。顔はリユートの方を見ているが、シンドバッドの目は明らかに踊り子達の艶姿を追っている。

まったく、男って奴は……。

「このへんは戒律が厳しいんじゃないのか？」

内心呆れたリユートは皮肉たつぷりに言った。

「あの娘達はムスリムじゃない。異教徒の旅芸人達さ……」

ん？ 待てよ。この手があつたか。

シンドバッドの目に奇策が煌めく。そして、リユートの顔を悪戯っぽい目で盗み見た。

地中海に臨む港湾都市ハイファ。南北ほぼ真つ直ぐの海岸線の中央にヘソのように突き出た半島。ここに聖十字軍、最後の砦クルセイダーズクラック・ド・シュバリエデュオがある。

その周囲を完全包囲しているのはエジプトの精鋭マルムーク軍である。

「もはや、これまでか……」

聖十字軍指揮官は無念の表情で砦の尖塔に立っていた。一時は、聖地エルサレムまで侵攻した聖十字軍であつたが、マルムーク軍・隻眼の猛将バイバルスに追い立てられ、ついに西の境界に追い詰められていた。彼らの敗北は、同時にムスリム、モンゴルという蛮族どもの西欧への侵攻を許すことになるのだ。

対するバイバルスは、勝利を確信していた。戦術のプロ、傭兵の將は、つい先日もアイン・ジャルートの戦いにて、無敗を誇ったモンゴル騎馬軍団に打ち勝っているのだ。

「勝負あつたな」

勢いに乗るバイバルスは、全軍進撃の合図を送るべく、手を高く差し上げようとした。

その時！ 風を切る異様な音。同時に陣地のど真ん中で紅蓮の炎

が舞い上がった。吹き飛ぶ兵士や軍馬。

「何事だ！？ まさか……ギリシア火か！？」

ギリシア火とは、一種の焼夷弾で可燃性の高い液体が入った容器を投石機などで敵の頭上に浴びせかけるという中距離支援兵器だ。だが、マルムーク軍を襲ったこの威力はギリシア火のそれとは比べものにならない。

また風を劈く音。続く爆発と熱風。砦の包囲陣が崩壊しつつある。「どこから撃ってくる！？」

洋上からくぐもった爆発音。この焼夷弾の発射音だ。

「海だと！？」

港湾の沖に黒い影。船だ。とてつもなく大きな軍艦だ。

「船から火を放つてくると言うのか！？」

このような戦法、さすがのバイバルスも見たことも聞いたこともない。

また、陣地内で着弾。爆風と黒煙と兵士達の悲鳴が吹き荒れる。港湾で新たな喧騒が巻き起こった。今度は、大型のガレー船が港になだれ込んできているのだ。

「新手だと！？」

ガレー船の船首が左右に分かれ、中から兵士があふれ出てくる。あの砲船は、上陸部隊を接近させるための陽動作戦だったのだ。

それにしても勇猛果敢なマルムーク軍が陸戦で圧されているのがバイバルスには信じられなかった。だが、最前線を見遣ってバイバルス自身も総毛立った。兵士達は上陸部隊の異様さに気圧されているのだ。剣や鎧などは用いず、手にした棍棒に、ボロ布を身に纏っただけの野蛮人の群れだ。棍棒で兵士の頭をかち割り、あるうにかその肉に食らいついているではないか。この地獄から這い出して来たような悪鬼どもに、さしもの傭兵部隊も総崩れとなってしまうているのだ。

「いかん！ 撤退だ！」

破竹の快進撃を止められたのは口惜しいが、これ以上の犠牲を出

すわけには行かない。踵を返す瞬間、バイバルスは見た。先頭のガレー船の甲板の人影を。金色の鎧に緋色のマント、剣を静かに抜き頭上高く上げている。まさに王の風格。

「あれは！？ 聖王ルイ……ルイ九世」

バグダッドの元アッバース朝の宮殿では、クリルタイと呼ばれるモンゴルの大会議が開かれようとしていた。宮殿の大広間には、征西軍の各軍団長が居並んでいた。征西軍と言っても、その強大な組織力は国家と呼ぶに相応しく、事実イルカン国とも呼ばれていた。本来、クリルタイは皇帝の元に行われる会議であるが、征西軍でも、その偉容を示すべく大会議をあえてその名で呼んでいた。

そこへ大モンゴルの征西総司令官であるアヴァカが入ってくる。軍団長達が一斉にひれ伏す。身の丈六尺（一八〇センチ）以上は優に超える巨漢。浅黒い雄牛が二本足で歩いてくるような威圧感。何よりも彼の体内に流れる帝王の血が周囲を圧しているのだ。彼こそ、モンゴル帝国の始祖、蒼き狼・チンギス・ハンの曾孫なのである。

その太い首には、ジャラジャラと様々なアイドルをぶら下げている。征服した土地の神々もあれば、中には現在しのぎを削っているはずの聖十字もある。その中に一際輝くのは、父フラグがアッバース朝征服時に手に入れた？龍の眼？。

モンゴルは、元々は自然を崇拜する遊牧民。漠然と天を崇める。アヴァカにとっては、天の下では誰が何を崇めようが、特に問題ではない。むしろ、自分自身は、どん欲に、様々な教義を吸収してきたのだった。

「さあて、ムスリムどもの鼻っ柱をへし折る策は練ってきたらうな？」

どつかと玉座に着いたアヴァカが居並ぶ軍団長を鋭い目で睨み回す。皆、目を合わさないように下を向く。アヴァカが不機嫌な理由は痛いほど分かっている。アイン・ジャルートでマルムーク軍に不覚を取って以来、各地でムスリムの反乱分子が活発に動き出したの

だ。特にバグダッドでの自爆特攻により駐留軍に甚大な被害が出ているのだ。

軍団長の一人が恐る恐る挙手する。

「敵の敵は味方という言葉もございます。ここは聖十字軍クルセイダースと共同戦線を張ってみては？」

「馬鹿か？ 貴様は。やつらは金儲けのために神を利用している汚い奴らだ。あんな輩と誰が組めるか！？」

アヴァカの怒声に軍団長は頭が床にめり込むほどにひれ伏した。

アヴァカは、聖十字の慈愛に満ちた教え自体は認めている。むしろ、崇拜しているといえるだろう。だが、聖十字軍に関しては、その背後にいる連中……通商ルート確保のためには手段を選ばない強欲なジェノバの商人ども、彼らとグルになって聖戦の名の下に私腹を肥やそうとする聖十字教の司教ども……には虫酸が走る思いがした。それにまんまと操られる騎士達には、憎しみを通り越して哀れみすら感じていた。

クリルタイは重苦しい空気に包まれ、アヴァカはますます不機嫌になっていく。

「お困りのようですね？ 兄上」

突如、大広間に快活な声が響きわたった。同時に整った容姿の青年が入ってきた。無骨な兄アヴァカとは対照的だ。その背後には、鈍色の仮面を被った一団が整然と立ち並ぶ。日本遠征にも参戦した怪兵士達である。

「おお！ コンクルタイ！ しばらく見ぬうちに、すっかり元気になったようだな」

兄弟は久方ぶりの再会らしく、固く抱き合った。

「心配をかけた。よい薬師くすりしに巡り会えたからな。おかげで前より調子は良好だ」

コンクルタイの視線を追うと、仮面兵士達の背後に華奢な影が佇んでいる。

「女か？」

女薬師がしなやかに会釈する。モンゴルでも、ムスリムでも、さりとて西欧人でもない。一体どの生まれであろうか？ 幾分浅黒い肌に緑色の大きな目。外見は若く見えるが妙に堂々とした立ち居振る舞いだ。兎にも角にも美人である。

たしかに、これ以上の薬はないわい。

中近東の厳しい環境のためコンクルタイは長い間、病に伏していたのだ。アヴァ力は、何であれ最愛の弟が回復したことが嬉しかった。

「兄上。土産を持ってきた」

屈強な男達が円柱のようなものを抱えてきた。巻かれた絨毯だ。コンクルタイの合図で絨毯が大広間いっぱいに展開された。そこには、広大なユーラシア大陸が織り込まれている。そして、その大部分はモンゴル領土の印である蒼く染め上げられた糸で織られていた。コンクルタイは、その中央に仁王立ち、軍団長達にはつばをかけた。「貴様ら！ 見る！ 東は中国の東北部から西は東欧まで、ざっと世界の五分の三！ ここまで広がった我が領国。そうそう覆るものではないわ！」

「よくぞ言った！ コンクルタイ。いいか、我らはこの世の親分になるのだ」

広間に歓声が上がリ、今までの陰鬱な空気が消し飛んだ。

「閉会！ 宴の用意をせい！」

クリルタイの締めくくりは大宴会と決まっている。早速、美酒と山海の珍味が運び込まれる。

宴もたけなわのところ、艶やかなベリーダンサー達が登場する。やんやの喝采と手拍子に合わせて腰をくねらす踊り子達。

ダンスが最高潮になると、踊り子達が左右に分かれ、その中央より一際美しい娘が入ってきた。牝豹を思わせる野生美あふれる肢体だ。娘が歩き始めた。肩を怒らせ、胸を張って、のしのしとアヴァ力へ一直線に近づいてくる。

「なんじゃあ、ありゃ？」

踊り子が美しいだけに、その奇行にアヴァカも思わず首をひねる。踊り子達の付き人が、慌てた様子で娘の手を取り、引きずるように広間から出て行く。

付き人は娘を物陰に連れて行つた。言うまでもなく、踊り子はリユート。付き人はシンドバッドである。

「何をするか！　あと少しで大将の首根っこを掴まえたのだぞ！」

「ダメダメ！　あんなんじゃ、かえって怪しまれちまう。せめて、踊りながら近づけよ」

「踊り？　フン、剣舞ならば舞えるぞ」

「ダメだ、こりゃ」

頭を抱えるシンドバッドだったが、準備中の膳のそばに壺に入つた馬乳酒を見つける。

「こいつだ！　お酌ぐらいできるだろ。これでアヴァカの野郎に急接近だ」

シンドバッドの咄嗟の演出で馬乳酒を持たされたリユートは、仏頂面でアヴァカに近づいていく。

「おお、馬乳酒か！？　アイラグ気が利くな」

モンゴルの地酒にアヴァカは、ますます上機嫌に杯を傾ける。

だが、娘は馬乳酒の壺を左手だけで持つている。相当の重さのはずだ。アヴァカは、娘の空いた右腕の異様な緊張を察知した。

おかしいと気づいたアヴァカは娘に口づけをするフリをして押さえ付けようとする。

「何者だ？　バイバルスの刺客か？」

「違うな」

娘の灰色の眼光は鋭く、絶対不利にも関わらず、余裕の輝きを放っている。

「なるほど、コソコソした殺し屋ではないようだな。では目的は何だ？」

「さてね」

言うやいなや、娘はアヴァ力を抱き寄せるようにして、両の腕を極める。激痛が走る。

こ、こやつ!?

周囲には、アヴァ力が戯れに娘を抱きしめているようにしか見えない。やんやの喝采。

だが、焦っているのはリユートも同じだった。本来ならば両腕を極めた状態で投げるのが常套。投げ倒し、素早く首の宝石を奪って逃げる手筈であつた。だが、アヴァ力の何たる怪力。投げることも出来ず、リユート自身も身動きが取れない。長引けば不利だ。

「面白い術だな。これからどうする？」

苦痛に顔を紅潮させながらもアヴァ力は楽しげに囁いた。

コンクルタイの側にいた女薬師くすりしがリユートに鋭い視線を向けている。

あいつは？

その眼光に悪寒が走るリユート。女薬師がコンクルタイに異変を告げる。コンクルタイが慌てた様子で手近の兵を呼び寄せる。

その時、こぼれた杯の始末をしていた給仕の一人が、アヴァ力に飛びかかり、その首から宝玉をつかみ取った。

「いただき！」

あの小僧!?

アヴァ力はたしかに給仕の顔に見覚えがあつた。

一瞬、アヴァ力の腕の力が弛む。リユートは腕を放すと、とんぼを切るようにして、同時にアヴァ力の厚い胸板を蹴り上げる。そのくらいの一撃では微動だにしないアヴァ力。だが、リユートは、その反動で逃げる距離を稼ぐ。

「何やつだ!?! 名を聞こう」

「我が名はリユート。天空丸龍斗」

「テックウマル!?! まさか」

その名を聞いて驚愕したのはアヴァカよりもコンクルタイの方だった。女薬師がコンクルタイに何事か耳打ちする。

「無論だ。逃がすわけにはいかぬ！」

大広間を駆け抜け、リユートは廊下へ飛び出す。

「こつちだ」

先に逃げたはずのシンドバッドが廊下の角で手招きしている。

「馬鹿な。私は大丈夫だ。先に逃げていればよいものを」

「女の子を一人だけでおいていけるかい！」

「私を女扱いしないでいただきたい」

「その格好で？」

ベリィダンサーのあられない姿。リユートの顔が怒りと恥ずかしさで朱に染まる。

「いくぞ！ リユート姫」

「姫は止める」

シンドバッドに急に手を握られ引つ張られる。

「お、おい」

「ここは、俺の庭みたいなもんだ。抜け道ならいろいろある」

言うや、壁の隙間に手をやると隠し扉になっている。中は真っ暗な通路。

「さすがの快男児も、この闇じゃ見えないだろう。しっかり掴まってるんだぜ」

シンドバッドは闇の中でもズイズイと進んでいく。リユートは、はぐれるわけにもいかず、握った手に自然と力がこもる。シンドバッドは姿こそ華奢な感じだったが、掌はリユートよりもずっと大きく、そして温かかった。

「さつき庭と言っていたな。もしかして、ここに住んでいたことがあるのか？」

リユートの問いに、シンドバッドは黙ったままだった。心なしか足早になる。

まあ、いい。人それぞれだ。

リユートは、それ以上何も聞かなかった。

二人は隠し通路を抜けて、広大な中庭に出る。ここには王家専用の礼拝堂モスクがあり、その中央には尖塔ミナレットがそそり立っている。幸い人の気配はない。

「しめしめ。ここから城壁を抜ければ……」

突如、城壁の上に立ち上がる影、影、影。無表情の鈍色の顔、仮面兵達だ。

「あ、あいつら、あの時の暗殺者アサシン」

しかし、今度は数が違う。数十人はいる。しかも手には刀、槍、弓矢と完全武装。二人はじりじりと追い詰められる。

「逃げ場はない！ 諦めよ」

アヴアカとコンクルタイが嘲笑う。

「ばれてやがったのか」

「どこが庭だ……」

二人は礼拝堂に向かって走り出す。ここに逃げ込めば、多少の間は稼げる。だが、不幸にも入口は反対側。二人は礼拝堂の壁を背にして、進退窮まってしまった。

「畜生……ここまでか」

「どうした、シンドバッド。諦めが早いな」

リユートは、腰に巻いていた銀の帯をサッと外す。

「お、おい！？」

下履きが丸見えになるのもおかまいなしのリユート。あまりのことにシンドバッドの方が狼狽した。

左手の甲の蒼玉が輝く。

また光った。

その光を受けるや、銀の帯は、突如、ヘビのように鎌首を上げ、するすると中空へ伸び上がっていく。

「掴まれ！ シンドバッド」

二人が掴まった状態でも帯は、さらに上へ上へと伸びていく。

「ハハハッ！ こいつぁ、魔法のロープだぜ」

シンドバッドは大はしゃぎだ。まるでおとぎ話か神話の世界だ。

「おのれ！ 面妖な！ 追え！ 追え」

アヴァカの号令で、兵士達がおっかなびっくりロープに取り付いていく。兵士が引つ張ると、ロープは手応えなく、ただゴムのように伸びるだけ。追跡は不可能だ。

ロープの先端が、礼拝堂の尖塔の上部へ到達する。二人は尖塔最上階のテラスへ降り立つ。リュートがロープを引つ張ると、もの凄い勢いで元の帯へと戻る。下方で必死によじ登ろうとしていたモンゴル兵は弾き飛ばされてしまった。

だが、鉄仮面は四方から尖塔をクモのようによじ登ってくる。

「なんて、しつこい奴らだ」

「ふ、悪あがきもここまで。大人しく捕らえられるか？ 墜ちて死ぬか？」

嘲笑うコンクルタイ。

二人は、またもや逃げ場を失ってしまう。だが、なおも平然としているリュート。

今度は、帯を床に置くと、左の掌をあてがう。再び蒼玉が発光すると、細長い帯が横方向へ拡大していく。みるみる銀色の長方形の板が出来上がる。リュートは板の端を持っておもむろに担ぎ上げる。板はしなやかに上空の風をはらんで浮力を得る。

「掴まれ！ シンドバッド」

言われるままに浮き上がった長方形に掴まるシンドバッド。

風に乗り、テラスから飛び出す銀色の長方形。二人をぶら下げたまま夜空へ滑空する。

「すげえ！ 今度は空飛ぶ絨毯だぜ」

銀色の絨毯は、呆然とするモンゴル軍団を尻目に夜のバグダッド郊外へと消えていく。

「逃げられたな兄上。そして、？ 龍の眼？……カリフの宝も奪われた」

「あれには、何やら重大な秘密が隠されているらしい。親父殿がよく言っておった」

意外にもアヴァカはケロリとしている。

「と言つても、秘密の引き出し方など皆目分かん。わざわざ盗みに来たところを見ると、奴らは使い方を知つとるんだろ。むしろ奴らを泳がせて、使うところを見定めた方が得策というものだ」

「さすがは兄上。すでに追っ手は放った」

「いつもながら上出来だ。コンクルタイ」

「フフフ、兄上。何だか嬉しそうだな」

「久々に退屈しのぎが出来そうだ。あの女……テंकウマルとか言つたな」

そして、あの小僧……ずいぶん大きくなつたな……

第二章 疾風の船出

第二章 疾風の船出

日本列島より南方約三三〇里（千百キロ）の太平洋上に点在する三十余の島々。後に小笠原諸島と呼ばれる群島がある。その東方の沖合に一艘の漁船が浮いている。船上には漁師風の男が一人、忙しく動き回っている。纏っている革衣は明らかに天空丸と同じ材質のものである。

男は海中に重り付きの綱を投げ入れる。綱には五十間（九十メートル）ごとに結び目が付いており、それにより海底の深さが分かるようになっていいる。通常この海域の水深は五千五百間、つまり九千メートルの海溝が南北に延びているのである。

だが、おもむろに綱の動きが止まった。重りが海底に着いたのだ。男の顔に驚愕の色が浮かぶ。測量の結果は三千間（五千五百メートル）。ここ数週間の測量で海底が三千五百メートルも浅くなってしまったことが判明したのだ。

急激なる海底隆起。いや違う。徐々にだが確実に巨大な何かが浮上しつつあるのだ。

男は船に積んであった籠から伝書鳩を取り出し、空へ放つ。鳩は真っ直ぐ北を、日本本土を目指して飛んでいく。

ヤッフォ。地中海に臨む港町で、古代からエルサレムの貿易港として栄えている。すでに日は沈みつつあり、白い石造りの建物を茜色に染め上げている。

夕映えの中を急ぎ足で進む影二つ。シンドバッドとリュートである。モンゴルの追跡を振り切り、西進、地中海へと到達したのである。

この地は、まだ辛うじてムスリム勢力圏内である。だが、先日

ハイファでの敗退で聖十字軍が南下して来る、という噂で持ちきりである。にもかかわらず商人達に国境はないらしく、港町の市場は東西の貿易商達で前にも増して賑わっている。

シンドバッドはベネツィアの商人達が多いのに気づく。おそろいの羽根飾りに鼻が異様に高い仮面は、鳥のようにも見える。大方、聖十字軍にくっついて通商路を独占しようという魂胆なのであろう。「コソコソしやがって」

だが、リユートは彼らの商人とは思えない鋭い眼光にただならぬものを感じた。明らかに二人を窺っている。リユートが立ち止まると、鳥仮面はそそくさと走り去った。

ベネツィアの商人達は、馬を駆り、沿岸の街道を北へ向かってひた走る。彼らは、二十哩マイル（約八十キロ）の道のりを経て、港町ハイファへと入る。

夕闇の港に小山のようにそびえる影。これこそ、バイバルスの軍を退散させた火を噴く戦闘艦だ。通常の船と異なり、甲板中央に大きな屋敷ほどもある艦橋がそそり立っている。鳥仮面の商人達は、この黒い巨艦の中へ吸い込まれていった。

艦橋には長身痩躯の騎士が彼らを待っていた。胸に縫い取られた獅子の紋章は英国騎士の証である。堂々とした体躯に相反した女性と見間違うばかりの美しい顔立ち。彼こそ黒い戦闘艦の艦長、ジヨナサン・シーガードである。

シーガードは、到着した鳥仮面の報告に静かに聞き入っていた。「紅い革鎧の戦士…… テンクウマルとは、思わぬ大魚がかかったようだな」

シーガードは満足げに呟いた。
「ルイ王がお越しです」

別の鳥仮面が告げる。シーガードは静かに頷くと甲板へと降りていった。

聖十字軍の指導者・ルイ九世が側近達を連れて甲板へ乗り込んでくる。

ルイ王は黄金の鎧と緋色のマントに身を包み、腰には大剣をぶら下げている。シーガードは、常日頃聞いていた清貧の王というイメージからは、かけ離れた武人の猛々しさを感じた。

「偉大なる聖王ルイ。わざわざお越しになられるとは。お迎えに上がりましたものを」

王の威風に自然跪き、頭を垂れるシーガード。ルイ王は穏やかにシーガードを立たせると、子供っぽく笑った。

「いや。余も、この見事な船が早く見たくてな」

そう言つと王は上機嫌で砲台や艦橋構造物を見回した。

「近くで見ると、ますます面白い船よのう」

「さ、海風がお体に触つてはよくありません。船室に宴の用意をしてございます」

鳥の仮面の召使い達が、王と諸侯達を巨艦の中央にある作戦室へと招き入れた。戦時用の殺風景な部屋だが、そこに宴の用意がされていた。

「それにしてもクラック・ド・シュバリエの戦いは見事なものであった。海からの援護がなければ、上陸作戦もあれほど上首尾には進まなかったであろう」

上座に落ち着くと、ルイは上陸作戦でのシーガードの活躍を褒め称えた。

「恐悦至極であります」

シーガードはうやうやしくこうべを垂れた。

「何よりも、このシーガード、王のお元氣な姿を拝見出来たことの方が嬉しく思います」

「左様。余もあの時は、まさに死線をさまよった」

ルイは遠い目をした。王は、八回目の聖地奪回遠征の途中、疲労困憊から高熱を出し北アフリカのチュニスで病の床についた。症状は重く、誰もが、その死を予感していた。

「このように回復出来たのも、まさに神の思し召しと言えよう」

「まさに。日頃より信心深い王なればこそ。私も肖りたく思います」

「ところで、シーガード殿。貴公は神の声は聞いたことがあるかね？」

王の試すような眼差しがシーガードを捉えた。

「私は、神を信じております。けれども、その声を聞いたことはございません」

シーガードは目を反らさず、あえて飾らぬ答えを返した。

「貴公は正直な人だ」

王は満足げに頷いた。

「だが、余には聞こえるのだ。常に、今この時も」

王が目を細め？何か？に耳を傾けている。周囲の者も思わず耳をそばだてるが、船体を叩く波の音だけが聞こえるのみ。

やがて王は静かに目を開けると、恍惚の表情で語り始めた。

「そして、余は見たのだ。大天使の姿を。あのチュニスで死の床に就いていた時に。後光を背負われ、誠にお美しい姿であられた。太陽よりも明るく、だが、不思議にも直視しても眩しくはない。その中から一条の一際強い光が余に放たれた。しなやかな鞭のような光で、それに打たれた途端、不思議なことに余の体中に精気が満ちあふれたのだ。その時に出来たのが、この聖痕よ」

襟を緩めて、首筋を露出させるルイ王。そこにはバラの花にも似た赤黒い痣が浮かび上がっている。

周囲の騎士達からどよめきの声が漏れる。中には思わず十字を切る者もいる。

「では諸君。この聖痕に誓ってくれるか？」

恍惚の表情は急転、武人のそれへと変わっていた。

「今度こそ、異教徒どもをこの世から殲滅する、と」

王は腕を突き上げ、深紅のマントが血を浴びたように輝いた。

「おおおおお！」

感極まった側近達は一斉に雄叫びを上げた。

「それにしても貴公のこの黒い船、見事なものだな。名はあるのか？」

高揚した雰囲気です宴が催される中、シーガードを招き寄せて、ルイ王が尋ねた。

「リヴァイアサン。ベネツィアの艦師に作らせました」
シッフマスター

「リヴァイアサンとは、よく名付けたものよ。しかも貴公の名はヨナ（Jona）。洒落たものだ……主は大きな魚にヨナを？み込ませた。ヨナは三日三晩、魚の腹の中にいた」

「『ヨナ書』第一章ですね」

「しかし、最近リヴァイアサンを悪魔の使いと解釈する筋もあるようだ」

「それは、異端審問の行き過ぎた解釈でしょう。本来ならば……驕り高ぶる者すべてを見下し、君臨する誇り高い獣……」

「『ヨブ記』第四十一章か。フッフ、貴公とはうまくやっていけそうだな」

ルイ王は、愉快そうに笑った。

「あの発する火の玉は、ムスリムどもが使っ？ギリシアの火？をも上回るものだ」

「火薬を使用して鉄の弾丸を撃ち出しております。しかも主砲塔は左右に回転し、あらゆる方向からの敵を迎え撃つことが出来ます」

すでに、ルイ王の命によりアドリア海には弟君のシャルル率いる別艦隊が集結、マルムーク勢を挟撃する構えであった。戦いは陸地における戦術だけではなく、海をも視野に入れた戦略規模へと急速に拡大しつつあった。この戦況の中、リヴァイアサンこそは、来るべき艦隊戦をも想定した戦艦なのだった。

「口からは火炎が噴き出し火の粉が飛び散る。煮えたぎる鍋の勢いで鼻からは煙が吹き出る……か、まさにリヴァイアサンだな。この戦いの要として期待しているぞ」

「ありがたきお言葉」

シーガードが一礼する。

それを見ていた側近の一人が、傍らの大柄な騎士に、わざと大きな声で話しかけた。

「戦は陸が主体、剣術が全て。腕が無ければ、な？」

話題を振られた傍らの巨漢はすでにかなり酔っている様子で、さらに怒鳴り散らす。

「船は大層ご立派なようだが、腕っ節は細そうですね！」

シーガードは、王に一礼すると、すっと、その巨漢の側近の前に歩み寄った。

「聞き捨てなりませんな。私もシーガード家の男、侮辱は許しませんぞ」

シーガードの言葉に、大柄な騎士はかえって調子づいた。細身のシーガードを上からのぞき込むようにして、嫌みたっぷりにニタニタと笑った。

「お顔立ちも麗しく、ご婦人方には大層喜ばれそうですね。ゲハハハハ」

突然、シーガードの腕が巨漢の首に蛇のように絡みつく。真つ正面から挑まれたにも関わらず、巨漢はその速さのために避けることすら出来なかった。首を中心に半回転。巨漢が宙を舞い、背中からもんどり打つ。杯や皿が卓上で踊る。シーガードは、素早く剣を抜くや、仰向けに倒れた男の鼻先に突きつける。

「前言、撤回願おうか？」

荒技を繰り出したにも関わらず、シーガードは息も乱していない。ただ、その眼だけは殺気を帯びていた。

「ハハハハハハ、見事。見事」

ルイ王の笑い声と拍手が、息詰まる緊張を解きほぐした。

「だがなシーガード殿、そやつから詫びの言葉は、すでに聞けぬようだぞ」

見れば、巨漢は失神失禁。口から泡を吹いてだらしなくのびている。話を振った側近の方は、決まり悪そうに卒倒した巨漢をよろけ

ながら引き摺っていく。

室内は爆笑に包まれ、宴は最高潮へと達した。

「ところで、シーガード殿」

宴もたけなわとなったところで、ルイ王が再びシーガードを招き寄せる。

シーガードは、華奢な風貌とは反比例に、酒には滅法強い。宴はすでに三時間ほどになるが、ルイ王も全く酔っている気配はなかった。

「西の大洋をご存じかな？」

「当然でございます。我が英国は四方を海に囲まれた島国ですのでわれわれは大西洋と呼んでおります」

「その果てに大陸がある……という噂を聞いたことがあるかな？」

「大西洋の果てへ挑んだ船乗りは数多いですが、帰還した者はわずかと聞いております」

「さても恐ろしい」

ルイ王の口調は明らかにおもしろがっている様子だった。

「何でも悪魔が守っている土地があるとか？ 一体、悪魔は何を守っているのか？ よほど大事なものののだろうか。博学なる貴公ならば知っておるのではないのかな？」

探るような、試すような王の目つきに、さすがのシーガードも心の中を見透かされているような気味の悪い感覚に襲われた。

「……さあ。存じ上げません」

「そうか……貴公でも掴んでおらんか」

「ただ、心当たりはあります。唯一人、生還した船乗りがいたそうです」

「ほあ。その者の名は？」

「バグダッドのシンドバッド。たしか今から二十年前の話とか」

「随分と昔の話だな。相当の老齢であろう」

「ええ。六十歳を超えても航海を続けたという老練な船乗りだそう

ですが、たしか三年ほど前に他界したとか」
「ふむ。天に召されたか……。残念だな」

戦勝の祝宴は終わり、ルイ九世と側近達は上機嫌でリヴァイアサンを後にした。

「王は変わられた」

ルイ王との会見を終えたシーガードは、世間の風評に対して違和感を禁じ得ない。

フランス国内では、貧しき者、病に冒された者に対して自ら施しを与え、戦地では、例え敵の異教徒といえども、女子供、無抵抗な者に対しては無益な殺生を禁じた。ゆえに人は、ルイ九世を「聖王」と呼んだのである。

だが、今は、聖十字以外は邪悪なる異教徒と断じて、情け容赦ない無差別攻撃を加えている。逆にこの強さ、激しさが、全ヨーロッパを対ムスリム、モンゴルへとまとめあげている。イギリス、ドイツ、ビザンツ帝国も、今のルイ王の勢いには、一目も二目も置き、従っているのだ。

そして、先ほどのルイ王の言動が、さらにシーガードを悩ましていた。

「なぜ、ルイ王は大陸に興味を持つのだ？ 悪魔の大陸に……」

一夜明けたヤツフォ。リユートはシンドバッドに郊外のとある家屋へと案内された。

扉を開けると階段が地下へと通じている。石段を降りるにつれ硫黄、香料、アルコールの臭いが鼻を襲う。

地階に着くと、天井の低い、ひんやりとした空間が広がっていた。酒蔵か、食料貯蔵庫に使われていたのだろうか。ランプの灯りで室内はボンヤリと明るい。数卓のテーブルが置かれ、その上には調剤や冶金に使用される器具や薬品のビン、巻物や書物、怪しげな生き物の骨格標本、などが所狭しと置かれている。それらの真ん中

で長髪有髭の老人が忙しく動き回っていた。

「おお！ 戻ったか、シンドバッド」

仙人のような老人はシンドバッドを見て破顔した。

「早速、船出の準備だ」

「ほほ、すると、宝玉を手に入れたのか？　？龍の眼？を」

懐から宝玉を取り出すシンドバッド。老人は、天眼鏡を手にして、宝玉を調べる。

「まさに本物だ。しかし、よくもまあ、モンゴルの連中から取り返せたな」

「それは、ここにいるリュートのおかげさ。今度の航海のスポンサーだ」

「リュート？」

老人は傍らにいたリュートに目を留める。

「ほほう。別嬪さんじゃな」

リュートの片眉がピクリと上がる。シンドバッドが慌てる。どうもこの少女、女扱いされるのを極端に嫌う。

「ワシの名はメランシアス。生まれは、ギリシア。科学者であり、哲学者であり、芸術家であり、詩人でもある」

「いわゆる何でも屋だな……ああ、詩はやめてくれよ。長くなるから」

「リュートさん。見たところ東洋人だな。あんた、どこから来なされた？」

「シャングリラ」

「なに？　まさか、あのヒマラヤの桃源郷か？　姓は？　リュートだけじゃないだろ」

問われたリュートは、待ってましたとばかりに親指で自らを指す。

「我が名はリュート。天空丸龍斗」

「テックウマル！？　女のテックウマル、そんな馬鹿な」

驚愕の声を上げるメランシアス。だが、？女のテックウマル？の言葉に、今度はリュートの両の眉が吊り上がる。

「メランキアス！　メランキアス！」

けたたましい声が響きわたると、部屋の奥から白いオウムが飛んでくる。

「またお前か！？　わしゃメランシアスだ！　鬱陶しい」

オウムはメランシアスの抗議などどこ吹く風で、平然とシンドバツドの肩に止まる。

「こいつは、バブガウ。俺の祖父様じいさまの代から船に乗っている。言わば大先輩だいせんぱいだな」

「お祖父様おじいさまも船乗りだったのか？」

「あ、ああ。シンドバッドは代々船乗りの家系さ」

シンドバッドは、なぜかちよつと口ごもる。

「ワシもシンドバッドの祖父様じいさまとは、古くからの友人でな。言わば腐れ縁じゃな」

メランシアスが相づちを打つ。

「そんなことより、宝玉の奇跡とやらを見ようじゃないか」

メランシアスは地下の暗室に香を焚き、白く薄い煙を漂わせた。

スリット状の天窓を調節すると、日光が差し込んできた。光の中央に宝玉を置く。宝玉を通して乱反射した光が香の煙の中で複雑に交差し、宙空に像を結んだ。直系一メートルほどの光で構成された球体が忽然と出現した。

「な、何だ？　この玉は？」

「これが？　地球？、わしらの世界だ。世界が丸いってのはギリシアでは常識じゃぞ。かのエラトステネスは太陽の高さからこの巨大な球体の周囲距離も算出しておる」

蘊蓄うんちくを述べながらも、手慣れた様子で測距儀などを使って素早く距離や位置を計測していく。

「これは、ペルシア湾か？　この大きいのが地中海だな」

シンドバッドも海図で見慣れた海岸線を確認して、ようやく合点がいったようだ。

メランシアスが、宝玉の向きを変えると、球体も向きを変える。

さらに東方に広がる大平原が見え始める。

「北の永久凍土、南のインドやらの半島部分、それ以外のただっ広い地域が、全て大モンゴル帝国の現在の領土ってわけだ。ざっと世界の五分の三といったところかの」

「冗談だろ……」

シンドバッドは強大過ぎる敵に茫然自失の状態となった。

ヤッフォにシンドバッドとリユート、その北のハイファに聖十字^{クルセイダ}軍、そのさらに北へ五十哩^{マイル}（約二百キロ）離れた港湾都市トリポリ。この町へ弟のコンクルタイに誘われて、モンゴル征西將軍アヴァカが訪れていた。

地中海沿岸の南北わずか八十哩^{マイル}の直線上に、世界三大勢力による大戦争を左右するかも知れないキーマン達が立ち並んだわけである。これは果たして単なる偶然なのか？

そんな状況を知る由もないアヴァカの胸中は、不平と怒りが鬱積^{鬱積}していた。

トリポリの領主であるボエモン公は聖十字軍でありながら、モンゴルに対し同盟関係を結ぼうと躍起になっている。

「聖戦とか言っても、敵味方関係なく尻尾を振りよる。全く節操のない奴らだ」

海辺の街の湿った風が運んでくる饅^{饅頭}えた匂いが鼻を突く。アヴァカには、潮風ですら疎ましく思えた。幼少期を過ごした乾いた草原の薫りが恋しい。

「兄上のお腹立ちはごもつともだが、奴らも本国から離れて久しい。奴らなりの生き残りの術を考えているということさ」

アヴァカの心情を察したコンクルタイがなだめるように言う。

「それより面白いものをお見せしよう。兄上のご機嫌も治ると思うぞ」

コンクルタイがアヴァカを案内したのは高い塀を巡らせた厳重警備の区画だった。いくつかの検問所を経て、堀の中へ入る。

最後の大扉が開かれた途端、アヴァカは圧倒的な光景に言葉を失った。

「こいつは……」

数百、いや千を超える軍船が並んでいる。その多くは建造中で、木を切り、削り、組み上げる数々の音が轟音となつて鼓膜を打った。「どうだ？ 兄上」

「長患いと心配しておつたが、影でコソコソとこんなことをやっておつたのか？」

「ムスリムの船大工は優秀だよ。高麗あたりのポンコツとはワケが違う。あれでは、日本への遠征もどうなったことやら」

「帆柱が多いな」

「さすがだな、兄上。見るべき所を見てくれる。こいつは外洋航行用だ。自在に風を掴んで、どんな方向にも進める」

「外洋？」

「兄上、陸の制覇では、世界を治めたことにはならない。これから海の時代だよ」

海……か。

平原での騎馬の戦いしか知らなかったアヴァカにとっては、イマイチピンとこない。だが、病弱だったコンクルタイが逞しく成長したことに満足していた。

「海洋国となれば、モンゴルはもっともっと大きくなる。？世界の親分？としてね」

「ははは、勢いで言った言葉、よく憶えていたな」

「あれは良い言葉だ」

「ただ、ぶっ壊して、占領して、言うことをきかせるだけじゃ、世界を一国としてまとめられんだろう。親分つてのは、子分どもを占めるだけじゃなく、面倒も見ろだろう」

「世界の面倒をみる？ ハハハハ、兄上らしい」

「ところで兄上。テंकウマルが、あの宝玉、？龍の目？を狙った

か、分かるか？」

造船所を一通り案内した後、休憩の茶をすすりながらコンクルタイが言った。天空丸の名を聞き、アヴァカの太い眉が吊り上がる。

「あれには、この海（地中海）の遙か西に広がる大洋のさらに西にあるという幻の大陸への海図が記されているらしい」

「幻の大陸……この世にはまだ見ぬ土地があるのか？」

「そのとおり。この世界は広い……我らが見たこともない世界がある」

「で、その大陸に何がある？ あのとクウマルとかいう小娘は何を狙っている」

「恐るべき力を秘めた宝。それを手にした者は、あらゆる知恵と凄まじき戦力を同時に手に入れることが出来るという」

「幻の大陸に、秘宝か……うふふ、はははは！」

アヴァカが我慢できずに吹き出した。

「何が可笑しい！？」

コンクルタイはあくまで真剣で、少し怒ったように声を荒げた。

そのふて腐れたような顔。子供の頃と変わらん。

「いや悪い、悪い。いつも理を説くお前が、珍しく夢のような話を熱く語るのではな」

「夢ではない。俺はまじめだぞ。その力を手に入れば、世界を手にすることも造作ない……グフツ！」

まくし立てたコンクルタイが荒く咳き込む。

「だ、大丈夫か！？ まだ治っていないのではないのか？」

「大丈夫。薬師くすしの治療は完璧だよ」

薬師？ ああ美しい女が。

アヴァカが見回すと護衛の兵の中に影のように佇んでいる。こちらをじっと見ている。アヴァカは、何か自分が監視されているような薄気味悪さを感じた。

コンクルタイは息を整えるとアヴァカをキツと見つめた。

「……兄上。兄上は、なぜ天下を取ろうとしない」

「埒もない。俺はそんなタマではない」

「兄上ならば、フビライをも倒せる」

「滅相もないことを言っな！ 俺はフビライ叔父に忠誠を誓っている」

「なぜ、そんなにフビライにへつらう？ ……俺のためか？ 俺のせいなのか？」

「馬鹿ッ！」

憤怒の表情のアヴァカに気圧されたコンクルタイは、思わず口をつぐんだ。

「俺の望みは、この帝国を世界一にしたいだけだ。そのためにフランクやムスリムと戦っている……お前のことなど関係ない」

「……すまない……兄上」

アヴァカは地中海を眺めやった。

「いいだろう……この海も取って、大モンゴルを？世界の親分？にしてやるっ」

メランシアスの研究室では光の球体地図の探究が続いていた。

「よろしいか？」

メランシアスに替わって、今度はリユートが光の球体をを西の方へ回す。大海原が広がる。広い。これに比べたら、地中海など湖に等しい。

その海原を断ち切るように南北に延びた大陸が出現する。奇妙な形の大陸だった。北と南が肥大し、ちょうど中間点の部分が、蜂の胸部のようにキュッとくびれている。

「これが、悪魔の大陸……」

「ここが、私の目的地だ。行けるな、シンドバッド」

「ああ、行こう。シンドバッドの名に賭けてな」

必ず行つてやる。

シンドバッドは心の中でもう一度呟いた。自らに言い聞かせるように。こんな小さな玉にすら、大きな力が詰まっているのだ。きつ

と、この大陸にはもつと凄いお宝が眠っているに違いない。シンドバッドの心は、すでに大海にあった。

リユートは、さらに地球儀を回転させる。新大陸を抜け、また大海原が広がる。太平洋だ。先ほどの海、大西洋よりもさらに広大である。

「まだ海があるのか……」

シンドバッドは、自分がひどく矮小な存在に思えてきた。

小さな島々が点在する大洋を越えると、先ほどの大モンゴル帝国の大陸が迫ってくる。球を一周したようだ。リユートは大陸の東端を見ている。大陸の端に引っ掛かっているような列島を見つめている。

「その細長い島は何だ？」

「ジパングじゃな」

シンドバッドの問いにメランシアスが答える。

「東西に長く延びた列島は、四季折々の風物が美しい国と聞く」

「私のもうひとつの故郷。生まれたのはヒマラヤだが、この地も思ひ出深い」

リユートは何かを吹っ切るように球体地図を回す。再び、皆の視界はユーラシア大陸の中心へと戻ってくる。球体地図は山脈や平野の高低も視覚化されており、インド北部の世界最高峰もクッキリと分かるようになっていた。

「これがヒマラヤ山脈だ。テングウマルの故郷じゃな」

メランシアスの言葉にリユートは静かに頷く。

シンドバッドはヒマラヤからバグダッドまでの道のりを目で追いながら、あらためて、その長さ、険しさを実感した。

「こんな道のりをたった一人で旅してきたのか……」

「一人ではない」

「仲間がいるのか？」

シンドバッドの問いに、リユートは静かに首を振った。

「……死んだ」

リユートのいつもの毅然とした態度が、一瞬だけ崩れ、自分とさして歳の変わらない少女に見えた。まずいことを聞いた。シンドバッドは居たたまれない気持ちになった。

日が陰り、光の球体地図は忽然と消えた。

球体に集中するあまり三人は、天窓の影から室内を窺う男の存在に気づかなかった。布で顔を覆っているが、陽光が眼の部分に反射して鈍色の輝きを放つ。

「これで目的地も分かった。上出来、上出来」

メランシアスは、緯度経度などを記録した紙束を無造作に丸めて満足そうに頷いた。

「おおっと！ 言い忘れたが、実はなワトワートの使いが訪ねてきおった」

「え、ワトワートのおっさんが!？」

シンドバッドの顔が輝く。メランシアスが手渡したメッセーシカードにはコウモリの紋章が描かれている。どうやら夜会の招待状らしい。

「ワトワート
蝙蝠？」

リユートが脇からのぞき見て怪訝そうな顔をする。

「アッバース朝に代々仕えてきた大商人さ。昔からの馴染みでね。きつと味方してくれる。港にご自慢の宮殿船が停泊しているらしい。豪勢なこった」

「二人で行ってきたらどうじゃ？」

「おお、いいねえ！ どうだい？ リユート」

また、宴席か……。

リユートの脳裏にクリルタイでの屈辱的な格好が浮かんた。

「メランシアスは？」

暗に行きたくないと言いたいリユートはメランシアスに尋ねた。
「わしは留守番じゃ。それにフランクが付いていって、座が乱れ

るじやる」

「あんたはフランクじゃない。ギリシア人だ」

「ムスリムにとっては、西欧人はみんなフランクさ。いいから、いいから、羽を伸ばしてこい。それにワシは出港の準備とか、いろいろあるでな」

小笠原諸島沖の海上。天空丸のシンパは、今日も水深の測量をする。

重り付きの綱を投げ入れる。わずか数十秒で綱の動きが止まる。着底？ 測量結果は、わずか百間（^{けん}一八〇メートル）。ここは海溝の上のはずだ。

男は、もう一度太陽の位置を確認するが間違いない。尋常ではない海底隆起だ。

この危急の事態を再び本土に知らせるべく伝書鳩の足に文を結びつける。

突如、海面が泡立ち、盛り上がる。男の顔が恐怖に歪む。脱出するにはもはや手遅れ。男は一切を諦めて空中へ伝書鳩を放り投げる。それと、ほぼ同時に海面を割って何物かが船を空中へ突き上げる。その衝撃で男も船も木っ端みじんに四散してしまった。

落日のヤッフォの港に忽然と宮殿が出現した。無数の松明が焚かれ、ワトワートの大型船を夕闇に幻想的に浮かび上がらせた。ムスリムの大商人の誘いを受けて、きらびやかに着飾った貴族、富豪、軍人達が棧橋を渡っていく。

薄汚い船員姿のシンドバッドと、奇妙な革衣のリユートは、たちまち守衛に呼び止められる。だが、招待状の効果は絶大で、下にも置かない歓待を受け、そのままワトワートの待つ、メインデッキへと案内された。

「若、よくぞ来られました」

樽のように太った大商人がシンドバッドの肩を抱く。

「何とも立派な船だ。繁盛してるようだな。ワトワート」

「お世辞は抜きですよ。ささ、こちらへ」

上座に迎えらるるシンドバッドをリユートは不審そうに見る。

この歓待。こいつ……何者だ？

「若、あちらの方は？」

ワトワートがリユートを物珍しげに見る。

「リユート姫だ。異国から来られた」

「おお！ 姫君でありましたか？ 随分と勇ましい出で立ちで」

姫と呼ばれて、また頭に血が上ったリユートは、シンドバッドへの詮索を中断した。

ワトワートが手を打ち鳴らし、酒宴が開かれる。銀の大皿に美味八珍の御馳走が盛られ、次々と運び込まれる。先日のクリルタイなど、この豪勢なメニューに比べればただの田舎料理である。

さらに続いて、煌びやかな踊り女おどめが走り込んでくる。透けるように薄い衣の下には金糸銀糸で織られた胸当て、下穿きを輝かせて、艶めかしく身体をくねらせる。

リユートは、その霞もない姿に自らを重ね合わせ、内心赤面していた。

よくも、あんな格好をしたものだ……。

？ 龍の眼？を奪回するため、前進あるのみで選んだ手段だったが、あの時の踊りは、とんだ赤っ恥だった。

傍らのシンドバッドを見ると、早くも酔いが回っているらしく、明らかに、自分を見るのとは違った目で踊り子を仰視している。

「やっぱ、ホンモノは違うなあ」

悪かったな……ホンモノではなくて。

リユートは心中毒づいた。元々、武道専門で舞ったこともない。その必要もない。だが、あの少女と自分を比べられているような気もして無性に腹が立った。

「ワトワート、あの娘、どこで手に入れた？」

「おお、ルウルウですな。若は、相変わらずお目が高い。ハマの町

の奴隷市場でラクダ一商隊分で競り落としました」

リユートはまるで女をモノのように扱う男達の態度にも嫌悪を憶えた。バグダッドの路上で売られていた白人の娘の行く末も思い起こされる。一方では口が不自由というだけで不良品のように扱われ、一方では大金で取引される。

私は……快男児だ！

リユートはいたたまれなくなり席を立つと甲板へ飛び出していった。

「なんだアイツ？」

「お連れの方、気分でもお悪いのですか？」

もともと宴席などとは無縁そうなヤツだしな……。ま、いいか。

シンドバッドは考えるのを止めて、またルウルウの艶めかしいダンスに集中することにした。

十一月となれば、いくら中近東地中海沿岸と言っても、夜風は冷える。空には丸々太った十三夜月じゅうさんやつきが浮かんでいる。その蒼白い光を浴びたリユートの顔が焦りと怖れに引きつった。月が、あと二度、たった二度満ちれば、この世に滅びが来る。

心を乱している場合ではない。

リユートは気合いを入れ直すように、深呼吸する。その時、耳にフランス語の密談が響いてくる。

なぜ、フランクが？

さらに聴覚を研ぎ澄ます。

「まだ宴もたけなわだ。呑気なもんだぜ」

「早いところ事をすすめないと、タフルの奴らが暴れ出すぞ」

「ただでさえ、ムスリムの連中の臭いを嗅いで、腹を空かせてやがる」

「恐ろしや。こっちが喰われちまうぞ」

タフル？ 何のことだ。

「しかし、見れば見るほどお父上にそっくりですな……」

ワトワートがシンドバッドの杯に酒を注ぎながら、惚れ惚れとした口調で言った。

「あのようなことさえなければ、今頃は……」

宴席は、いつの間にか静まりかえり、すすり泣きさえ聞こえる。

「許すまじは、あの野蛮人のモンゴルども！ あ奴らは卑怯にもお父上をだまし討ちに」

「もう、いい！」

シンドバッドは一声叫ぶと杯をグイとあおった。

「……もう、いいよ」

軽く酒にむせながら、シンドバッドは懇願するように言った。

「しかし……若は、ムスリムの誇り。あの憎きモンゴルどもを倒すためならば、このワトワート、労を惜しみませんぞ……まあ、大船に乗った気分で大いくださいな！」

ワトワートは、巨体を振るわせて笑った。座に和気藹々とした空気が戻ってきた。

「そこで、若、ここで出会わせたい御仁がおりまする」

豪商が手を打ち鳴らすと、武装した兵達が宴席に入り込んで来た。胸には赤い十字。

「聖十字軍！？」

ワトワートを睨みつけるシンドバッド。見回せば、宴席に呼ばれた客人達も神妙な顔で座ったままだ。

「裏切ったのか？……お前達」

「若……時代は変わったのです。これからはヨーロッパの時代なのです」

騎士の群れが、さっと左右に分かれ、その間を一際品位の高そうな人物が歩いてくる。

「ほう。この若者がシンドバッドという船乗りか」

「知っているぞ……お前は、ルイ九世」

十字軍の首領の登場に、さすがのこの剛胆な船乗りも強張^{こわば}らざるを得ない。

「聖王様は、全ての民が平和に暮らせる都を打ち立てようとなさっているのです」

ワトワートがへつらうように、芝居がかって言う。

「その都の名は……エルサレム」

「シンドバッドとやら。ムスリムは終焉を迎える。すべては我らが主の元に統合されるのだ。そのためには、貴公がモンゴルどもから奪い取った宝玉を渡すのだ」

「侵略者め。勝手なことを……！」

こいつらもテンケー狙いか……。

ルイ九世は、聞き分けのない子供を諭すように微笑む。

「それでは、考える時間をあたえよう」

騎士団に取り囲まれたまま、シンドバッドは為す術無く広大な甲板へ連れ出された。洋上には、宮殿船に勝るとも劣らない巨艦が並んでいる。漆黒の戦艦リヴァイアサンだ。

「いつのまに……」

リヴァイアサンと宮殿船の間には、二回りほど小さなガレー船が浮かんでいる。シンドバッドは渡り板でガレー船へと移された。

船の甲板の中央には奈落のような穴が開いている。船底の闇から異臭と何者かが蠢く気配が這い上ってくる。

「何だ……？」

「真の神の戦士達だ」

ルイ王が厳かに語る。

「異教徒どもを滅ぼすために鬼神に姿を変えた使徒。彼らは立ち塞がる者共を屠り、その肉を喰らう……このようにな」

ルイ王は、突然、剣を引き抜くと、ワトワートの足の腱を切り裂いた。

「な、何を……」

ワトワートが激痛のために身をよじり、バランスが崩れる。商人

は信じられないという表情のまま穴の中へ落ちていく。

「金で信念を曲げるような奴が、信じられるか……所詮は裏切り者」
闇の底から絶叫が上がる。

「おたすけえ！ アラーよ」

獣のような咆哮、続く商人の断末魔の悲鳴。

「さあ、どうするかな？ シンドバッドよ……おとなしく主の命に従うならば、ゆるしてやろう……さもなくば、血に飢えた神の子達の贅となるか」

「だ、誰が貴様らなんぞに！」

「一人では足りぬようだな」

次に捕らえられたのは先ほどの踊り子のルウルウ。新たな獲物の匂いが届いたのか船底から獰猛な唸りが響く。

「やめろ！ その娘は関係ない！」

「やれ」

無表情でルイ王が命じる。穴に突き飛ばされたルウルウは、一瞬、宙で舞うように身悶えたが、すぐに闇の中に消えていった。

怒声と共に、シンドバッドは押さえていた騎士の腕をふりほどく。逃げるかと思えば、そのまま穴の中に舞い降りる。

「とんだうつけ者だ。手間が省けたわい。タフルどもよ、宝玉まで食ってはならぬぞ。食えば、腹を切り裂くでな……ククク」

ルイ王の嗤笑がシンドバッドの背を追っていく。

「たしかにうつけ者だ……」

リユートは宮殿船のマストの上から呆れ顔で見下ろしていた。

シンドバッドはネコのようにしなやかに船底に着地した。呆然と立ち尽くしている踊り子の方へ駆け寄る。

「無事か！？」

ルウルウは、シンドバッドにかじり付くと、嬉しそうに頷く。
月明かりに床がぬめりを帯びて光る。おびただしい血痕。商人の

絶叫がよみがえる。

「いったい何が？」

ルウルウは、口をパクパクと動かし、身振り手振りで何かを伝えようとする。

「口がきけないのか……」

とにかく、ここから出なければ。一步踏み出したシンドバッドの足に何かに触れた。

恐る恐る足下を見る。大商人の顔。見開かれた目がシンドバッドを見上げている。

「ワトワート……」

助け起こそうとするシンドバッドの手が途中で凍り付いたように止まってしまった。

ワトワートの頬と喉元には食い千切られたような無残な痕が。そして、首筋にも裂けたような肉片がこびり付き……その先に体は存在せず、血と脂がべっとりついた床があるだけだった。ワトワートの生首は断末魔の恐怖と苦痛の表情のまま転がっている。

シンドバッドの目が徐々に闇に慣れてきた。頭上の月光がぼんやりと船倉の底を照らす。二人のまわりを何者かが取り巻いている。荒い息。床を引きずるような足音。徐々に包囲を狭めてくる。

「こ、こいつらは……」

異形の者が月の光の中に入ってきた。人間？ 筋骨隆々な身体に太い首、凶暴な表情は知性のかけらもない。両眉が瘤のように張り出し、洞窟のように目は落ちくぼみ、紅い殺気に輝いている。手には棍棒を持ち、衣服はボロボロの布をまとっている。口の周りは血でしたたり。ワトワートの肉塊を咀嚼している者もいる。人のものとは思えない鋭い犬歯が顔を覗かす。

「あの者達は……」

シーガードは、甲板から異形の獣人どもを見て絶句した。

「タフル。貴公ははじめてだったかな？ シーガード殿」

「タフル……まさか、あの第一次十字軍の」

「左様。異教徒どもを女子供を問わず屠り、その肉を喰らったという。彼らは、その末裔よ。恐れを知らぬ狂戦士^{バーサク}。神の忠実なる僕」

「こいつら人じゃない。食人鬼^{グール}だ」

床を棍棒で打ち付け威嚇しながら、じりじりと近寄ってくるタフル達。先頭の一人が棍棒を振り上げて襲いかかる。シンドバッドは棍棒をかわすや、相手のアゴに一撃。

タフルは一瞬怯んだもの、今度は数にものを言わせて迫ってくる気配。

「くそっ！　こんなところで」

突然、頭上から紅い何かが降ってきた。リユートだ！

颯爽とバンジージャンプの要領で舞い降りる。両肩には銀色の口ブが纏掛けになり、その先は、はるか上方へ向かっている。

突如の新手の登場に怯むタフルども。

「しっかり掴まれ！」

リユートの命ずるまま、シンドバッドはルウルウを抱きかかえたまま、腕を巻き付ける。三人の体が宙に浮く。引き絞られた弦が元に戻るように勢いよく甲板へ舞い戻る。

「ナイスタイミングだぜ！　リユート姫」

「姫はやめろ」

「あやつ何者？」

さすがのルイ王も驚愕の表情。

「あれがテンクウマルの娘……」

シーガードが呟く。

「捕らえよ！」

ルイ王は、すかさず兵に命令を下す。

「蹴^{ふみ}ウツ！」

鋭い蹴りで数名の兵を吹き飛ばすリユート。中の一人が足を踏み

外して、船倉へ落ちていく。一瞬の間。続く悲鳴。

「敵も味方もお構いなしか！？ 悪鬼め」

混乱の中、三人は甲板から港の栈橋へ降り立つ。

「逃がすな！ 艦首大扉を解放せよ」

「町にタフルを放つのですか？」

シーガードの異議などルイ王の耳には届かぬようだ。

「所詮は異教徒の町よ」

艦首の大扉が、城門のように開く。中から血に飢えたタフルの群れがあふれ出る。

ヤッフオの街路を疾走する三人。背後から獣人どもの雄叫びと、寝込みを襲われた住民の絶叫が交互に響く。

道に詳しいのはシンドバッド。リユートは、またもや手を引つ張られ、リーダーシップを握られる。だが、野人の足は速い。前方からもタフルが迫る。

「おっと！」

その度にシンドバッドは小刻みに路地を曲がって躲す。

「ちよつと待て！ さっきから右にしか曲がっていない」

リユートの抗議に無言のシンドバッド。しかも右回転は徐々に狭めていく。敵に自分から包囲されているではないか。

「おい。何を考えてる！？」

ついに、小さな広場に出る。広場の真ん中には古びた井戸があるのみ。道の角角にタフルが見え隠れする。全ての道から敵が突入してくる。

「ええい！」

白兵戦の覚悟を決めて、リユートはセーデを剣に変えて身構える。

「ちよつと失礼」

いきなりリユートと女奴隷を抱き上げるシンドバッド。

「な、何をする！？」

シンドバッドは、そのまま井戸に飛び込む。

広場になだれ込んだタフルも後を追って飛び込んでいく。井戸

の底に水はない。空井戸だ。だが、三人の獲物は忽然と姿を消している。混乱するタフル。井戸の底を嗅ぎ回っている。そこへ次の一団が飛び降りてくる。狭い井戸の底でドサドサと団子状態、ついに、悪鬼どもは小競り合いをはじめめる。

闇。壁ひとつ隔てたところでは野獣のようなタフルの叫び声が聞こえる。

三人は井戸の底にある隠し扉から横道に逃げ込んだのだ。石製の扉の外側は井戸と見分けが付かなくなっている。

「まあ、あの低脳どもじゃ、ここは見つけられないだろうな」
常備されていたのか松明に火をつけるシンドバッド。

「毎度、モンゴルやフランクどもに追われてるんでね。この手の抜け道はいくつも用意してある。ついて来な」

横道はそのまま地下道になっている。三人は松明の火を頼りに奥へ進んでいく。

風が髪をあおる。リュートの嗅覚が潮の香りを察知した。

「出口が他にあるようだな」

「ああ、海へ通じている」

行き先にほのかな光が見える。一同の足が自然速くなる。

大きな空間へ出た。一同はホッと安堵の息を漏らす。

波が弾ける音がする。洞窟の中に船渠ドックが出来ているのだ。幾本もの松明が明々と灯っており、そこに小型ながらも流麗なデザインの船が停泊している。

全長十ディラーア（約二〇メートル）、帆柱は前後二本あり、後の方が若干長く、白い三角形の帆が三枚張られている。
「美しい……」

リュートは直線の帆と流線の船体の見事な調和に思わず感嘆の声を漏らした。

「シエラザード。俺の船だ。気に入ってくれて嬉しいぜ」

「このシエラザードは、成りはチビ助じゃが、外洋へ乗り出せる高

速船よ」

突然、甲板から大声。メランシアスが立っている。

「メランシアス！ 出港だ」

「ずいぶんと気が早いな！ まだ舵の微調整が残っておる」

「そんな呑気なこと言ってられるか！ フランクどもの化け物に追いついて回されてんだ」

「化け物！？ そりゃ一大事だ」

洞窟の奥から無数の足音、そして獣のような唸り声。

「思ったより早いお出ましだ。ちゅうか、なんであの入り口が分かつたんだ？」

「匂いだ。餌の匂いを嗅ぎとってきたんだ」

リユートが身構えながら言った。

「まったく骨の髄までケダモノだな」

「よし、緊急発進じゃ」

メランシアスは、洞窟の天井からぶら下がっているロープを引っ張ろうとする。ロープは天井を伝って先ほどの洞窟の奥へと続いている。

十数人のタフールが絶叫しながら突入して来た。手にした棍棒を次々と投げつけてくる。棍棒が風を切ってメランシアスへ殺到する。

「うひゃ」

「危ねえ！」

飛び出そうとするシンドバッドを制して、リユートが進み出る。

「防ッ！」

銀のロープが変形して大きな傘のように展開する。銀色の盾。棍棒は弾き返される。

「ほお！ 聖泥セーデか？ 面白い。まったくもって面白い」

メランシアスが玩具を見てはしゃぐ子供のように手を叩く。

「ロープを」

リユートは襲い来る棍棒、石つぶてを巧みに弾き返ししながら言った。

「おお！ そうじゃった」

メランシアスがジャンプしてロープを引っ張る。天井を伝うロープがピンと張る。カチリと手応え。何かの仕掛けが作動した。

一瞬の間。

鈍い衝撃。鳴動する洞窟。

「爆破成功じゃ」

洞窟の奥で火薬が発火したようだが、洞窟を揺すっただけで、また沈黙が支配する。

「ふふふ、仕掛けをご覧くださいろ」

タフルが攻撃を止め、広がった鼻腔をヒクヒクとさせ、大気の匂いを嗅いでいる。

「風だ」

大気の僅かな乱れをリユートが感じ取る。

「ターバンを押さえとけ！」

メランシアスが叫んだ瞬間、凄まじい突風が空洞から押し寄せてくる。タフルが風圧で吹っ飛ばされる。

シエラザードの帆は、その風をいっぱいに孕む。

「^{もやい}舳を切れ！」

帆を操るシンドバッドが叫ぶ。

もたもたしている老人を尻目にリユートが大盾を、今度は剣に変える。

「^{ざん}斬！」

張り詰めた舳縄が一撃で断たれる。

弾かれたようにシエラザードは前に飛び出し、洞窟を疾風のように抜けていく。

急を知ったルイ王一行は、直ちに抜錨し、ヤッフオを出港した。その眼前を洞窟を飛び出したシエラザードが、波を切って滑走していく。

「成りは小さいが、大した船だ」

艦首から身を乗り出してシーガードが小さく口笛を鳴らす。グイ
グイと距離を離していくシエラザードはやがて闇の中へ消えていく。
「だが逃がしはしないぞ…… テンクウマル」
シーガードは不敵に笑った。

第三章 陰謀の地中海

第三章 陰謀の地中海

ヤツフオでの事件の翌朝。

トリポリよりモンゴルの艦隊が次々と出港を開始した。

一際巨大な戦艦。その名をテムジン。モンゴル帝国の始祖チンギス・ハンの幼名を冠した艦隊旗艦である。矢や敵の侵入を防ぐため、甲板上部を亀の甲羅のように組んだ厚板で覆い、さらに薄い鉄板を被せた装甲船だ。地中海の海よりも蒼い帆が張られ、艦首には龍の頭を象った巨大な彫像が前方を睨み据えている。龍の頭の上は物見櫓も兼ねており、そこにアヴァカとコンクルタイが陣取っている。

「ずいぶんと慌ただしいことだな？ コンクルタイ」

「ああ、兄上。かねてより、テンクウマル達を追わせていた密偵から連絡があった。奴らヤツフオを出港したそうだ。しかもフランクの鼻先を突っ切って行ったそうだ」

「ハハハハ、なかなかやるな」

「笑ってもいられない。フランクの艦隊には、あのバイバルスも追い払った黒い巨艦がいる。恐らく我がテムジンと同じ外洋型だ。そいつが全速力でテンクウマルの船を追いかけている。我らとしてもフランクよりも早く見つけ出したいところだが、地中海は大小の島があり、入り江も込み入っている」

コンクルタイの言葉に耳を傾けながら、アヴァカは、しばらく海図を眺めていた。

「ヤツが目指しているのは西の大陸だ。下手に追いかけるよりも、ここでドツカリ腰を据えておいた方がよくはないか？」

アヴァカが指したのは、地中海と大西洋を結んだ、ヨーロッパとアフリカ両大陸の間にある海峡。ジブラルタル海峡。

「さすがだな兄上」

テムジン艦隊は、決戦海域を目指して真西へ進路を取った。

シエラザードが地中海に出て最初の晩。月の無い夜だった。相手にも見つかりにくい、岩礁などが見つけにくく自らも危険な夜だ。シンドバッドは油断無く周囲を見回している。メランシアスが甲板へ上がってくる。

「交代の時間じゃぞ」

「お嬢さん達は？」

「ルウルウはグッスリじゃ。リユートの方はよく分かん」

「たしかにな……」

リユートに関しては、寝ている時でも感覚だけは研ぎ澄まされていて、少しの物音や気配でも目覚めるような気がする。

「そっぴやあんた、リユートの家のこと……天空丸か……、何か知ってるみたいだな」

「いんや……知ってるというほどのことでもないがの。天空丸は、各地の神話や伝説のここに顔を出してくる。不可思議な術を使う戦士としてな」

「あの不思議な水銀みたいなヤツだな」

「セーデ。ジパングの言葉で『聖なる泥』という意味らしい。あの左腕の宝玉でコントロールしているらしいな。液体から固体まで変幻自在らしい。ワシも見るのは初めてだ」

シンドバッドは、見せつけられた数々の奇跡を思い出す。魔法のロープや空飛ぶ絨毯、また一瞬にして剣や盾にもなる。まったく不思議な代物だ。

「それだけじゃない。あの身のこなし。ただ者じゃないぜ。たしか『霸道』って技らしい。それに大砂漠を渡ってバグダッドまで歩いて来たって言うんだろ。そのうえ、今度は新大陸だ」

「ただ、天空丸が動く時、必ず、どえらいことが起こる。人類の歴史の転機に關与しているという説もある。その天空丸が躍起になつて探す？天空？。恐らく、ムスリムもフランクもモンゴルも吹っ飛

ぶような秘密が隠されているかもしれんな」

「ワクワクするな」

「嬉しそうだな」

「ああ、背筋がゾツとするくらいな。見てみたいな、この目で」

「そんなところは、祖父様じいさまそっくりだな……まだまだ先は長い。今は寝ておけ。見張りと簡単な操舵ぐらいならワシでも出来る」

シンドバッドは、もう一度、周囲を見回して安全を確認した。

「ああ、そうさせてもらう」

シンドバッドの推測通り、リユートは身体は眠っていても、意識は覚醒していた。

寝苦しい晩だった。満月が近づくといつもこうだ。月の障りさわ（月経）と関係あるのかも知れない。リユートは眠るのを諦めて、天井を見つめた。船室の天井は木製で板目が様々な文様を描いている。

あの晩もそうだった。忘れもしない、この決死行への大いなる転機となった夜。

ちょうど一年前、正確には十一ヶ月前、満月の近い夜。

リユートは、まだ、自分がこんな決死行に向かうとは夢にも思ってもいなかった。

天空丸の砦。ヒマラヤ山脈の聖域。極寒の山々に囲まれているが、この地だけは早春の快適さを保っていた。古くから伝説の桃源郷、シャングリラ、ミッドガルドなどと言い伝えられてきた伝説の地である。

リユートは岩をくり抜いた窟の中で座したまま中空の月を見上げていた。寝付けない。妙な胸騒ぎがする。

その時、足音がした。あの歩調は烈斗だ。父も寝付けないのだから？

「修行中の身で夜更かしとは何事か？ 天空丸の極意。寝られる時に寝ろ」

起きているところを見られて、また小言を言われてもかなわない。
リュートは得意の狸寝入りを決め込んだ。

部屋に入ってきた烈斗は立ったまま動かない。

ばれたかな？

リュートは内心ひやひやしたが、未だかつてこの寝たふりが暴かれたことはない。

突如、烈斗の気が急激に高まったのを感じた。ただ事ではない。
これはまるで敵を察知したような鋭さだ。

「何やつだ？」

押し殺した声だが、研ぎ澄まされた殺気が一定の方向へ放たれた。
誰かいる？

リュートは聴覚、嗅覚、肌で感じる気配を総動員して何者かを捜そうとした。目を開けなかったのは彼女なりの意地もあった。

烈斗には、すでに相手の位置が分かっているらしい。烈斗は気配とリュートの間に位置を移動しているようだ。まるでリュートを守るように。

「そこにいるのは分かっている」

「さすがは天空丸。並みの人間だったら、私の存在にすら気づかないでしょう」

相手が根負けしたように声を上げた。穏やかな声だが、男とも女とも付かない。

堪えきれずにリュートは布団の中で薄めを開けて声のする方を見やった。だが、何も見えない。声は何もない空間から響いているのだ。

「何者だ？」

「龍人。^{リュウト}もしくは大陸の魔物と名乗った方が分かりやすいですかな」

リュウト？ 魔物？

自分の名前と同じ響き。この声の主と自分には何か関わりがあるのだろうか？

「ふむ。？天空？を守りし者か」

「天空丸だつて、元々は天空守が訛つたものだと同っていますよ」
てんくうまわ

「残念だが、守るべきご神体を見たことがない」

「だが、戦うべき相手は心得ていらっしゃる」

「？深淵？か……傀儡どもとは何度もやり合っているが、真の敵もまた見ていないな」

「その？深淵？が蘇ります……」

声は急に低い調子に変わった。

烈斗は絶句した。

「？深淵？は遙か昔に封印され、現在戦っているのは、その残滓に過ぎないと思っていたのでしょうか？」

「ああ。残り滓と言っても、どうしてもかなり手強かつたがな」

「我々も、そう認識していました。ですが？深淵？本体は長い時をかけて着実に再生していたのです」

「そこで？天空？も復活させるというわけだな」

「しかし、？天空？の起動には、天空丸の娘が必要なのです」

天空丸の娘……私のことだ。

見えない魔物の視線は寝ているリユートに注がれている。それは布団の上からも痛いほどに感じられた。リユートは布団の中で凍り付いた。

「ははは……それは、迷信だろう」

遮るように烈斗が笑う。

「我々も様々な調査、実験を繰り返しましたが、もう手段が残されていないのです」

「ではさらっていくがよからう。貴公をこの地に送り届けたように、空を駆けてな」

「残念ながら飛行生物の使用は極度に制限されております。現にこの私も、もう何年も故郷の地を踏んではおりません」

「敵中突破、新大陸へ征くなど、この天空丸烈斗ならば造作もないこと。なぜ、我が娘を狙う？」

「男では？天空？が受け入れない。男は感情に支配され、無闇に力

を振るう。ヒト最強であるはずの天空丸でさえ、愛娘のこととなると冷静さを失っておられる様子……やはり？天空？に選ばれしは、天空丸の娘」

「謎めいたことばかり言いおって……」

さしもの烈斗も頑として折れない相手に返す言葉を失ったようだ。

さつきから聞いていれば、女、女、女！

リユートの中で何かが音を立ててブチブチと断裂していった。魔物か何か知らないが、声の主の女を物のようにしか扱わない態度には腹が鯁えかねた。父にしても、自分のことを過小評価しているとは思えない。

リユートは夜具をはね除けると、その場にすつくと立ち上がった。この際、薄物の寝間着姿などお構いなしだ。

「父上。^{パパ}私が参ります」

烈斗も声の魔物もしばし呆然、言葉がない。

「そうすれば、私は本当の快男児になれる。父上^{パパ}のような」

言葉は、そこで遮られた。後ろざまに吹き飛ぶリユート。烈斗の拳が頬を打ったのだ。

「遊びではない。命の保証もない」

鼻から血があふれ出ている。いつもなら、痛みと恐ろしさに屈して引き下がるところだ。だが、この場だけは負けられない。生暖かい血を手鼻で切ると、再び立ち上がった。

「リユートは本気です！ いっその命、？天空？の前に潔く捧げてやりましょう！ それが……それが、民を救うためならば！」

リユートは気迫を込めて言い放った。

「いつも、父上^{パパ}が仰っている言葉です」

また鉄拳を食らうかも知れない。だが、その時は齧り付いてでも刃向かってやるつもりだった。

烈斗の手が伸びてくる。覚悟はしていても思わず両目を瞑ってしまふ。続く打撃を覚悟する。だが、いつまでたっても痛みは襲いかかってこない。恐る恐る目を開く。

意外にも烈斗は大きな掌をリュートの頭に置くと、ジッと瞳をのぞき込んでいた。自分と同じ灰色の瞳が心の奥底まで見通すように輝いている。

数秒……リュートには数時間にも感じられた……烈斗はリュートの頭を解放すると、惘然とした表情で立ち上がった。

「しばらく留守にする」

それだけ言うのと烈斗は部屋を出て行く。いつの間にか、烈斗と話していたはずの魔物の気配も消え失せている。リュートは一人取り残された。

いつになく冷めた風が岩窟を通り抜けていった。

リュートの意識は再び、地中海上を進むシエラザードの船室へと戻っていた。

周囲を探り続けていた聴覚が聞き慣れない音を感じたのだ。空気を振るわせる低い小刻みな音。それが止むと甲板の上に何かが降り立つ音がした。そっと抜き足のように静かに歩き出す。見張りのメランシアスは気づいていないのだろうか。

リュートは素早く起き上がると、船室を出て、ゆっくりと甲板への階段を昇っていく。猫のように足音一つたてない。甲板への出入り口まで来ると、何やら話し声が聞こえる。

連続するリズムカルな破擦音。強弱、高低からすると会話のようだ。どこの国の言語であろうか？

甲板に出る。メランシアスの姿は見えない。影になっている船尾へ向かおうとする。

階段の軋む音。背後に人の気配。振り返るとシンドバッドが甲板に顔を出している。

「おお、リュート姫か。なんか甲板で妙な音が……」

慌ててリュートは人差し指で口を塞ぐサイン。

だが、遅かった。会話が途切れる。

「ぎゃあああああー！」

悲鳴。メランシアス？

後方帆柱の向こう側から誰かが姿を現した。月光に浮かび上がるシルエツト。体に貼り付いた見慣れない素材の服。そこから露出する肌は青光りする鱗に覆われ、所々に黒い羽毛が生えている。背中には昆虫のような透き通った翼。そして、その顔。裂けた口、そこから見える鋭利な歯。巨大な眼に狡猾そうな紅い瞳。

「あ、悪魔……」

シンドバッドが呻くように言った。たしかに、その姿は宗教画などに描かれている悪魔そのものだった。

「シャアアアアア」

怪人は、威嚇の叫びを上げた。

怯んだ二人を尻目に背中の翼を広げる。細かく振動する。ちょうどトンボが飛翔するようだ。先ほどの空気の震えはこの音だったのだ。

「逃がすか！」

我に返ったシンドバッドが飛びかかる。だが、空を切る。怪人は嘲笑うように宙へ舞い上がった。みるみる高空へ飛び上がり雲間に姿を消す。

見ると甲板にメランシアスが倒れ伏している。

「お、おい！ メランシアス、しっかりしろ」

気絶していたらしく、老科学者はすぐに呻き声を上げた。

「いったい何があったんだ？」

「なんだか、わからん。突然、背後から襲われた」

「悪魔だ。悪魔が現れたんだ」

「悪魔？ バ、バカな」

「本当だ。なあ、リユート」

リユートは、それには答えず、怪人が姿を消した夜空を睨みつけるだけだった。

キプロス島。古くより貿易の中継地として栄えた地中海では三番

目に大きな島である。ペルシア、ギリシア、ローマ……各時代の覇者によって支配され、十三世紀初頭は聖十字軍の遠征拠点となっていた。だが、その後の劣勢により、現在はムスリム勢力との鏖迫り合いの場と化していた。結果、島の南半分は荒れ果て、廃墟となつた倉庫群が立ち並んでいるのみ。

島の南端に位置するアクロテ岬。その沖には、現在トリポリを出港したモンゴル艦隊が停泊している。陸からのムスリムあるいはフランスの襲撃を警戒して、極力港湾を利用しない方針らしい。

艦隊を離れて一隻の小型船が岬を目指している。乗っているのはコンクルタイと漕ぎ手の数名の兵士、例の鉄面兵である。そして彼の主治医である女薬師^{くすし}。

岬に上陸した一行は、朽ち果てた倉庫街へ入っていく。先導していくのは女薬師である。どこの生まれかは不明だが、この女は地中海の島の地理にも精通しているようだ。家路を帰るような軽快な足取りでとある倉庫の中に入っていく。

倉庫の真ん中にテーブルがあり、その上にランプの灯火が見える。その側に佇む人影。黒いフードを目深に被っているので、その人相は分からない。

「誰だ？」

コンクルタイが訝^{いぶか}しげに問う。先客がフードを少しだけ上げる。その素顔がコンクルタイだけには見えた。

「き、貴様は……！？」

驚愕し、同時に剣を抜きかけるコンクルタイ。だが、薬師がその首筋を撫でると、急に落ち着く。

「お……おお、この方も同胞なのか？」

「左様……我らは、すでに剣を交える必要はない」

フードの男が穏やかな声で語る。

「しかし、なぜこのような所に？」

「我が船も追っている者は同じ。この島の北西の岬に停めてある」

「追っている者とは？ やはり」

「そう。テंकウマル」

「やはり？深淵？なる者の復活を拒むため……」

「左様、テंकウマルは大陸を目指している……」

「生かしてはおけません」

その後、二人と薬師は海図を挟んで、しばらくの間、何事かを語り合う。ランプの炎が時折海からの湿った風に煽られ、彼らの影を不気味に踊らせていた。

シエラザードは、食料や水などの補給のためエジプトのアレクサンドリアに立ち寄った。聖十字軍の追跡を逃れるためにヤツフォから緊急出港したが、長い航海の準備としては明らかに不足していた。かつて、この街には人類の英知を集めた大図書館が存在していたという。奢ったローマの皇帝がアレクサンドリアに火を放ったその時、数十万枚のパピルス文書を戦火から救ったのが天空丸の一族であったことは、またの機会に譲ろう。

シンドバッドは、物資補給の人足手配などをメランシアスに任せて、港が一望できる丘へと向かった。そこは彼にとっての思い出の場所でもあった。

ファロス灯台。かつては世界の七不思議にまで数えられるほどの巨塔であったが、幾たびかの地震によって崩壊。現在はかつてほどの高さ（約百三十四メートル）ではないが、地中海を行く船乗り達の航海を導き続けている。

夕闇が迫り、灯台にも明かりが点った。この丘からも灯台はよく見えた。

突然、シンドバッドは背後に忍び寄る気配を感じた。懐中の短刀に手をかける。

「ラシード。我が友よ」

聞き覚えのある声だった。

「その名前で呼ばれるのは久しぶりだな」

振り向くと隻眼の男が立っていた。赤銅色の肌をした偉丈夫で、

シンドバッドよりも一回りは大きい。

「バイバルス……いや、偉大なる君主様スルタンとお呼びした方がいいかな？」

「やめてくれ」

バイバルス、エジプトの誇る傭兵軍の巨魁にして最高権力者は、芝居がかって頭を垂れるシンドバッドを苦笑しながら制した。

「それにしても、よく俺がここにいると分かったな。バイバルス」

「俺の諜報網を舐めてもらっては困る。お前がフランクとモンゴルに追われて、アレクサンドリアに逃げ込んだなんて情報はとくに掴んでいた。で、ここで張っていれば、必ず現れると思っていた。何しろ、ここはお前と父上が必ず立ち寄った場所なものな」

二人は黙ったまま、しばらく並んでアレクサンドリアの街の夜景を眺めた。

「アイン・ジャルートの戦いではモンゴル軍を打ち破ったそうだな

……」

「ようやくバグダッドの敵討ちが出来た」

なぜかバイバルスの表情は暗い。

「だが、モンゴルは強大だ。アイン・ジャルートは小さな勝利に過ぎない。象の鼻先にかすり傷を負わせた程度だ。かえって、もつと怒り狂わせることになるかもしれない」

「ほう、ご謙遜だな」

バイバルスはシンドバッドの皮肉めいた言葉を気に留める風もなく続ける。

「それにルイ王率いる聖十字軍クルセイダースも息を吹き返した。ギリシア火を遙かに上回る火炮で攻めてきた」

シンドバッドは、そのルイ王に会ってきたことは、あえて口にしない。なぜ、ここにバイバルスが来ているのか？ その真意を図りかねていたからだ。

「傭兵軍の勇者がやけに弱気じゃないか」
マムルーク

バイバルスは、シンドバッドを真っ直ぐに見つめた。

「今こそ我らムスリムは、心を一つにして侵略者に聖戦を仕掛けなければならぬ。そのためにはお前の力が必要なんだ」

バイバルスの燃えるような瞳を嫌うようにシンドバッドは目を逸らせた。だが、彼の真意は読めた。

「俺の力と言うよりも、俺の体に流れる親父殿^{カリフ}の血筋に用があるんじゃないのか？」

バイバルスは沈黙している。だが、熱い視線は相変わらずシンドバッドに注がれたままだった。

「凶星だな。カリフの宣誓を受けて初めてお前は正統スルタンになれる……。だが、やめてくれ。俺はカイロの座敷牢みたいな宮殿で飼い殺しにされるつもりはないぜ」

「ラシード！ お前には世の情勢がわかっていない。自分の立場も分かっていない。お前が一声かければ、ムスリムは一つにまとまる」「分かりたくもないね。誰も俺を縛れない。それより、バイバルス。一度、海へ出てみる。陸の喧嘩が馬鹿らしくなるぜ」

「ラシード…… お前は自由ぶっているが、現実から目を背けているだけだ。お前の父上の無惨な最期、よもや忘れたとは言わさんぞ！」「…… やめろ」

「アッバース王朝、先代カリフであつた父上は、憎きモンゴルの将・フラグのだまし討ちに会い、麻布に簀巻きにされたまま、その上を数十頭の馬に踏みしだかれ、屑肉のようになって果てられたのだ！」

「やめないか！」

「いや、やめんぞ！ さぞ、ご無念であつただろう。その恨み、お前が晴らすずに、誰が晴らす！？」

「復讐は無意味だ。所詮は新たな戦いを生むだけだ……。」

「綺麗事だ」

「たしかにな……。？ 復讐は復讐を生み、戦いの鎖は果てない……。？ 親父殿の口癖だった。たとえ俺がモンゴルに復讐したところで、今度はモンゴルが復讐に燃え、俺を狙う。それはバイバルス、お前もよく分かつてることじゃないのか？ 謀略、暗殺、殺戮…… お前

はどこまで戦い続けるつもりだ？」

バイバルスの隻眼に一瞬、惑いの影が射す。そして疲労の色が浮かぶ。だが、それは一瞬。バイバルスは、それを気迫でねじ伏せた。「ラシード……仕方ないな」

「おっと、今度は力づくか？ 所詮はお前も傭兵上がりだな」

一転、いつもの人を食った口調に戻るシンドバットだが、周囲の気配をさぐる。

何人だ？ もの凄い殺気だ。

「そうさ。人は戦うのが宿命だ。俺は戦い抜いてでしか人生は拓けない。せつかくのカリフの血筋を無駄にする愚か者とは違う」

バイバルスが、さっと手を挙げた。これが合図だ。

来る。

身構えるシンドバッド。だが、いくら待ってもバイバルスの手下は襲ってこない。いつの間にか周囲の殺気が消えている。

思わず顔を見合わせるシンドバッドとバイバルス。

シンドバッドの背後の茂みが急にガサガサとなる。身を固くし、同じ方向を見る二人。茂みからヒョッコリと顔を出したのは、リユートだった。

「リユート姫!？」

「リユート？ 姫？」

バイバルスは、部下がやられたことよりも、突然現れた少女に呆然となった。

「紹介しよう。リユート姫だ。俺の客だ」

「姫はやめろ」

「俺はコイツを連れて、海の果ての大陸に行く」

「コイツは失礼だろ」

リユートは、今度は呆気にとられているバイバルスをにらみつけた。

「それにしても弱い連中だな。貴公の部下か？ まったく背後がから空きだったぞ」

リユートの言葉に思わず吹き出すバイバルス。

「わはははは……こりゃ傑作だ！ マムルークの精鋭が、こんな小娘にやられただと!？」

「小娘もやめろ」

しばらく腹を抱えていたバイバルスだったが、急に真顔になってシンドバッドを見る。

「ラシード。いや、シンドバッド。西の大陸に行くだと。大陸に何の用がある？ 聞けば、悪魔が住むと言うではないか。どちらにする、人の行ける場所ではない」

「そうかな？ とにかく俺は見てみたい、世界の果て、悪魔の土地があるというならば、その目で見極めたい」

バイバルスは、シンドバッドの熱い眼差しを見て、諦めたように苦笑した。

「俺は正直お前が羨ましい。海を渡る風のように自由なお前がな」
バイバルスが鋭く口笛を吹く。藪をかき分けて何か大きなものが姿を現した。

「新手か？ 身構えるシンドバッドだったが、それが見るも精悍な馬と知って安堵した。バイバルスの愛馬のようだ。」

「今日のところは、俺の負けだ。そのリユート殿に免じて、退散するでしょう」

バイバルスは馬に素早く跨るとシンドバッドとリユートに敬礼する。

「悪魔にあつたら伝えてくれ、少なくとも呪うのは異教徒どもだけにしろ、とな」

バイバルスは、それだけ言うと馬に鞭くれ颯爽と去っていった。しばらくその後ろ姿をぼんやりと見つめていたシンドバッドにリユートが話しかける。

「今の男が言っていたこと……本当か？」

「聞いてたのか？」

シンドバッドは諦めたように夜空を見上げて言った。

「ああ……本当だ」

いつになく気高く、そして寂しげな表情だった。

「カリフの皇子……なのか？」

「ふふふ……見えないだろ？」

シンドバッドは、自嘲するような薄笑いを浮かべたが、急に真顔になる。

「それより……騙してしまつてすまなかつたな」

「新大陸に行った、というのも嘘か？」

リユートの声は驚くほど穏やかだった。シンドバッドは頷いた。

なぜだ？ なぜ、いつもみたいに胸ぐら掴んで怒らない？

そんな彼をリユートは黙ったまま見つめているだけだった。

シンドバッド、否ラシードは、たまりかねたように、膝を屈し両手を地に付けた。

「頼む。お願いだ。俺に航海を続けさせてくれ！ 今更、言えた立場じゃないのは分かっている。けれど、俺は必ずアンタを大陸に連れて行く、連れて行ってみせる」

ラシードは、頭まで地に付けようとした。その首根っこが掴まれ、大根でも引き抜くように上へ持つて行かれる。

「誰がクビにすると言った？」

意外にもリユートの優しげな瞳がのぞき込んでいる。

「お前の船乗りの腕は大した物だ。その辺の連中とはワケが違う。それに？ 龍の眼？ も手に入れている。何か問題があるか？」

「いいのか？ 俺で？」

「だから、立て。シンドバッド」

縮こまっていた手足を伸ばしてみる。足が地に着くや、みるみるリユートより優に頭ひとつ分背が高くなる。リユートはそんなシンドバッドを満足げに見上げている。

「……ありがとう」

シンドバッドがしおらしく礼を言った。

「頼むぞ。船長」

リユートがシンドバッドの胸板を拳で軽く小突いた。それで気分が軽くなったのか、シンドバッドは堰を切ったように話し始めた。

「どうしても、大陸をこの足で踏んでみたい。何よりもそれが祖父様を、シンドバッドを超える方法なんだ。俺が本当のシンドバッドになるには、それしかない」

「シンドバッド……お祖父様が」

「ああ、俺はシンドバッドの孫さ。モンゴル帝国にアッバース朝が滅ばされ、父や母や弟達が皆殺しになった時、幼かった俺は母方の祖父シンドバッドの元へと逃がされた。祖父様は、俺を連れたままインドへの航海へ出発したので、俺はモンゴルから逃れることが出来たんだ」

「辛いな……」

リユートが低い声で言った。

「仕方ない……モンゴルが強過ぎて、アッバース朝が弱かった……それだけの話しさ」

シンドバッドはサバサバとした調子で語ったが、語尾は少し震えていた。

「で、祖父様の話だ」

シンドバッドは話題を切り変えた。

「俺が預けられた頃には、祖父様はすでに大航海は止めちまっていた。地中海も南半分のムスリム勢力圏、つまり北アフリカ沿岸で船荷を運んで行き来するのがほとんどだ。遠くても紅海を通って、インド洋に出るくらい。俺は、その航海にくっついて船乗り修行をしたんだ」

「すると、本格的な大航海は、今回が初めて、というわけか？」

「まあな。けど、その間、祖父様の七回の大航海について、しっかり聞いてるから、まず大丈夫さ。島並みの大きさの鯨の話、一つ目巨人の島の話、船より大きいルフ鳥の話、人食い大蛇の話、動く邪神像や骸骨兵士……」

やれやれ。要するにぶつつけ本番か……。

リユートは少々心細くなってきた。だが、今は、この若い船乗り
に賭けるしかない。

「で、問題の八回目の航海だが……祖父様は、その航海の帰りにジ
ブラルダル海峡あたりで漂流していたところをムスリムの商船に助
けられたそうだ。けど、その時の航海について、全く憶えてなか
ったんだ。

ただ、水平線の彼方まで霧が覆っていて、その中に入っていくの
だけは思い出せたそうだ。その後は、文字通り、霧の中ってわけさ」
自分の洒落に笑いながら、心中に祖父のおどろおどろしい叫びが
甦っていた。

「霧じゃ……！ 霧が来る！」

ラシードは、老シンドバッドの叫びで深夜に起こされることも多
かった。

「祖父様！ 祖父様、大丈夫？」

祖父は幼い自分に抱きついて子供のようにガタガタと震えている。
「シンドバッド！ シンドバッド！」

オウムのバブガウが狂ったように飛び回る。この鳥もその航海の
生還者だった。

祖父は、八回目の航海のことは忘れていたが、この「霧」の恐怖
だけは夜ごとによりがえるらしかった。発作は朝方まで続くことも
多かった。その間、ラシードは老いた船乗りを抱きしめてやってい
た。

「すると、その？ 龍の目？ は、その時に大陸で手に入れた物、とい
うことになるな」

リユートは、シンドバッドの首にかけられている宝玉を指さした。
その言葉にシンドバッドは我に返った。

「ああ。こいつは、祖父様が、自分の娘、つまり俺のお袋を父カリ
フに嫁がせる時に、祝いの品として、献上しちまったんだ。その時

は、ただの宝玉ぐらいにしか思っていなかったからな」

「それを、モンゴルのフラグ、つまりアヴァカの父が奪ってしまったというわけか。そして、今また孫のお前の手に還った。因果なものだな」

シンドバッドは、静かに頷くと、そつと？龍の目？を握りしめた。
「それでシンドバット翁は？」

「死んじまった。航海が出来なくなった船乗りは長生きはできねえ、つてのが口癖だった。風邪をこじらせて、そのままさ。それでも俺が十七の時まで生きてた。御年七十歳ぐらいか？ 船乗りとしちゃ、十分長生きしたのかな……」

だから、祖父様のこの世の名残の新大陸を俺自身が見つけてやる。それが祖父様への供養だし、俺の夢さ」

シンドバッドは吹っ切るように言つと、港の方向へ帰ろうとした。

「さっきの男だが……」

「ああ、バイバルスか…… イイ奴なんだが、あの通りの戦好きだ。奴がどうかしたか？」

帰る歩を止めて振り返ると、リユートが険しい目でシンドバッドを見つめていた。

「あの男の言っていることだけは、正しい」

「なんだ？ お前も俺が逃げてるって言いたいワケか？ 説教はご免だぜ」

「お前が能力のある人間だからだ。お前には人々を導く力がある。教義や信仰に縛られない寛容な心もある」

リユートの真摯な目に射抜かれ、シンドバッドはたじろいだ。そこにはバイバルスのような野心はない。

「力を持っていながら、使わないのは、逃げているのと同じだ」

「じゃあ、お前も俺に戦をしる、っていうのか！？」

リユートは悲しそうな目になる。シンドバッドは混乱した。

「復讐は復讐を生み、戦いの鎖は果てない」

「オヤジの言葉は守っている」

「いや……戦わないだけでは、お父上の言葉を守ったことにはならない」

「じゃ、じゃあ、どうしろと？」

最初は説教と斜に構えていたシンドバッドだが、いつの間にか真剣に聞き入っていた。

「人の世界を終わらそうとしている？存在？がいる。人と人を戦わせ、自滅させようと企んでいる」

「あの得体の知れない連中だな？ フランクの食人鬼どもや、モンゴルの鉄面兵だな。あとメランシアスを襲った化け物。あいつら、やっぱり悪魔なのか？」

「……ある意味ね。だが、奴らは雑兵に過ぎない。背後にもっと巨大な存在が蠢いている。フランクやモンゴル、そしてムスリムも、その掌中で踊らされているに過ぎない」

思わず生唾を飲む。少し前のシンドバッドならば、一笑に伏していただろう。だが、こうも立て続けに怪異や奇跡を見せつけられてきた今となつては、笑うどころではない。

「私達、天空丸は、奴らのことを？深淵？と呼んでいる」

「？深淵？……」

その名には、人の魂の奥底から震え上がらせるような響きがあった。

「私は、？深淵？を封じるために新大陸を目指している」

「すると？天空？は、その？深淵？とやらを封じ込める力を持ったお宝ってことか？」

「……そういうことになる」

「そうか！ そいつは探し甲斐のあるな。ますます大陸へ行きたくなつたぜ」

「フフフ……お宝か」

リユートは可笑しそうに笑った。まるで普通の少女のように。

「何が可笑的い？」

「そう。お宝だ。まさにそのとおりだよ。私も少しものごとを単純

に考えようと思う」

「俺は単純か？」

シンドバッドはふて腐れた。

「おかげで、私も頭の中のもやもやが少しだけ晴れたような気がするよ」

雲間から月光が射す。蒼白い満月。

「あの月が、再び昇る時、？深淵？がよみがえる……」

「あと一ヶ月か……」

「行けるか？ 船長」

「シンドバッドの名にかけて、必ず、新大陸に辿り着いて見せよう」
シンドバッドは胸を張った。憧れの祖父が、よくそうしたように。

鎌倉への道中、天空丸烈斗と河野通有は京の近くに宿を取った。

煌々と輝く満月を見ながら酒を酌み交わす。

「良い月ですな……ウサギが餅を突いておりますぞ」

ほろ酔い加減の通有が呑気な口調で言った。

「仏教説話だな。月の影はロマンチックな神話に彩られている。西洋では女神の横顔、ムスリム達からは獅子……。だが、反面、魔女や髑髏の顔が浮かび出てくることもある。ルナティック……魔性の月」

この人は、何処の国の人なのだろう

通有は時々不思議に思うことがある。名前や操る言葉はたしかに日本人なのだが、時折、奇妙な言葉と知識を口にする。そして何よりも底知れなく強い。

「古来、月光は魔力を宿すという。？深淵？や、その傀儡どもも、満月になると活発化する。ひよっとすると、月には？深淵？に力を与える何かが潜んでいるのかもしれない」

「何やら薄気味の悪い話ですな……それでも、拙者は、そんな満月でも懐かしい。烈斗殿と初めて会った晩も見事な月夜でしたからな」

ちょうど七年前の満月の夜。河野通有は、奇しくも同じ京の都にいた。

独自の通商ルートと水軍を持つ通有は大陸に渡ることも多い。その中で、モンゴルの日本襲来の情報をいち早くキャッチしたのである。この報を京の有識者と委細を協議した後、鎌倉方に伝えようとひた走る道中のことであつた。

場所は羅城門。門と言つても、三十年ほど前の台風で倒壊してからは、修理もされずに打ち捨てられた瓦礫の山である。六十尺（一ハメートル）はある心の柱が墓標のように突っ立っている。

行く手を人影が遮つた。五人。待ち伏せ？ 蒙古からの刺客か？ 月光を背にしているので人相までは分からない。

通有は立ち止まり、刀の柄に手をかける。数々の修羅場をくぐり抜けてきた通有である。突破する自信はあつた。

すると、背後からも殺気。振り向けば、退路にも五人の刺客が立ち塞がっている。月光を浴び、その顔が鈍く輝く。

「面など被りおつて！」

通有は抜刀するや、まずは前方の敵に襲いかかる。初撃で敵の陣を崩し、そのまま脱兎の如く逃亡する作戦。中央を狙う。殺めるのは一人で十分。胴を目がけて薙ぎ払う。

「何っ!？」

たしかに刃は、敵の胴を両断したはず。だが、水でも斬つたように手応えが無い。斬られた敵は血も流さず、悠然と立っている。ただ、衣服は切り裂かれ、そこから銀色の刀痕が見えている。その傷も見る間に塞がっていく。

通有の策は封じられ、敵に完全に包囲されてしまった。敵が一斉に抜刀。万事休す？

「わははははははははははッ！」

突如、呵々大笑の声が夜気を振るわせた。鈍色の怪人達も動きを止める。

笑い声の方向を見やれば、羅城門の心の柱の天辺に立つ影あり。

半身に月光を受け、全身を包む革衣は血のように紅い。

「ほお。羅城門に鬼が出たか。しかも赤鬼じゃ」

通有は自らに迫る危急を忘れて、忽然と登場した男に見入ってしまった。

男は、六〇尺の大柱を一気に駆け降りると、一足跳びで怪人どもの囲みに到達した。

「蹴ッ！」

裂帛の気合いと共に蹴り一閃。怪人が碎け散り、銀の飛沫と化す。よく見ると、男の肩には小さな女の子がまるで小鳥のように止まっている。激しく舞うように戦う男の肩で女の子は振り落とされることもない。絶妙なバランス感覚だ。

男は怪人に拳や蹴りを次々に叩き込み、瞬く間に十人の敵を打ち倒した。

グズグズと崩れていく怪人達。銀色の水溜まりに残ったのは人骨であつた。

「面妖な!？」

通有が驚愕の声を上げる。

「ははは、聖泥^{セーデ}で出来た傀儡^{くぐつ}どもよ」

「聖泥？ 傀儡？」

「左様。人骨を芯にして不死身の操り人形を作る。古^{いにしえ}からの妖術と言つた方が分かりやすいかな」

あれだけの動きの後にも関わらず、救いの主は息一つ乱れず、にこやかに笑っている。

「父上^{パパ}。あそこ！」

肩の上の女の子が少し離れた土塀を指差す。

「ほう。龍斗は感が鋭いな」

塀の影から白いだぶだぶの衣装を着て顔を白塗りにした奇妙な風体の男が逃げていく。

「あやつは？」

「あの銀髑髏どもを操っていた傀儡師よ」

言うが早いか、男は高笑いと共にもの凄いスピードで猛追する。
「わはははははははははははッ！」

たちまち相手に追いつくや足払いで打ち倒し、首根っこを締め上げる。

「さて答えてもらおうか？　大モンゴルはいつ攻めてくる？」

「し、知らん」

「そうか。では、質問を変えよう。？深淵？とは？」

男の白塗りの顔に明らかな驚愕の色が浮かぶ。

「ほう。お前のような下っ端でも？深淵？の名は知っているか？
まあ、いい。これではつきりした。モンゴルの影に？深淵？あり」

だが、突如、男の後頭部が異様に膨らみ、噴流の如く出血する。

「ははは、こいつ自身も傀儡であつたか……」

男は、さして慌てる様子もなく周囲を見回す。

「どうだ龍斗？　さらに上級の気配はするか？」

「わかんない」

俊足を誇る通有がやつのことで男に追いついた。

「危ないところをかたじけない。拙者は……」

「河野通有殿。（ここのみちあり）海賊水軍の御大将」

「なぜ、それを？」

後に幕府より海賊討伐を命ぜられる通有であつたが、実は自らが海賊を束ね、水軍として手足のように操っていたのだ。そのような秘中の秘を易々と話す謎の男に対して、一瞬殺気が走る。

「ははは、こちらが名乗りもせず失礼いたしました」

男は親指を立て、自らの胸を指す。

「我が名は、烈斗！（れつと） 天空丸烈斗（てんくうまるれつと）」

「人呼んで、深紅の快男児！」

すかさず肩の上の少女が合いの手を入れる。

「ははは、これ龍斗。茶化すでない」

天空丸烈斗。その邪気のない瞳。屈託のない笑み。通有も思わず破顔する。

大丈夫だ。この御方は味方だ。

「天空丸殿。危ないところを助かり申した」

烈斗の連れている少女。まだ十歳ぐらいだろうか？ おそろいの
紅い皮衣も勇ましい。

「こちらは、お嬢様か？」

「わははははははははははッ！」

「あれから七年……。あのお嬢が、天空丸を継いで、本当の快男児になられたか」

通有の脳裏に烈斗との冒険武勇の数々が走馬燈の如くよみがえる。しかし、当の天空丸は、無表情で、ただ頷くのみ。

この人は、笑わなくなった。

烈斗は質問には答えず、杯の酒を見る。

「宿命……だからな」

「宿命？」

「龍は女にしか会わない」

「龍人と呼ぶのが正しいらしい。彼らは天空丸の娘としか会わない。」

男では話にならないらしい。だから、龍斗を出した」

まさか、生け贄？

古来、龍へ美女を捧げる。神話や伝説では、よくあるシチュエーションではないか。

「安心したまえ、さすがに娘を龍に喰わせるなんて、無駄なことではないよ。それに、魔物というが、我々よりも数段上の歴史、身体能力、技術を持った高等人種だそうだ」

通有の顔色を見て、烈斗が穏やかな声で言った。

「龍斗の使命は、龍が守る？ 天空？ を手に入れること」
そう言つと、烈斗は残りの酒を一気にあおつた。

地中海を約一週間、アフリカ沿岸伝いに快調に航行してきたシエラザードであつたが、ついに正念場を迎えることになった。

地中海果つる場所、ジブラルタル海峡。海峡の長さは十四哩マイル（五十七キロ）だが、欧州側イベリア半島最南端タリファ岬と、対岸のモロッコのアルカサル・エ・セリルとの間は最も狭く四哩もないのである。ここに陣取られれば、海峡突破は至難の業だ。

「やはりな…… 案の定、ただでは通してくれそうにはないわい」
遠眼鏡を操りながら、メランシアスが舌打ちした。

未明の海峡には十数隻の帆船が待ち構えていた。夜明け前の薄闇の中でも中央の船の帆にフランス王家のユリの紋章が縫い取られているのが分かつた。

「あれはルイ王の弟君シャルルの船だ」
その周りに付き従っている船の帆には三本の塔を持った城が描かれている。

「スペインの軍船だぞ。ヨーロッパ諸国が手を結んだ…… ってのは、まんざらはつたりでもなさそうだな」

「で、どうする？ 船長？ 引き返すか？」

リユートは試すように言つた。

「俺を誰だと思つてる？ それに約束したはずだ。必ずお前を大陸に運んでやるつてな」

シンドバッドの意気高し。リユートは満足げに微笑した。

スペイン軍船に動揺が走つた。艦隊の威容を見せつけさえすれば、わけなく降伏するだろうと思ひ込んでいたムスリムの小型船が、止まるどころか、さらに加速して突っ込んできたのである。

「矢を射るな。生け捕りにせよ、とのご命令だ」

シャルルの指揮の下、スペイン船はシエラザードの進路を塞ごう

と一斉に動き始めた。

だが、シエラザードは艦隊の直前で急速回頭する。

「逃げるぞ！ お、追え！」

艦隊は追撃を開始するが、小回りの効くシエラザードは、その鼻先を進路を左右に小刻みに変え翻弄する。しかも、昇り始めた太陽が逆光となり、艦隊は幾度となく小型船を見失った。良いように振り回され、その陣形が見る間に崩れていく。

「よし！ いい頃合いだ」

シンドバッドが舵をいっぱいに切る。シエラザードは、さらに回頭して艦隊の間隙を突破しようとする。海峡突破は目前だった。

そこに響くけたたましい銅鑼と鬨の声。

「くそ！ 新手か？」

竜頭の装甲船を先頭に、蒼い帆の船団が朝日に輝く海面を滑るように向かってくる。

メランシアスが叫ぶ。

「違う。ありやモンゴルじゃ」

「何っ？ な、なんで騎馬専門の連中が海にいるんだ！？」

「兄上。フランクどもの艦隊だ。例のムスリムの船を追っている」
コンクルタイが叫ぶ。

「目的は、あくまで、あの小僧の船だ」

ふふふ。海の風も、また良し。

アヴァカは久々の戦場に血が燃えるように熱くなるのを感じた。モンゴル船団に気づいた聖十字船が矢を放ってくる。邪魔するモンゴル船に遠慮はいらない。だが、降り注ぐ矢は、硬い装甲の前に弾かれてしまう。

「ふ、情けない矢だ。まるで老馬の小便だな」

「兄者。こちらの海の騎馬戦法を見せてやろう」

対するモンゴル船団は、多数の力ヤックを放つ。帆も舵もない三名乗りの手漕ぎの小船だ。だが、漕ぎ手は超人的な体力を持つ鉄面

兵達である。高速で聖十字艦に迫り、至近距離から弩を放つ。弩の中は空洞になっており、中には炸薬が詰まっている。命中すれば、発火炎上する焼夷弾だ。たちまち、シャルル艦隊の数隻が炎に包まれる。

「見事だ、コンクルタイ。だが……どこで憶えた？」

陸の遊牧民であるモンゴルは、海戦は未経験のはずである。

「南海の海賊どもの戦法です」

訝しげなアヴァカの問いにコンクルタイは事も無げに答えた。

カヤック部隊に行く手を阻まれ、シエラザードの船足が鈍った。

「ちい！ 木っ端船が」

苛立つシンドバッドを嘲笑うようにカヤックから次々と鉄面兵が飛び乗ってくる。

「この半死人どもが！」

「こいつらは私に任せろ。操舵を頼む」

リユートが鉄面どもを迎え撃つ。左手の甲が蒼く輝く。

「見事だな。鉄面どもも手を焼いておるわ」

鉄面兵を次々に打ち倒すリユートの戦いぶりにアヴァカは居ても立ってもいられなくなっていた。

「船を寄せろ！ 打って出るぞ！」

アヴァカの号令に、モンゴル兵は雄叫びを上げた。

「珍しいな今日は止めんのか？」

アヴァカは小声でコンクルタイに尋ねる。

「すでに勝ち戦。たまには、兄上も憂さを晴らした方が良く、思っ
つてね」

「話せるな！」

アヴァカは勇躍シエラザードへ飛び移っていった。

金属筒とレンズを複雑に組み合わせた超長距離望遠鏡。ベネツィ

アの光学技術の成果により、シーガードは遙か数マイル離れた戦況をつぶさに見て取ることが出来た。

「モンゴル艦隊は強力です……このままでは、シャルル殿が」

シーガードは、リヴァイアサンの前進を命じようとした。

「捨て置け。あれは、大事の前の尊き犠牲……」

「何と!？」

実弟の危機にも平然としているルイ王をシーガードは驚きの目で見た。

「そんなことよりも、貴公、本当は何者だ？　我が軍に紛れ込んで、何を企んでいる？」

シーガードはルイ王に虚を突かれ絶句してしまった。

「答えられないなら、予が答えてやろう」

半死半生の鳥仮面達がシーガードの眼前に投げ込まれた。

「お、お逃げ下さい……。シーガード様」

「お前達……」

周囲の兵が一齐にシーガードに矢を向ける。

「ベネツィアの犬め」

「特務機関マルコ・ポーロという名前がございます」

「商隊などに化けて手広く嗅ぎ回っているらしいな。何でもフビライにも謁見したとか。そして、今度は予を調べてどうするつもりだ？　何か見つけたか？」

「王は、秘密が多すぎて、得体が知れません。重病からの奇跡の復活。性格の豹変。……中でも、あなた方を探っていくと必ず耳にする意味ありげな言葉。欧州、ムスリム、モンゴル……所を問わず囁かれる謎の言葉。……？　深淵？　なる者……」

「そこまで知っているとは……ますます生かしてはおけんな」

ルイ王が感心したように眼を細めた。

「……殺せ」

王の号令が無慈悲に響く。

突如、瀕死のはずの鳥仮面達が立ち上がり、放たれた矢を全身に

受ける。

「……すまぬ」

シーガードは、船上より海へ身を躍らす。

「王よ。我が船、必ず取り返しに参りますぞ！」

シーガードの叫びは水柱の中に消えた。海面へ追撃の矢が放たれる。

シンドバッドの目の前にアヴァカの巨体が降ってきた。

「シンドバッド、今行く！」

リュートがシンドバッドの救援に向かおうとするが、銀仮面は果てる様子がない。

「大丈夫。このデカ物は、ただの人間だ。任せてくれ」

「ほう。やはりカリフの倅か？ この間の宴の席で、なぜ俺を討たなかった」

「敵討ちなんぞ性に合わなくてね」

「貴様のような親の復讐も果たせん奴を、モンゴルでは腰抜けという」

アヴァカは大刀を振りかぶる。それを寸で見切って避けるシンドバッド。甲板に深々と刺さるアヴァカの大刀。それを踏みつけるシンドバッド。

「臆病者呼ばわりされたんじゃ、黙ってられんな」

シンドバッドは、一瞬動きが止まったアヴァカの側頭部に鋭い蹴りを見舞う。

「ぐはははは！ そうこなくちな」

額から血の糸を引いているものの、アヴァカは平然としている。

「この蹴りをくらって動けるのは、サイクロプス島の一つ目鬼くらいだぜ」

さらに蹴りを見舞うシンドバッド。大刀を放すと受けて立つアヴァカ。素手による格闘戦。殴る蹴るの応酬。

「やるな！ 臆病者」

「黙れ！ デカ物」

朝日の光の中、血と汗が飛び散る。

アヴァカは、久々に爽快な気分だった。政略と謀報戦。兵力と物量の調達。戦わずして、事前に決着する戦争には飽き飽きしていた。大草原と大海原の違いはあるが、久々に天の下、思う存分戦えるのが、何よりも楽しい。アヴァカにとってモンゴルの世界制覇などどうでも良くなっていた。

一方のシンドバッド、いやラシードも、日頃の鬱憤が晴れていくのを感じていた。やはり、抑え込んでいても、父を殺したモンゴルは憎い。たとえ、父を殺したのが、アヴァカの父であるフラグだったとしても、やはり憎悪をぶつける相手が欲しかった。

「憎いか！？ この俺が。カリフの倅よ」

「ああ、憎い！ 憎ったらしいったら、ありやしねえ」

罵り合う二人だったが、その憎悪は徐々に消えつつあり、思いつき殴り合える相手を見つけて、無邪気に喜んでいるようにも見えた。

だが、ついにシンドバッドが膝を折る。アヴァカの拳がその顎を捉えたのだ。シンドバッドは朦朧としてすぐに立ち直れない。

大刀を拾い上げるアヴァカ。だが、斬りかかろうとはしない。

「天晴れだ。臆病者と言ったのは取り消してやる」

「兄上！ トドメだ」

旗艦テムジンの船首で、コンクルタイが叫ぶ。

「そいつを殺せば、悪しきカリフの血は絶える」

「その必要はない」

アヴァカは大刀を鞘に収めるて唸るように言った。

「今さら、カリフの血を絶っても、また新しい指導者が台頭してくるだけよ。例えば、バイバルスのようにな」

ようやく鉄面兵を倒したリユートがシンドバッドをかばうように立ち塞がる。

「テンクウマルか？ 貴様とも一度手合わせ願いたいところだな」

「いつでも相手になつてやる」

アヴァカは満足げに笑うと、自分の船へ引き揚げようとする。
弦音。

アヴァカの笑みが凍り付く。その胸に矢が突き刺っている。

撃ったのは……コンクルタイ!?

「甘いな……あんたは……いつだってそうだ」

信じられない表情のまま、アヴァカはガックリと膝を着いた。

「な、なぜだ?」

「謀反人の息子は、いつだって惨めだ」

「お、俺は、いつもお前のことを……」

「実の弟……か? 哀れな捨て犬程度にしか思っていないくせに!

お前の父親・フラグは、善行を施したつもりだろうが、俺は牢獄で過ごしてきたのと同じだ。俺は、両親を奪ったハーンの血が憎い。その血の流れるヤツは全て殺してやる。そして、その広大な領地を、この俺、コンクルタイのものにしてやる!」

「歪んだな……コンクルタイ」

「はったりではないぞ! 俺は、すでに強大な力を蓄えている」

「人の心は闇だ……」

「あばよ……兄上」

コンクルタイは。再び矢をつがえ、今度はゆっくりとアヴァカの額へと狙いを定めた。

「やめろおお!」

シンドバッドが叫びながら、仇敵であるはずのアヴァカの巨体を支える。リユートがセーデの盾を展開して、コンクルタイの矢を弾く。

「逃げるが勝ちじゃない!」

いつの間に船室から出てきたメランシアスが前方帆柱のロープを解く。新たな帆が展開する。緊急脱出用の奥の手だ。

シエラザードが弾かれたように飛び出し、モンゴル船団を抜け出ようとする。

だが、その前方を黒い山のように巨大な影が覆い尽くす。

「な、なんじゃ!?」

「い、いかん! 減速だ」

呆然と見上げるメランシアスを押しのけて、シンドバッドが帆を緩める。

リヴァイアサンだ。その回転砲台が一斉に狙いを定める。

「カリフの子よ。おとなしく新大陸への海図を渡せ。さもなければ、ここで死ぬか?」

甲板で勝ち誇るのは、この巨艦の新たな主人となったルイ王である。

前方にクルセイダース聖十字軍、後方からはモンゴル軍。両者は手旗信号で相互連絡を取り、シエラザードの包囲網を一気に狭めてくる。

「聖十字軍とモンゴルが手を組むとはな……とんだ茶番があったもんだ」

メランシアスは二大勢力の共闘に呆然とした表情で言う。

「その茶番で何人死んだ……」

シンドバッドも吐き捨てるように言った。

波間に累々と浮かぶ両軍の死体と軍船の破片。中には王の弟であるはずのシャルルの船の残骸も見える。

「さあ、どうする? おとなしく差し出せば、主のご加護もあるかもしれない」

ルイ王の一方的な要求は続く。

「それは、ありがたいこつて」

刃向かってやりたいが、さすがのシンドバッドも内心策が浮かばない。

「くれてやれ」

「何だと?」

メランシアスの意外な言葉にシンドバッドは息を呑んだ。

「正気か? 相手はフランクだぞ。命の保障なんてあるもんか。それに……これは大事な地図だ」

「ここで死ぬわけにはイカンだろ？ それに、わしに考えがある」
普段の好々爺然とした科学者が、いっになく真剣な面持ちだ。シンドバッドはメランシアスの策に賭けた。

「受け取れ！」

シンドバッドは、コンクルタイに宝玉を投げつけた。

「愚かなり。カリフの子よ」

ルイ王が手を挙げると同時に両軍から矢が放たれる。

「防^{ぼう}！」

リユートがありつたけのセーデを振り回して超特大ドーム状に張り巡らす。先ほど倒した銀仮面どもの残骸も使う。甲板を覆う銀色の防御壁。矢は、その弾力で弾かれる。

「今だ！」

再び、緊急発進用の予備の帆が張られる。急発進するシエラザード。瞬く間に矢の射程から離れる。

セーデが収縮し、リユートの手元でロープ状へと戻っていく。リユートの息は荒い。この大技は、リユートにとってもかなりの負担だったようだ。

だが、危機は去ったわけではない。

「地図が手に入った以上、もはや、やつらに用はありませんぞ」

コンクルタイが？龍の眼？を高々と掲げる。それを見てルイ王は満足げに頷くと、無慈悲に命じた。

「撃て」

リヴァイアサンの砲が火を噴く。上空から砲弾の風を斬る音が迫る。シエラザードの周囲に林立する水柱。大量の海水と爆風が甲板に押し寄せる。翻弄されるシエラザードの上でシンドバッド達は、立つことも出来ずに這いつくばるしかなかった。そして、水柱の包囲網は、着弾の度に狭まっていく。次の砲撃で命中は免れないだろう。

風を斬る音が迫る。

「来た！ 合図したら海に飛び込め！」

シンドバッドは、船を捨てる覚悟を決めた。何とか生き延びる。生き延びられれば、また何とか出来る。

遮られる陽光。突如、日食のように周囲が暗転する。轟々と風が鳴る。シンドバッドが見上げると、それは翼を広げた巨大な鳥の影だった。

「ルフ鳥!？」

伝説の巨鳥を思わせる大きさ。ビッシリと鋼のような鱗に覆われた胴体がシンドバッドの視界を圧倒した。鳥は巨大なかぎ爪のついた足でシエラザードを文字通り鷲づかみにすると、軽々と空へ持ち上げてしまった。

シンドバッドは、衝撃と疲労から、ついに甲板に仰向けに昏倒する。倒れる寸前視界の端に、やはり甲板に転がっているリユートの姿が映った。そして、雄々しく羽ばたくルフ鳥の虹色の尾羽も見えた。

「綺麗だな……」

不思議と恐怖はなかった。シンドバッドの意識は急速に遠のいていった。

シンドバッドはヒタヒタと頬に触れる柔らかい感触で目を覚ました。

目の前に心配そうなルウルウの顔があった。

「あれ？ 俺はいつたい……痛う!？」

体中に激痛が走る。特にアゴの痛みは強烈だ。アヴァカに殴られた場所だ。

ここは……シエラザードの甲板だ。だが、不自然な傾斜。船が傾いているのだ。

「おう！ お目覚めか？」

いつの間にかメランシアスが脇にいた。

「いったい、ここは？」

「わからん。大西洋のどこか、ってところだな」

「あのルフ鳥に運ばれてきたのか？」

「伝説の巨鳥か。たしかにな。ルクともロックとも言う。世界中に目撃談が残っておる」

「祖父様じいさまも航海で二度見たって話だ。あれは、絶対にルフ鳥だ」

ルウルウが必死に船の外を指差す。シンドバッドは立ち上がり、船縁からのぞき込むと、シエラザードは砂浜に乗り上げていた。船が傾いていたのはこのためだったのだ。

「参ったな……」

「なあに、今は干潮だ。潮が満ちれば、シエラザードもまた浮き上がる」

陽は西に傾いていた。海峡での戦いが朝だったのだから、すでに十時間近く経過していることになる。

「リユートは？」

メランシアスが指差す。リユートが倒れているアヴァカを心配そうに見ている。

アヴァカの顔は土気色をしており、呼吸も弱々しい。

「どうする？」

リユートが近づいてきたシンドバッドに試すように言った。

「家族の仇を討つには好都合だぞ」

「敵討ちかたきは性に合わねえ」

シンドバッドの言葉にリユートが微笑む。

アヴァカの顔をのぞき込むと閉じた瞼に乾いた涙のあとがあった。

それにコイツは、あまりにも多くの者を失った。

「助けられるか？」

メランシアスとルウルウによって、すでにアヴァカの胸には止血の布が巻かれていた。

「どうやら矢に毒が塗られていたらしい。植物性の毒だな……解毒の方は何とかなるが、こやつこやつの耐久力が問題じゃ。かなり時間が経過しておる」

「要は元気に出来ればいいんだな」

リユートがそう言って進み出た。左手を開いたり閉じたりしていたが、いきなりアヴァカの心臓の部分へ左の掌を押しつけた。

「何をする？」

「くおおおおお」

リユートの左手の球が輝く。いつもの青ではなく、暖かみのある白光。リユートの額にはみるみる汗がにじみ出てくる。

逆にアヴァカの蒼白だった顔に赤味が戻ってくる。胸も力強く上下している。うつすらと瞳が開いた。

「おお！ 意識が戻った」

メランシアスが開いた口へ薬草の汁を注ぎ込む。ゴクリと喉が鳴る。

「よし！ これでよいじゃろ」

「ぷはあああ」

今まで呼吸を止めていたかのように、リユートは大きくしゃくり上げると、そのままガツクリと腰を落とした。

「だ、大丈夫か！？」

あわててシンドバッドが支える。

「セーデを操るだけではない……生体エネルギーを調節するのが霸道^どの極意だ。壊すことも出来れば、蘇らすことも出来る……さっきのようにね」

「なんだか、苦しそうだぞ……」

「蘇生術は苦手だ……。私は、ぶっ壊し専門でね。父上なら、死後一時間の死体でも生き返らせるはずだ」

「凄い親父さんだな……」

「ああ、凄すぎる……。でも、超えなくちゃならない……」

「快男児か……。その名前も重そうだな」

「もともと天空丸は男の家系だ。女が生まれることは、千年に一度かの希有な出来事だ。そんな時によりによって？ 深淵？ の復活だ」リユートにしては珍しく情けないため息を吐いた。

「正直、自分が男だったらと思う。そうしたら、もっと強く、速く、

重く敵を撃てるはずなのに」

「冗談だろ。リユートは強い。強すぎる」

リユートは弱々しく首を振った。

父は笑わなくなった。あれほどよく笑った人が。

しばらく留守にした後、再び戻ってきた父は別人のようだった。

一体何をしてきたのか？ 顔は、まるで幽鬼のようにやつれ、胸には火傷のようなひつつれた痕があった。

にも関わらず、烈斗は然したる休息も取らないままリユートの修行を開始した。

荒涼とした尾根。世界最高峰から凍てついた風が吹き下ろす。ここは天空丸の古くからの修行場のひとつだ。リユートの目の前に一杯の樽が置かれていた。その中にはなみなみとあふれんばかりの液状のセーデが入れている。

すでに半年、リユートは覇道の数々の修行を積んできていた。これは、その最終段階と言えるものだった。大量のセーデを自在に操ってこそ修行は完成する。

リユートの制御球が蒼く輝く。今まで、父の手の甲に輝いていた制御球は、巧妙な外科手術によって、リユートの左手へ移植されている。

セーデの中に右腕を突っ込む。精神統一。セーデが渦を巻き、リユートの右手に集まってくる。凝固していくセーデ。樽が内側から軋む。だが、そこで息が続かない。

「無理なんでしょうか？……女だから」

喘ぎながら、リユートは父を見上げた。

「女ということに甘えるな」

烈斗はリユートの肩を掴んだ。口調こそ静かだがその力の入れ具合、リユートは、まるで胸ぐらを捕まれたような気分だった。

だが、ここで退くわけにはいかない。セーデを小刀に変えるや、自らの髪を引っ掴む。

「斬^{ざん}！」

吹き荒れる風に艶やかだった髪が舞い、そして散る。

リユートは、振り払うように拳を樽の中のセーデへ叩きつける。樽が内側から破碎され、銀色の手が出現する。セーデで出来た巨大な手だ。リユートはゆっくりと拳を握り、水平に構える。だが、その重さに右腕はぶるぶると震える。

「撃^だて」

「打ッ！」

父の号令と共に、拳を突き出そうとした瞬間、形を崩し、セーデが地面に飛び散る。

リユートはガックリと膝を着いた。先ほどよりも呼吸は荒い。

「女を捨てたつもりか？」

リユートは烈斗をキッと睨みつけた。だが、烈斗の表情は驚くほど穏やかだった。逆に諦めきった顔にも見える。

「霸道の極意は力ではない。お前はこのセーデを力で操ろうとした」セーデの表面には、先ほど切り払ったリユートの髪の毛が浮かんでいる。

烈斗は、大地に広がったセーデにゆっくり左の掌を浸けた。

左腕？ なぜ？

霸道は、右腕が破碎の力、左腕が治癒の力。普段、打撃は右腕で行われるもののはず。

烈斗の制御球が柔らかな白光に輝く。リユートに真の制御球を渡し、今、父の甲には模造品^{レプリカ}が収まっている。にもかかわらず、セーデがみるみる集まり、瞬く間に拳の形になる。ゆっくりと五本の指を開く。その輝きと相まって花が開くような麗しさ。

「セーデを力でぶつければ、さらに大きな力に屈することになる。セーデを操るのは、心の強さ、豊かさ」

「これにて修行を終わりにする」

修行の最後の日、父はリユートに免許皆伝を言い渡した。

たしかにリユートは樽のセーデを拳に変えて自在に操ることは出来るようになった。だが、父は決して満足していないのは分かっていた。なぜなら、父は最後まで笑みを浮かべなかった。

「でも、まだ足りません」

リユートの言葉に、父の顔が歪む。苦渋の選択なのだろう。

「もう時間がない。満月が、あと三回昇れば、？深淵？は復活する」
上方を指さす烈斗。蒼空に浮かぶ白い残月。すでに丸々としている。

「行くのだ。リユート……」

別れの際にも父の顔に笑顔は無かった。

「私は未熟だ」

「無理して超えることもないだろ」

「え？」

「俺はひとつ悟ったことがある」

シンドバッドが空を見上げた。夕焼け空に半月が昇ってくる。下弦の月だ。つまり、あと二週間？深淵？が復活するのだ。

「祖父様は祖父様、親父殿は親父殿……そして俺は俺。みんな別々の夢があつて、別々の時を生きてる。同じ者には成れないし、成る必要もない。要は成るように成ればいいってことさ……ってな」

「……悟ったことを言う」

「ああ、まったくだ」

ふとシンドバッドが横を見るとリユートの目からは大粒の涙が流れ落ちている。

シンドバッドの視線に気づき、リユートは自分の頬に触ってみた。指先が涙で濡れ、自分でも驚いている。そして、やはりビクリしているシンドバッドに視線を移し、ふくれっ面になる。ゴシゴシと乱暴に目を擦る。大きな目の縁が真っ赤になる。

「疲れて、気が弛んだ」

可愛い奴。リユート姫……。

シンドバッドは、その強さ故、リユートを正直女性として見たことがなかった。よくよく見ればリユートも自分とさして変わらぬ年頃の娘である。

一方のリユートにとっては何とも苦手な空気だった。今まで感じたことのない体の奥から火照ってくるような気分になる。

出来るだけシンドバッドと視線を絡めないように、島の渚を目でたどる。

と、波打ち際に何か倒れている。人？

「おい、あれ！」

至急の事態を知らせようと振り向く。シンドバッドの顔が恐ろしいほど近くにあった。気がつけば、肩に手すら置かれている。

「な、何をするか!？」

胸ぐら引つ掴んで、後方へ投げ飛ばす。

シンドバッドも手慣れたもので猫のように受け身を取る。

「カワイクねえな」

「馬鹿か!？」

リユートは吐き捨てるように言って、甲板から身を躍らせ砂浜に舞い降りた。

「逃げることねえじゃないか……」

シンドバッドは、リユートの駆けていく先を見て、倒れている人に初めて気づいた。

「こりゃ、たしかに一大事だ」

インドバッドは慌てて後を追った。

「こいつは!？」

「ああ、聖十字の騎士だ」

倒れていたのは、二人はその名を知る由もないが、ジョナサン・シーガードであった。

なぜ、彼がここに倒れているのかは、さておき、シンドバッドは介護しようとする。

リユートが早速左手を握り締める。シンドバッドは慌てて、それを制する。

「そいつは使うな。リユートの方がのびちまうぞ。あの銀色のグニヤグニヤ……セーデだったな……を使う度に、お前、明らかにへたばっている」

気がついていたので……。

セーデを操るのは、体力を急激に消耗する。ヒマラヤにいた時は特殊療法によって、随時回復していた。だが、長い旅路では疲労はなかなか癒えないのが現状だ。

「それにコイツはアヴァカのオヤジほど、まいっちゃいないようだ」
たしかに気を失っているだけのようだ。シンドバッドはシーガードを肩に担ぎ上げた。

「メランシアス。もう一人だ」

「おいおい。ここは病院船か？」

シンドバッドが今度は聖十字騎士^{クルセイダー}を担ぎ込んできたのを見て、甲板で小休止していたメランシアスは目を丸くした。

「とにかく、そのビショビショの鎧をなんとかしろ」
鎧を外し、濡れた衣を脱がしにかかる。

「なんでこんなものを？」

シーガードは肌着の代わりに胸に堅く布帯を巻き付けている。

「こんなの巻いてたら、息が苦しいだろうに」

布を外すシンドバッドの手がピタリと止まる。

「こ、こいつは!？」

シンドバッドの目は衣からこぼれ出た乳房に釘付けになっていた。

「ほおお、また何で？」

メランシアスが、好色そうな表情でにんまりと笑う。

「フウウウウウウウ！」

ルウルウがもの凄い剣幕で、シンドバッドとメランシアスを追い払う。代わりにリユートの腕を引っ張る。

「私が手伝うのか？」

リュートは自分よりも長身のシーガードを軽々と抱き上げる。

「おいおい、わしは医者だぞ」

「おいおい、俺は船長だぞ」

「フウウウウウウウ！」

なおも食い下がろうとする男どもにルウルウは再び威嚇音を発した。その剣幕に男どもは追い払われてしまった。女達は甲板下の船室に消えていった。

「仕方ない。モンゴルの大將を看病するか」

「考えてみりゃ、こっちは毒が回って重体だからな……」

甲板に取り残された二人の男は、仕方なく倒れているアヴァカの方へ向き直った。

「オイオイオイ。おっさん、高イビキかいて寝てやがるぜ」

ルウルウは、手際の良い動作でシーガードの着替えをさせる。単なる可愛い男に媚びるタイプの娘かと思いきや、献身的にシーガードの看病をする。

どこから持ってきたのか革袋から香りの良い液体をシーガードの唇に注ぎ込んでいる。ルウルウは、シーガードにひとしきり飲ませたあと、リュートにもすすめる。

「酒？」

ルウルウは自分も杯に酒を満たしてグイグイと飲み干す。

負けじとリュートも杯を空ける。覇道の極意を学んだものの、父は酒の道まで教えてくれていなかった。喉が熱い。船内がグルグルと回る。だが心地良いめまいだった。

「ウフフフ……あはははは」

リュートはひっくり返りそうになっと思わず大笑いする。

ルウルウも嬉しそうに目で笑っている。

「なんだか楽しそうだね……」

いつの間にかシーガードが目を醒ましている。

「……ここは？」

「アハ！ 目をさましたのか？ よかったあ」

リユートは呂律の回らない口調で無邪気に笑った。

「？ テンクウマル……するとここはシンドバッドの船か？」

ガバツと半身を起こしたシーガードだったが、自分の格好に気づいて凍り付く。無念の表情で上掛けを握り締める。そのまま顔を埋め、肩を振るわせる。

リユートはどうしていいのかわからなかった。ルウルウがそっとシーガードの肩を抱く。だが、その手を払いのけるようにして、シーガードは上半身を起こした。

「ハハハハハ！ ばれた、ばれた、ばれちゃった！」

シーガードは、泣いているところか大笑いしていた。

「何だか、かえってさっぱりしましたよ。君達が飲んでいるのは、酒ですね？ 子供のくせに……。私にも、もう一杯いただけませんか？」

シーガードは、渡された杯を一気にあおる。ふう、と濡れた唇を手の中であぐら。その飲みっぷりに思わずため息のリユートとルウルウ。

「長いこと男として生きてきましたからね。今さら変えられませんよ」

シーガードは、リユートの顔をうつとりと見つめる。

「こうして、改めて見ると、本当に父上にそっくりですね……」

「父を知っているのですか？」

「ええ、大恩人です……。彼がいなかったら、きっと私は格式と男尊女卑の世界で押し潰されていたかも知れません。だからあなたの父上には感謝しています」

また、酒を一口煽って、シーガードは、ぽつりぽつりと身の上話を始めた。

「私の父は、大層な見栄っ張りでした……」

英国のシーガード家は騎士の家系であった。だが、彼女の父は、男子に恵まれず、一際背の高かった娘を男として育てる。ジョナサンと名乗り、声を潰し、体を鍛え、技を磨いた。類い希な騎士として成長したシーガードは、父の宿願であった、十字軍参戦を果たすため、ヨーロッパへ渡ることにした。

ドーバー海峡を越え、フランスの海の玄関カレー。シーガードは、ここで不思議な紅い革衣の男に出会う。彼の灰色の目は、一瞬にして彼女を女と見抜いてしまった。

女と見られたことを屈辱と感じたシーガードは、その男に決闘を挑む。

「私の秘密を知った以上生かしてはおけぬ！」

「物騒なことだな」

だが、剣術、体術、全く齒が立たない。彼女は、剣を飛ばされ、地に転がされる。

女だから弱いのか！？

「殺せ！ トドメを刺せ」

シーガードは敗北に逆上した。

「あなた貴女は強い。世の男どもの数倍は強い。その強さ、もっと大きなことに使ってみる気はないかな？」

天空丸は、人類が互いを尊重し合い、団結して大いなる邪悪に挑まなければならないことを諭した。シーガードは、大まかなことは理解できても、すぐに納得は出来なかった。すなわち信仰を捨てると言われているような気がしたからだ。

天空丸は、そんなシーガードに幻滅する様子もなく、ベネツィアに行くことを勧める。

「あの街には、私と志を同じくする、？マルコ・ポーロ？という組織がある。彼らなら、貴女に、この世界で、今、何が起きているかを教えてくれるはずだ」

マルコ・ポーロは、ベネツィアの商人達を中核とした諜報機関だった。彼らは、シーガードに様々な情報と知恵を与えてくれた。彼

女は、憧れていた聖十字軍の暴走とも言える昨今の動きに、いつしか疑問を持つようになっていった。

そこで、シーガードは、リヴァイアサンを与えられ、聖十字の中枢で暗躍するルイ王の真の目的を探るといふ任務に就いたのだった。

「私のもう一つの使命は、リユート、あなたの決死行を影ながら援護することでした。それが、かえって命を救われるとはね……」

なにやら甲板が騒がしい。争うような物音と金切り声。シーガードをルウルウに任せて、リユートは甲板へ向かった。

甲板では、目をさましたアヴァカが自らの喉に短剣を突き刺そうとしていた。シンドバッドとメランシアスは、それを必死に止めようとアヴァカの巨体に組み付いている。オウムのバブガウが囃し立てるように奇声を上げる。

「こら！ おっさん早まるな」

「にしても、なんちゆう力じゃ」

「せっかく助かった命、無駄にするな」

リユートもアヴァカの腕にかじりつく。

「俺は何かも失った！ この上、生き恥をさらすつもりはない！ 切っ先はアヴァカの喉に刺さり、血が流れ始めている。」

「あなたは、何も失ってはいない。失ったと思っただけです」

よく透る声が甲板に響きわたった。シーガードだ。

思わずアヴァカの動きが止まり、甲板を歩いてくるその姿に釘付けになった。恐らくルウルウの見立てであろう、白い清楚な衣が風に舞う。

「……ほう」

シンドバッドもメランシアスも、その美しさに思わずため息を漏らす。

先ほどまで揉み合っていた男達の動きがピタリと凝固してしまった。

たしかにシーガードは美しかった。リユートの心に憧れと同時に嫉妬に似た感情が沸き上がった。その美しさは、父・烈斗から与えられたものかもしれないのだから。

「私も、船と部下と、そして何よりも騎士の誇りを奪い取られました」

シーガードがアヴァカの顔に、グイと顔を近づける。

「ななな？」

「盗られたものは、取り返せばいいのです」

シーガードは、ぐいとアヴァカの股間を掴み上げた。

「それでも男か？ おっさん」

シンドバッドとメランシアスは、思わず顔を見合わせ、叫んだ。

「凄ええ！！！！！！」

数時間後、潮が満ち始めた。シエラザードの船体が徐々に起き上がり始める。

「しかし、あの宝玉が無くて、どうする？」

「まあ、まかしておけ」

シンドバッドの問いに、メランシアスは胸を張った。

大きめの紙を均等な細長い紡錘形に切り取り、そこへ地図を描き込んでいく。それらを器用に貼り合わせることによって、紙製の球体地図を完成させてしまった。

「わしは一度見たもの、聞いたものは忘れんのだ」

メランシアスは計測の結果、ここがジブラルタル海峡から南西に千哩マイル（約千六百キロ）にある犬諸島カナリアにすることを割り出した。

「あの巨鳥に礼を言わなければな。ちょうど良い潮が流れておる」
メランシアスの指が、海流に沿って北大西洋を時計回りに回る。

「これなら大海を越えて、ちょうど新大陸の南東部に着ける。あとは、どちらが早く着けるか、じゃな」

その頃、リヴァイアサンとモンゴル艦隊は、球体地図の導きによ

り一直線に新大陸を目指していた。

リヴァイアサンの指令室には、聖十字とモンゴル両軍の中枢が一堂に会していた。集まった人間の首の後ろには一様にバラのような痣があり、その表情には生気がなかった。

ルイ王とコンクルタイは彼らを前に憑かれたような表情で叫んでいる。

「ムスリムは、悪魔の国から恐るべき破滅の力を手に入れようとしている。奴らを滅ぼし、真の神の国を創り上げるのだ！」

「我らに無敵の船と兵士あり。我らこそ神の軍団なり」

彼らの背後で女薬師が手慣れた様子で光る地球儀を操りながら、低く呟いた。

「そう。我らが神の復活は近い。天空丸の娘と？天空？を会わせてはならない」

再び、シエラザードは洋上にあつた。海流に乗り、さらに二反の帆は風を孕み、その速力を最大限に引き出していた。だが、舵を操るシンドバッドの表情は冴えなかった。

「この風、雲の色……嵐が来る。それも、見たこともないようなヤツだ」

「ウラカン。スペイン人が暴風の神と呼んでいる大嵐だ」

そう言いながら、メランシアスが、海図と計算尺で航路を割り出す。

「迂回すれば、もう一度海流に乗るまでには、七日間のロスになるな」

「嵐を掴む。でなけりや間に合わねえ」

「そう言うと思ってたぞ。この命知らずが！ 祖父^{じい}さんと変わらんな」

「最高の褒め言葉だ」

シンドバッドは正面の暗雲を睨みつけながら不敵に笑った。

第四章 嘲笑う魔女

第四章 嘲笑う魔女

鎌倉。武家政権の政庁、幕府が置かれている。この時代の日本の中枢である。

夜半。灯火の下、書物に読みふける男。精悍な顔立ちには、まだ青年の面影が残る。書物の表には『立正安国論』と書かれている。ふと上げた青年の目は、驚きのあまり見開かれた。いつどこから入ってきたのか紅い皮衣の幽鬼のような男が立っていた。男は静かな声で青年に話しかけた。

「時宗殿。お久しぶりです」

時宗。この青年こそ、時の最高権力者、執権・北条時宗、その人である。

「この前、お会いしたのは、まだお父上がご存命の頃でしたな」

男が天空丸烈斗だと知るや、若き執権の顔が輝いた。

「天狗殿！」

「ほお、憶えていてくださったか」

「忘れるものか」

そう、忘れるはずがない。時宗が元服して間もない八歳のある夜。『ついてくるがよい』

父、北条時頼が何の前触れもなく時宗を呼び出した。時頼は、五代目執権職を辞し、出家している。時宗はこの父より幼い頃から帝王学を叩き込まれてきた。

時頼は、供の一人も連れずに闇夜へ出て行く。

「どこへ？」

さすがに不安になって時宗が訊く。だが、父は何も語らない。その背中が、ただ「ついてこい」と語っている。時宗はあきらめて付

き従うしかなかった。

星明かりに鎌倉の守護神、鶴岡八幡宮の石段が浮かび上がる。見上げると大銀杏が覆い被さってくる。別名を隠れ銀杏。その昔、三代將軍・源実朝を殺めた公暁が隠れていたところから、その異名を取る。まるでその巨樹の幹に誰かが潜んでいるような気がして、幼い時宗は思わず父にすがりつきたくなる。だが、次代を背負うプライドが辛うじてそれをさせなかった。

「怯えているな」

「そ、そんなことはありませんね！」

父に心を見透かされたようで、時宗はムキになって叫んだ。

その時、一陣の風。巻き上がる落ち葉。黄金色の嵐。視界が遮られる。

「来おったな」

時頼が呟いた。黄色い銀杏が逆巻く中、紅い人影が忽然と現れる。

「だ、誰だ？」

時宗は逃げ出したくなるのを必死にこらえて、腰の刀に手をやった。

「天狗よ」

「ハハハハ……御坊。上手いことを言う」

人影が高らかに笑う。人を安心させる穏やかな声。どうやら物の怪ではないらしい。

「ほお、そちらが自慢の若獅子か」

自慢？ 若獅子？ 一度だって父上は拙者を褒めてくれたことなどなかったが。

「良い眼をしている」

覗き込んでくる天狗の目は深い灰色。時宗は魅入られたように見つめ返すだけだった。

「あなたが参ったということは、いよいよ国難が近いか……」

国難？

「いや。まだ多少間がある……時に時宗殿」

突然、自分の名前を呼ばれ、時宗は返事も出来ず、ただ喉を鳴らすだけだった。

「あなたが、この国の頭領になった時、大いなる災いが起こるやもしれない……その時にまた会おう」

天狗は不吉なことを言い残し、現れた時と同じく、忽然と闇に消え失せてしまった。

「天狗殿。そなたがおいになったということは……大いなる災いが」

時宗の声は、心なしか震えていた。烈斗は静かに頷いた。

「私が渡した『立証^{レポート}安国論』は読んでいただけたかな」

「読んだ。本当なのか？ここに書いてあることは」

「ああ。南海の深みより、？それ？は浮上してくる」

「何のために？」

「自らの身体を取り戻しに来る」

「身体？」

「？でいだらぼっち？をご存じか？」

「昔話の大男のことか？それがどうした？」

「神々との戦いに敗れた巨人が、その肉体を寸刻みにされて、世界各地に封じられた。日本でも異国でも神話や伝説の類に多く見られる。よみがえるのは、それらの根源。名を？深淵？という」

「？深淵？……」

時宗は、その名を繰り返した。底知れない不安が若き執権の心の中に拡がっていく。

「不幸かな、この列島の下に？深淵？の身体が眠っている。それを取り戻しに来るのだ」

「もしも、？深淵？が肉体を取り戻したら？」

「人の世は終わる」

時宗は言葉を失った。秋の虫の声だけがいつになく冷たく響く。沈黙を破ったのは烈斗だった。

「江ノ島を借りたい」

「な、何故？」

「？深淵？の狙いは、この関東だ。この地の真下に最も多くの身体が埋没しているという。江ノ島に陣を敷いてヤツを迎撃する」

「我らも」

「いや。鎌倉から出た方がいい」

「逃げる、と言われるか？ 板東武者を何と心得る！？」

執権の言葉は烈斗が静かに上げた手で遮られた。

「相手は魔だ。人ではない。大蒙古の侵攻など兇戯に等しい。この戦いの結果がどうなるかは、俺にも分からない……だが、あなた達には生き延びて欲しい」

シエラザードは、ついに嵐の中へ突入した。シンドバッドは、波と風を巧みに読んで疾走する。渦巻く嵐の外輪部を使つて、一気に加速する。禍を転じて福となす策だ。

「お手伝いしましょう」

シーガードが帆の調節を買ってでる。シンドバッドは一瞬躊躇した。

「異教徒の女にはまかせられませんか？」

シンドバッドは凶星を指されて苦笑した。だが、相手はリヴァイアサンの艦長だった人物、操船技術もかなりのもののはずだ。

「頼むぜ」

アヴァ力は、毒の後遺症と船酔いでぶっ倒れている。メランシアスとルウルウは戦力外だ。三人とも船室に避難させてある。さすがのリユートも不慣れな海では、その活躍は期待できない。そんな状況下でシーガードの申し出は頼もしい限りだった。

雷光が閃いた瞬間、何かが前方に浮かび上がった。シエラザードの全長よりも長い、ナニかが大蛇のように鎌首をもたげている。

「大海蛇！？」
サベント

シーガードが叫んだ。しかも怪物は一匹だけではなかった。荒波

の中に総勢十匹の海蛇がうねっているのだ。

「海蛇なんかじゃない！ やつらだ！ ？ 深淵？ の手先だ」
リユートが怪物の正体を看破した。

「あれは触手だ。本体は海面下にいる」

「アレが？ 深淵？ …… ともない化け物だぜ」

十本の触手がシエラザードの行く手で待ち構えている。あ的一本が振り下ろされてもシエラザードは海の藻屑となるだろう。

「一か八かだ、嵐の中に逃げ込む」

「無茶だ」

「どっちみち、このままじゃ、あの触手に潰されるのがオチだ」

シンドバッドは、シーガードの制止を振り切って、進路を暴風雨の中心に向けた。

遙か北方の洋上。南の大嵐など嘘のような静かな海だ。快適に進

むリヴァイアサンの船内で、女薬師が舌打ちした。

「逃げたか…… しかし、どの道、あのハリケーンで海の藻屑……」

「うまくやれば、さらに航路を短くできる」

そんなシンドバッドの期待をよそに風雨はさらに激しさを増し、波は荒れ狂った。

シーガードが満身の力で帆を支える。並みの男なら吹き飛ばされているだろう。

「やるな」

シンドバッドは、内心舌を巻いた。

だが、女騎士の奮闘も虚しく、帆柱が風圧に耐えかね裂け始めた。
「神よ」

間一髪。帆柱に銀色の物体が絡みつき、破碎を封じた。リユートのセーデだ。

「支えて！」

「おお！」

シーガードは肩口で折れかかった帆柱を立て直す。

「凄い。さすが父が見込んだだけはある」

雷光の中で、シーガードが頬を赤らめるのが分かる。リユートは、また仄かな嫉妬を感じた。少なくとも、この女は父を愛している。

船尾ではシンドバッドが操舵に悪戦苦闘していた。帆が風を孕んだが、その分、制御が効かない。このままでは、嵐のさらに深部へ引き込まれてしまう。

「くっそおお、戻れ！」

その時、急に舵が軽くなった。

「ざまあないな。カリフの子」

隣を見ると、アヴァカが並んで舵を押してくれているではないか。

「おっさん。てつきり船底でゲロ塗れになってると思ったぜ」

「ふん。軽口叩いてないで、もつと力を入れんか！」

帆柱の先に不気味な青い光が点る。雷光ではない。

「セントエルモの火!？」

シーガードが思わず十字を切る。

光は二ヶ所に増える。

「吉兆だ。カストルとポリュデウケス」

いつの間にか甲板に出てきたメランシアスが叫ぶ。

「航海の守護神の名じゃよ。古代ギリシアでは、火が二つ出現すると嵐が収まると信じられておったのじゃ」

そのメランシアスの顔に光が射す。荒れ狂う雲間を一条の光が貫く。嵐を抜けたのだ。船上の人々はそれぞれの神に感謝を捧げた。

やがて、雷雨も止み、風もゆるやかになった。

「ありがとよ。おっさん」

シンドバッドがアヴァカに手を差し出した。

「何で助ける気になった？」

「生きてみたくなった……それだけだ」

アヴァカはシンドバッドの手を握り返した。

「男つてのは単純ですね。どうやっても、ああいうマネはできない」
シーガードがシンドバッドとアヴァカを指差して可笑しそうに笑った。

「よかった……」

リユートも緊張が解けたように微笑んだ。が、そのまま崩れるように倒れ込む。

「お、おい!？」

シーガードが慌ててリユートを助け起こした。

同時に帆を支えていたセーデが液化化し、帆柱が倒れる。

「危ない!」

アヴァカが怪力で帆を受け止め、甲板に横たえる。

「どうした!？」

「わかりません。急に倒れた」

さすがのシーガードも慌てている。

「やっぱり……無理しやがって。この銀色の泥を操ると、リユートは凄まじく体力を消耗するんだ」

いつも鮮やかに輝いている左手の蒼球が、幾分弱々しい。

「そっぴや、アヴァカ殿を毒から助けた時もなくたくじやったな」

メランシアスがリユートの脈を測りながら付け加える。

「俺を救うため……」

感慨深げにアヴァカはリユートを見下ろした。

「おい! 助けられるのか!？」

アヴァカがメランシアスの襟首を掴んでぶんぶん振り回す。

「落ち着け、將軍殿! 休養を取らせ、十分な栄養を摂取できれば、すぐに回復する」

「これを食わしてやってくれ。精がつく」
アイラゲ

アヴァカは、非常食である馬乳酒に漬け込んだ干飯を差し出した。

「世話になったな」

すやすやと眠っているリユートを見て、安心したのかアヴァカが

ぼそりと礼を言った。

「情けないことになっちまった……。味方に、しかも最も信頼していた者達に裏切られるとはな」

「コンクルタイ……彼は、あなたの弟君のはずです。それがなぜ？」

シーガードの言葉にアヴァカは感心した様子で言った。

「ほお。ベネツィアの獵犬……さすがにくわしいな」

「？マルコ・ポーロ？という名前があります！」

「まあ、いい。実はコンクルタイは実の弟ではない」

「なんと？」

「ベネツィアもそこまでは知らなかったようだな……。コンクルタイとは、我が父、フラグにまで遡る腐れ縁だ……」

アヴァカの父、フラグには、兄弟同然の腹心がいた。それがコンクルタイの父親であった。野心家であった彼は、時の皇帝モンケに対して謀反を企む。だが、計画は事前に察知され、コンクルタイの父は処刑される。モンケは、さらにその一族をも皆殺しにしようとする。モンケの弟であるフラグはコンクルタイの助命を嘆願、彼を自分の息子として受け入れるのだった。

だが、皇帝モンケの怒りは深く、自らの弟フラグに対しても左遷同様の西方辺境の遠征を命じる。だが、不屈の闘将フラグは、困難を極める遠征を成し遂げ、中近東に確固たる勢力を確立するに至るのだった。

当然、アヴァカとコンクルタイも兄弟同然に育った。だが、コンクルタイは、心の底では自らの両親を奪ったハーンの血を恨んでいた。

「それは日頃のあいつの言葉尻からも見て取れた。俺や父に？天下を取れ？とか？皇帝を討て？とか冗談交じりに言っておった。もしかすると、コンクルタイにとっては、我ら一族の温情はかえって重荷、いや恨みの源だったのかも知れん」

「ひでえ逆恨みだな」

シンドバッドが憮然として言う。

「違う！」

当のアヴァカがそれを猛然と否定した。

「違う……それでも、俺たちは？兄弟？だった。厳寒の山脈、熱砂……西方の苛烈な世界を乗り越えるには、お互いの力を合わせ、お互いの足りない部分を補い合うしかなかった。コンクルタイは頭の切れる奴だった。俺と違ってな。だが、病弱で、西方の過酷な気候には耐えられなかった。中近東に入ってから、とうとう風土病に倒れた。そこで評判の薬師くすしを連れてきて治療させたところ、見違えるように元気になった。大層美人な女薬師だったのが、何よりの？薬？だったらしいがな」

アヴァカは微笑した。シンドバッドとメランシアスも、にんまりと笑い頷き合う。

「コンクルタイの様子が変わったのは、その頃からだったような気がする。今までは机上で地図を眺めて戦略を練る方を得意としていた男が、急に騎馬や弓矢を使いこなすようになった。以前は優しすぎるくらいだったのが、どうかすれば刃のようにギラギラとしている。元気になったのはいいが、どうにも扱いにくい。そちこち出かけていっては見ただけのこともないような武器を持つてくる。挙げ句は、あの薄気味悪い仮面兵士どもだ」

「ルイ王も大病から奇跡的に復活を遂げた後に、あのような冷酷非道に変貌を遂げたといわれています……そう言えば、美しい天使を見たと言っていましたね」

シーガードが思案顔で言う。

「病と美女、その後の変貌、そして結託……」

『これは聖痕よ』

シーガードの脳裏にルイ王の言葉がよみがえった。

「アヴァカ殿、コンクルタイの首筋に痣のようなものは出来ていませんでしたか？」

シーガードの言葉にギョツとするアヴァカ。

「たしかに……なぜ、それを？」

「やはり……根は一緒かもしれませんね」

「？深淵？……リユートがそう言っていた」

シンドバッドがリユートの寝顔を見ながら言った。

「？深淵？か……。我々マルコ・ポーロも各勢力の背後に巨大な組織の存在を感知していましたが、どうにもその正体は掴めなかった」
「リユートは悪魔みたいなものだと言っていた」

「人心を操り、戦乱を拡大させる……目的は分らないが、まさに悪魔の所行ですね」

シーガードが唸った。

「？深淵？を倒すためには、大陸にある？天空？という秘宝が必要なんだ。それを探しにリユートは旅を続けているらしい」

「だが、大陸には悪魔が棲んでいると、もっぱらの評判です」

「すると、その？深淵？とやらの本拠も、大陸にあるというのか？」

三人の談義は延々と続くかに思えた。皆、内心不安なのだ。

「まあまあ、考えてても仕方あるまい。ワシの計算によれば、あと数日で大陸じゃ。どうせ一悶着あるじやろうから、休める時に休んでおけ」

メランシアスの提言で一同は散会、就寝することにした。

相模湾に面する由比ヶ浜。踊念仏の一団が天幕を貼っている。僧一遍に先導され、全国から集まってきた信者達である。その多くは、ここ数年の天変地異に怯え、救いを求めてすがってきた一般市民達である。

「今日は一段と集まっておりますな」

河野通有は、目を見張った。

「それだけ、終末への恐れが民衆に蔓延しているということだ。人心を不安に導き、混乱させる。これも？深淵？のやり口のひとつだ」
天空丸烈斗が低い声で言った。

「それにしては、連中賑やかですな」

群衆の中には、炊き出しにありつけると群がってきた無宿者や流

民の類、見物人が集まるのを見越して香具師や旅芸人も集まり、一種異様な集団が形成されている。

その中心で奇妙な舞を踊っている僧侶。いや、ボロボロの袈裟を羽織っているから辛うじてそう見えるだけで、頭はボサボサ、顔も髭ボウボウ、周囲の無宿者の方が小奇麗に見える。振りも特に決まっているわけでもなく、リズムもめちやくちゃ、だが軽快なステップ。そこへ周囲の旅芸人達が笛や太鼓で即興の曲を付ける。

「ハハハ、一遍殿。やっておるな」

「人心が惑うとき、多くは信仰に頼る。だが、その信仰対象……多くの場合、神だが、そこには？深淵？が大口を開けて待ち構えている。今、中東の地で起こっている文明間の大衝突も多くは互いの信仰の違いによるところが多い」

一遍とその信者達と旅芸人達による一大セッションは最高潮に達しつつあった。ついには、軽業師の連中も加わり、曲にあわせて、アクロバットを披露し始めた。

不安な顔をして遠巻きにしていた鎌倉の民も、思わず体で拍子をとって、軽妙な技に笑顔を取り戻し始めた。

「一遍殿は、もしかして、ああやって戦っているのかもしれないな」

「ああ。人心を鬱屈させ妄信させる神々に、舞うことによって対抗しているのだ。見たまえ、彼らのあの笑顔を」

そう言う、烈斗に笑顔は無かった。

宴は終わり、踊りつかれた人々は雑魚寝している。その中央で一遍は上半身裸で、汗を拭きながら、肥え太りつつある月を見遣っていた。

「お疲れ様です。一遍殿」

通有が親しげに声をかけた。それもそのはず、一遍は通有の父と従兄弟同士なのだ。

「おお。久しぶりだな通有。おお、それに天空丸殿」

「この度はご協力ありがとうございました」

烈斗が深々と頭を下げた。

いつの間にか、周囲で寝ていた旅芸人や流人達が起き上がっている。

こやつら、只者ではない。

その眼光、気配、旅芸人というよりは、戦士つわもののソレである。中には、肌の色、目の色の違う異国の民もいる。

「踊念仏と共に鎌倉へ兵を集めるとは考えましたな」

「左様、世界各国から集められた精鋭部隊。それぞれが覇道の使い手でもある」

「これが、噂の天空衆……か」

通有は万軍を得たような頼もしさを感じた。しかも、その数、千は下らない。

「一遍殿はこれから何処へ」

「関東は離れた方がよいのだろ？」

「ええ、このへんは戦場になります」

「それでは、鎌倉の民を踊りで釣って、東北にでも連れて行くか」

「それはいい」

一遍の提案に、烈斗は満足げに頷いた。

一般民衆を巻き込むわけには行かない。そして、彼らの力が荒廃するであろう都市の復興には欠かせないものとなるのだ。

嵐を抜けて数日が経過し、大陸はすでに間近に迫っているはずだった。

だが、大陸が見えるであろう水平線には、白い壁が広がっていた。
「霧だ……これが祖父じいさま様の言っていた霧なのか」

シンドバッドは、祖父の悪夢の根源を、ついに目の当たりにした。
白く深い霧は風に流されることもなくシエラザードの行く手に立ち塞がっていた。

「潮の流れが速い。このままじゃ、あの霧の中に突っ込むぞ」

メランシアスが不安げな声を上げる。

「どっちにしろ、大陸はあの霧の向こうだ。突っ切るしかない」

シンドバッドは汗ばんだ手で舵を握り締めて、真っ正面を見据えた。

ついにシエラザードは霧の中に突入した。周囲は乳白色の世界となり、数メートル先も見えなくなってしまった。

船底に何かが当たった。

「しまった！ 暗礁か！？」

海面を見下ろすと、波間に深緑の異様な物体が一面に漂っている。「海藻だ」

霧の海に海藻が繁茂しているのだ。中には意思を持っているかのようにシエラザードに絡みついてくるものもある。

「いかん。このままでは、こいつに取り込まれて動けなくなってしまふぞ」

シンドバッドは微風を帆に捉えて、海藻の海に出来ている水路を進んでいく。

海藻の茂みの中には、古代ローマ船、バイキング船……様々な時代の船の残骸が包み込まれている。

「おい。あれは」

メランシアスの指差す方にモンゴル船や聖十字軍艦が難破している。いずれも海藻に絡みつかれ動けなくなってしまったらしい。甲板に動く影が見えた。

「乗組員か？」

だが、それは人ほどの大きさがある巨大な甲殻類だった。シンドバッドは、インド洋の島々で見たヤシガニを連想した。数体の怪物が難破船の上をノソリノソリと歩いている。乗組員はこの連中の餌食になったらしい。まさに？ 海の墓場？ だった。

「リヴァイアサンの姿はないな……」

シーガードは訝しそうな目で、白い霧の中に自艦を探していた。海藻の迷路をシエラザードは、わずかな風と、緩い潮流で何とか

前に進んでいった。

前方に分岐点。右に広い水路、左に狭い水路。広い水路の方が安全そうに思える。シンドバッドは舵を右に切ろうとした。

その時、オウムのバブガウがけたたましい声を上げて飛んできた。

「シンドバッド！ シンドバッド！」

「この忙しい時に何事だ！？ このバカ鳥！」

メランシアスが五月蠅そうに追い払おうとする。

「よく聞け。我に続く者よ」

オウムの甲高い声が、急に落ち着いた声に変わった。

「辛い航海を経て、今、君は深い霧の中にいるはずだ……よくここまで辿り着いた」

「祖父様の声だ……」

シンドバッドは、予想だになかった懐かしい声を聞いて愕然とした。

「二つの水路があるだろう……広い水路は危険だ。右の水路を行け」シンドバッドは、祖父の声に従い、船を左に転進させる。見ると右の広い水路はみるみる狭まり、そこへ無数の甲殻類が集まってくる。自然の罠だったのだ。

オウムは祖父の声で次々と水路を指示する。シンドバッドは夢中で舵を切った。老船乗りには船の操り方を習った辛くとも楽しい日々が思い出される。

霧は、突入した時と同様に、唐突に終わった。ついにシエラザードは霧を抜けたのだ。

西方遠くに緑あふれる大陸が見える。

「……来たな。ついに」

一同は感慨無量の表情で大陸を見つめた。

空気を切り裂く音が静寂を破った。真上からだ。思っ間もなく左舷に猛烈な水柱が上がる。揺らぐシエラザード。

「この砲撃……リヴァイアサン!?」

シーガードが船尾へ走る。

背後の霧の中から巨艦リヴァイアサンが幽霊船のようにゆつくりと姿を現した。

「王よ、我が策、見事に的中しましたぞ」

船首で望遠鏡を構えるコンクルタイが得意げに吠えた。

さすがの？龍の眼？にも、海の墓場の抜け道はなかった。海の怪物のために犠牲は増える一方。そこで、コンクルタイは、後から来るであろうシエラザードを先行させ、その後を密かに追尾して、まんまと霧を抜けることに成功したのである。

風を切って次々と飛来する砲弾。シエラザードは着弾が巻き起こす大波に翻弄されながらも辛うじてすり抜けていく。奇跡的なシンドバッドの操船技術の成せる技だが、それも長続きはしそうにない。豪雨のように降り注ぐ海水の中をシーガードがシンドバッドのそばに這い寄ってくる。

「あまり大声で言いたくはないのですが、リヴァイアサンは真つ正面が死角です。そのエリアに入っていれば逃げ切れます」

「逃げ切ったところで、奴らに大陸上陸を許すことになる！ その死角を突いて、敵に肉迫すべし！」

アヴァカが割ってはいる。

「よもや、こんな小さな船が反撃してくると思つまい」

「無茶です」

「取られたものは取り返せ！ と言ったのは貴様だぞ」

「むっ……」

シンドバッドは決断した。帆の向きを変え、シエラザードを急速回頭させる。

「ルイ王とコンクルタイを倒せば、あとは烏合の衆。行くぜ」

コンクルタイは、突進してくるシエラザードに驚愕の色を隠せない。

「なに？ 自殺する気か！？」

「生意気な。撃て」

ルイ王の号令一下、リヴァイアサンの砲が火を噴く。だが、砲弾は当たらず、さらに突進するシエラザード。

「どういうわけだ!？」

「死角を突かれました! 突撃船用意!」

モンゴル艦隊の戦闘力ヤックが準備されるが、時すでに遅くシエラザードはリヴァイアサンの横腹に取り付いていた。アヴァカが怪力で錨縄をリヴァイアサンの舷側へ投げ上げる。錨縄は放物線を描き、甲板へ突き刺さる。固定された縄をするするとよじ登るシンドバッド、アヴァカ、シーガード。

舷側から下をのぞき込む兵士達が、慌てて錨縄を外そうとする。

半ばまで来た三人は慌てる。縄を外されれば真つ逆さまだ。

「まずい!」

下方から白銀の刃が飛ぶ。セーデの短剣が兵士を貫く。

「リユート! ありがてえ!」

「お先に!」

リユートはアヴァカの肩を踏み台にして、甲板まで一足飛び。倒した兵士からセーデの剣を引き抜くや、押っ取り刀の兵士達を迎え撃つ。一拍遅れて甲板に躍り込む三勇士。

艦尾の高見台に立つ、ルイ王、コンクルタイ、そして謎の女薬師くすし。女薬師の視線とリユートの視線が一瞬だが絡み合う。

「あいつ!？」

お互い、真の敵と認識する。

「目指すは、王とコンクルタイ!」

リユートが先行し鉄面兵へ霸道を炸裂させる。たちまち骸と化する銀仮面。血路が開く。突貫する四人。

コンクルタイは、形勢不利と見るや、周囲の味方艦へ応援を命ずる。殺到する艦隊。

「まずい!」

シンドバッドは隊列を離れると、砲手を打ち倒し砲塔を占拠する。

だが、撃ち方が分からない。そこへ、いつの間に昇ってきたのか、メランシアスが潜り込んでくる。

「ふむふむ。ここをこうして」

興味深げに大砲をいじり回す。弾を込めて、火薬を詰め、導火線に火をつける。

「これで、どうじゃ！」

轟音と共に砲弾が撃ち出され、聖十字軍艦が木っ端微塵になる。

「なかなかの威力じゃな」

「よおし。俺も」

シンドバッドも見よう見まねで別の大砲を操る。狙うはモンゴルの旗艦テムジン。轟然一発。自慢の装甲が四散し、艦首の竜の首がへし折れた。

二人は、今までの鬱憤を晴らすかのように周囲の艦を狙い撃つ。

リユート、アヴァカ、シーガードは、ついに艦橋へ突入した。

ここでもリユートが先陣を切り、親衛隊をなぎ倒す。

シーガードは、怨敵ルイ王と対峙する。

「ほう。艶やかな。どこのご婦人かと思えば……。シーガード殿であつたか」

「約束通り、我が船と誇りを取り戻しに参りました」

構えるシーガード。剣を抜くルイ王。

コンクルタイの前に立ち塞がるのはアヴァカ。

「あの毒から立ち直るとは……。さすが兄上」

アヴァカは、意外にも剣を捨て、両手を広げる。

「いいだろう！ コンクルタイ。俺が死んで、お前の魂が救われるというなら、この命、喜んでやろう」

コンクルタイは、その真摯な視線に射竦められたように動けないままにいる。

「さあ、殿。何をしているのです。世界帝国はあなたの掌中にあるのですよ。さあ、今一度、ヤツめに死を」

女薬師の声に操られるようにコンクルタイは剣を構えた。

「いかん！」

アヴァカを助けようとするシーガードだが、ルイ王に阻まれる。

「貴公の相手は、余だぞ」

その剣技は脅威。シーガードと言えども全力で当たらなければ、危険。だが、アヴァカに気を取られた一瞬の隙を突かれ、剣を弾かれてしまう。

「甘いな……女らしく刺繍でもしておればよかったものを」

「殿！ さあ、さあ、さあ！！」

女薬師の声は、ほとんど絶叫だった。銀仮面の親衛隊をあらかた片付けたリユートが迫ってきているのだ。

「う、うわあああああ！」

コンクルタイは、泣き叫ぶように剣を構えると、やおら女薬師に斬りつけた。剣が肩口に突き刺さるが、薬師は平然としている。一滴の血も出ていない。

「殿……バカな御方。この始末が、どのようなことになるか、お忘れではありませんまい？」

一転、女薬師は鬼の形相となる。

「愚か者が！」

同時にコンクルタイの首筋の痣が破裂する。濁流の如く噴き出す鮮血。

「コンクルタイ！」

流血を浴びながら、アヴァカは倒れ込むコンクルタイを受け止めた。

コンクルタイの昏倒と同時に、異変はルイ王にも襲いかかった。王の首筋の聖痕が異様に膨張する。シーガードを圧倒していたルイ王だったが、ガックリと膝を折る。痣は破裂するに至らないものの、

王は大量の血を吐き散らした。

「ルイ王!？」

シーガードは思わずルイ王を助け起こしていた。

女薬師が自らの肩を軽く撫でると、傷口がみるみる塞がっていく。

「やはり、? 深淵? の傀儡か!」

女のセーデのボディを見て、リユートが正体を看破する。

「ちっ! しくじったか」

女薬師は舌打ちすると、踵を返して甲板から海へ逃げようとする。

「逃がさん!」

駆け込んできたリユートが女薬師に拳を叩き込む。

「打ッ!」

女薬師は、その拳を掌で平然と受け止める。

「天空丸……霸道か」

「蹴ウツ!」

間髪入れず、放った蹴りもキャッチされてしまった。

「効かないんだよ。そんな技」

女薬師はリユートの足を掴んだまま放り投げる。リユートは、もんどり打って倒れる。

「どうして? って顔してるわね。霸道の極意は制御球から放たれる微弱な電流をコントロールすることにある。それによってセーデの剛柔を操って、武器にしたり、傀儡のボディを壊したりする、でしよっ?」

「ほざくな! 傀儡」

霸道の基本を敵から言い放たれ、リユートは逆上した。

「あんな死に損ないと一緒にしないでよ。つまり、霸道を使い。セーデを操れるのは、天空丸だけじゃない、ってことさ。もう、隠している必要もないだろう」

女薬師が指を鳴らすと、波間を割って幾本もの触手が出現する。そのうちの一本の上に飛び乗る。

「あれは！ 嵐の夜の怪物」

敵艦隊を撃沈させたシンドバッドが砲塔から顔を出して仰天する。
「あの怪物……セーデで出来ている」

これだけの大量のセーデを操る敵をリユートは呆然と見上げるしかなかった。

「ハハハハ……私の名は、スキューレ。お前達よりも遙か昔から私は？ 深淵？ にセーデを与えられ、自分の体の一部として使いこなしてきた。こんな風にね」

触手が振り上げられる。シンドバッド達もろとも艦橋を粉碎しようというのだ。

リユートは無意識のうちに迫り来る触手の前に身を投げていた。

「リユート！？」

リユートの手の甲の制御球が、今までに無いほどの蒼い光を放っている。

怪物の太い触手が、その光に触れた途端、弾かれる。

「何！？」

驚愕するスキューレ。

「あ、あれは……あの光は……私よりも強い力だと」

無理に光を突破しようとした触手は形を失い、溶解していく。

「ちい！ 忌々しい」

形勢不利と見たスキューレは、海の魔物と共に海中へ没していった。

スキューレの猛威が去ったと同時にリユートが崩れるように倒れる。シンドバッドが抱き留める。

「畜生！ まただ。またリユートに無理させちまった……」

リユートの体をひどく軽く感じながら、シンドバッドは自らの無力を呪った。

一方では、アヴァカが虫の息のコンクルタイを抱きかかえていた。
「兄上……」

「口を利くな」

「やはり……アンタは……親分だ」

再び大量に吐血すると、コンクルタイは、そのまま事切れた。

「人の心は闇だ……俺はお前を、どれほど愛しておったか……」

コンクルタイの亡骸を抱きしめるアヴァカの肩にシーガードが手を触れる。

「アヴァ力殿。たしかにコンクルタイは悪魔に魂を奪われていた。

それはあなたへの恨みだったかもしれませんが。けれど、その悪魔から彼を救ったのもあなたです」

「俺がコンクルタイを救った……！？」

「見なさい。彼の死に顔を、とても安らかだ。彼は……神に召された……」

「そう願いたい……神がいるならな……」

アヴァカは、天を見上げた。^{テングリ}故郷の平原と同じ青い空を。

海中を進む怪物。名をクラケン。その姿はダイオウイカに酷似しているが、その大きさは実に十倍はあるうか。そのボディは流体金属セーデで出来ている。生物というよりは、現代の潜水艦に近い。

その中心の空洞でスキューレは憤怒の表情で座していた。

「情けない、男ども……」

スキューレにとって、男は常に倒し、服従させ、そして殺す存在でしかなかった。スキューレは目を閉じた。太古の華々しかった記憶がありありと思い出される。

平原に累々と横たわる屍。それは、どれも男。その中でただ一人生きている男がいる。すでに傷つき戦意を無くしている。スキューレは、そんな無抵抗な男を足で踏みにじる。

「さあ、どうしてやろうか？ この間のヤツは、生きたまま皮を剥いでやった。今日は両手両足を刻んでやろうか」

死を覚悟した戦士は、厳しい表情で目をつむっている。

「はん？ 命乞いのひとつもすればかわいげもあるんだがねえ。まあ、いいさ。今に悲鳴をあげるんだから」

スキューレは刃物を逆手に持って男に迫る。

「お待ちなさい！」

スキューレの動きが止まる。また、あの女だ。ガラテ。

「無抵抗な者は傷つけるな、とハジマ様も言っているでしょう」

ハジマの名を出されるとさすがのスキューレも口答えが出来ない。

ガラテは、スキューレを突き飛ばすようにして遮る。

「それに？ 彼？ は立派な戦士だ」

ガラテは男の方を見る。何とも穏やかな表情。味方であるスキューレには見せたこともない。笑顔というヤツだ。

「戦士よ。あなた方は、？ 深淵？ に操られているだけ。私と共に戦おう」

ガラテは手を差し伸べる。男に言葉の意味が分かるはずがない。

だが、男は差し伸べられた手を握り替えしたのだ。呆氣にとられるスキューレを尻目に、ガラテは男に手を貸して起き上がらせてやる。

この女は、男を殺すどころか、仲良くなっている。それが、いつしか、彼女達の美德とされるようになっていった。いつの間にか、自分達の隊列に男どもが加わっている。

男は敵だ。屈服させ、殺す者だ。

彼女は、ガラテを許せなかった。戦士の誇りを地に墮とした裏切り者。

すでに彼女にとって？ 天空？ も？ 深淵？ もどうでも良かった。自分のアイデンティティを存続させるためには、ガラテを殺すしかなかった。ゆえにスキューレは喜んで？ 深淵？ に魂を捧げた。

スキューレは、？ 深淵？ の核を自らの体の中に受け入れることによって、永遠の命を約束された。与えられた核は自己増殖し、因子を生み出す。それを他者に植え付けることによって自在に操ることが出来るのだ。核は、今も自分の肉体の中で息づいている。スキューレ自身に経験は無いが、子を宿すというのは、こういうことなの

だろう。

だが、あの女、ガラテそっくりの小娘がやって来た。天空丸龍斗。今までもあの忌々しい光を操る、霸道の使い手に邪魔をされ続けてきた。だが、光を操る時、奴らは相当の生体エネルギーを消耗する。先ほど、あの娘は男どもを助けるために光を使い過ぎた。いつだって？天空？の戦士は、そうだ。他人を助けるために自分の命を削る。

「次は、そうはいかないよ……」

怒りに任せて、モンゴル人を処刑したのはいいものの、聖十字の王にまでダメージを負わせたのは失敗だった。だが、幸いにもリュート達は、王を殺さずにいる。そのため奴らの動向は手に取るように分かる。スキューレは、首筋に彼女の因子を植え付けた世界中の男どもの行動をリアルタイムで感知できるのだ。

そして、今、体内の核が激しく鳴動している。？深淵？の復活までに一刻の猶予もない。天空丸の娘の大陸への上陸、これは絶対に阻止しなければならない。

奪回されたりヴァイアサンはシエラザードを曳航しながら巨大な半島を目指した。大陸まであとわずかだ。

激戦の中、生き残った兵士、船員はごくわずか。モンゴル兵はアヴァカの前にひれ伏し、聖十字騎士はシーガードに忠誠を誓った。

メランシアスは昏睡するルイ王を診察した。脈を取り、瞼を開けて瞳の動きを見る。

「衰弱してはおるが、命に別状はない。どうもコンクルタイの死と関係がありそうだな」

「あの女の妖術か……」

アヴァカが怒りのこもった低い声で唸る。

「この首筋の痣……これが悪魔に魅入られた印なのだな。人を操る何らかの仕掛けが施されているようだ」

メランシアスが今度はルイ王の聖痕を天眼鏡でのぞき込む。

「それではルイ王が病に倒れた時に見た天使というのは、先ほどの魔女なのですか」

シーガードが哀れむように王を見下ろす。

「とんだ天使様だ……」

「あの海の怪物に乗って、様々な国を渡って暗躍しているのでしょうか」

「いや、あの女一人とは限らんぞ」

メランシアスの言葉にアヴァカとシーガードは見えない大軍に取り囲まれているような気分になった。

シンドバッドは寝台のリュートを見舞っていた。

「なんでまた、あの力を使った？ さっきは死んだように眠ってたぞ」

「もう、目の前で仲間が死んでいくのは……イヤだ」

リュートは、毛布の下から両手を出して、指輪を見せた。

「仲間は十人いた……。最初の襲撃で五人が倒れた。その後も敵は追いつがり、オツやコンは盾となって討たれた。イノシロウは死体も残らなかった……」

右手の中指と左手の親指、薬指には指輪がはまっていない。シンドバッドは理解した。指輪は、リュートの仲間の遺品なのだ。倒れた仲間から受け継いだもののなのだ。

「ユイガは、私と同じ年だった……」

ユイガは、リュートと幼なじみの少女だった。天空衆の娘で星読みを得意とした。荒野や砂漠を渡る道中、彼女の天体観測術が正確な進路を教えてくれたのだ。

敵の追撃を辛くも逃れたが、すでに九人の仲間を失い、リュートとユイガの二人だけの過酷な旅が続いていた。

疲れ果てた二人は、イラン北部のアルボルズ山脈にある鷲の巣城

アラムート

と呼ばれる砦跡に身を隠した。かつて「山の老人」と呼ばれる謎の指導者に率いられた暗殺集団の根城になっていた場所でもある。彼らを滅ぼしたのが、アヴァカの父であるフラグというもの、今となつては皮肉な話である。

二人は、「老人」のかつての自室と思われる岩窟で腰を落ち着けた。バルコニーのような張り出した岩があり、そこへ出てみると、夜空一杯の星空を見ることが出来た。星座が織りなす神話の世界が、一時、二人に決死行を忘れさせてくれた。

「リユート様。星占いをしてさしあげましょうか？」

ユイガは、そう言う手鏡ほどの大きさの渾天儀アストロベを取り出し、星の位置を測り始めた。

「待った。未来は自ら切り拓くものだ。予言などに頼りたくない」

「フフフ、お父様にそっくりですね」

「そうかな……。本当は自分の行く末を見るのが怖いだけさ」

「いいえ。リユート様は勇気のあるお方。そして決して諦めないお方」

二人は黙り込んで、しばらく星々を眺めていた。

「それより、笛を吹いておくれよ」

沈黙に耐えかねたリユートがユイガにせがむように言った。

「ずっと戦い続きでしたからね。笛を奏でるのも久しぶりです」

ユイガも嬉しそうに横笛を取り出すと、得意の曲を吹き始めた。

緩やかな調べが荒涼とした山々に響き渡る。曲の名は「鹿鳴」。

深山で愛を語る鹿の歌を描いた曲だという。

「ユイガの笛を聞いていると心が和む……」

今までの旅の疲れが押し寄せてくる、リユートの全身を気怠い感覚が包んでいく。

唐突にユイガの笛の音が止んだ。

同時にリユートの全身に生暖かい液体が降り注ぐ。匂いでそれが血だと分かった。

「ユイガ!？」

ユイガの背中から胸を細長い槍のように鋭利な物体が貫いている。物体は触手のように軟体化するとユイガの体から抜け出て闇の中へ消えていく。

リユートは、ゆっくりと崩れ落ちていくユイガを必死に抱きかかえた。その間にも彼女の胸からは大量の血が流れ出ている。

「リユート……様」

「今、助ける……！」

リユートは、左腕に力を込める。癒しの力を使えば助けられるはずだ。

「ダメ！ 逃げて」

ユイガがリユートを渾身の力で突き飛ばすのと、触手がユイガの体を引き裂くのは、ほとんど同時だった。もしもあのままユイガを抱きしめていたら、二人ともあの触手の餌食になっていた。

奇襲に失敗した触手は、蛇行しながら再び闇の中に去っていった。その時、リユートは確かに聞いた。嘲るような女の笑い声を。嘲笑はみるみる遠ざかっていった。

「ユイガアアアッ……！」

リユートの絶叫が岩窟にこだました。

リユートが右手の人差し指を見せる。

「これがユイガの指輪……」

ダイヤモンド
あの金剛石は、最後の仲間の形見だったのか……。

シンドバッドは、必要とは言え、宝石を換金してしまった自分を呪った。

「私を庇ってみんな死んだ。救える命もあつた。けれども私の力を温存させるために、みんな死を選んだ」

リユートは子供のようにボロボロと啼いた。な

「もう……嫌だ」

江ノ島では、天空衆による要塞化が着々と進行していた。わずか

数日で江ノ島の最頂部に塔が打ち立てられ、各所に塹壕が掘られる。

「しかし、天下の鎌倉殿の目前で、大胆不敵なものですなあ」

材木で組まれた塔を見上げて、通有が呆れたように言った。高さ実に百尺（約三十メートル）はあるだろう。

「執権殿には話を付けてある。親の代からの付き合いだ」

烈斗は平然と言つてのけると、持っていた革袋の中から古びてはいるが、よく手入れされた剣と鏡を無造作に取り出した。

「またまた止ん事無げな逸品ですな」
やたのかがみ　くさなきのつるぎ

「八咫鏡と草薙剣だ」

「今度は帝の神器とな！？　いよいよ底知れない御方じゃ」
みかと

開いた口の塞がらない通有を尻目に、烈斗は八咫鏡の中央に、セーデを使って草薙剣を接合する。

「これでは二種の神器じゃ」

通有が不思議そうに尋ねる。

「八咫瓊勾玉か？　ここに^{やさかにのまがたま}ある」

烈斗は通有に左手の甲を見せる。そこには、かつて博多湾でモンゴルの大軍を殲滅した制御球が輝いている。

「と言っても、こいつは模造品だ。^{レプリカ}本物はリユートにくれてやった。どこまで通用するかは、やってみなければ分かん」

「前方に異変！　人！？　お、女です！」

リヴァイアサンの檣楼上で見張りの兵が素っ頓狂な声を上げる。

だが、これを誤報と疑う者は誰もいない。総員完全武装で艦首に集結する。

波間に剣と盾を持った戦装束の女が屹立している。スキューレだ。やがて、その足下の海面から銀色の巨大な触手が姿を現し、続いて海の魔物の一部が浮上する。触手はスキューレを掲げたまま、リヴァイアサンを見下ろす位置で止まった。

スキューレは、海中を高速で航行し、先回りしてリヴァイアサンを待ち伏せしていたのだ。この怪物を前に、すでに激戦の連続で傷

ついたリヴァイアサンが太刀打ちできるはずもない。

リユートが触先に進み出て、油断無く身構える。

「スキューレ！ 一騎打ちだ。それとも私が怖いか？」

果たし状を叩きつけるが、その顔は蒼い。体力が回復しているとは言い難い。

「フン！ いいだろう。望むところよ」

リユートは、スキューレの返事を聞くと、リヴァイアサンの触先を蹴って宙に舞う。

「リユート、無茶だ！」

シンドバッドが止める間もない。

「自分が時間を稼いでくれている間に、私達を上陸させる。それが彼女の作戦です」

シーガードがリユートの真意を代弁する。

「分かっているさ！ けど、アイツはもう限界だ」

リユートの蒼球が輝き、迎撃の触手を弾き飛ばす。最初から小細工無し、全開で飛ばす。スキューレの剣の一閃。リユートは蒼球で受ける。セーデの刃は蠟のように溶解。リユートは右の拳に全体重を乗せる。スキューレの盾による防御も霸道の打撃の前に剣と同じく溶け落ちる。拳の勢いは衰えず、そのままスキューレの胸に食い込んでいく。

「打ッ！」

気合一閃。スキューレはもんどり打って倒れると、そのまま塵の如く分解していく。

呆気ない……まさか！？

危険を感じたリユートだったが、遅すぎた。背後の海面を割って新手の触手が襲いかかる。飛び散る鮮血！ 触手は背中からリユートを貫いていた。

「リユ、リユート！」

シンドバッドの絶叫をかき消すように周囲の海面が小山のように盛り上がる。さらに同型のクラケンが三体浮上したのだ。

その内の一体に勝ち誇ったスキューレが仁王立ちしている。

「お前が倒したのは、私の影。まともに戦ったら、またその蒼い玉に邪魔されるからね」

リユートを貫いた触手は、スキューレ自身の背中から突き出ていた。触手は先端に串刺しにしたリユートを軽々と巻き上げると、そのままスキューレの目の前へ運んできた。

「馬鹿ねえ。せつかくの力も無駄遣いしすぎたら疲れるだけだっていうのに」

リユートを引き寄せ、その顔をまじまじと見る。

「本当、あの女にそっくりだ……」

リユートは、吐血し、息も絶え絶えの状態だ。スキューレは、リユートの姿に満足そうにうなずくと、さらに残酷な眼差しをリヴァイアサンへと向けた。

「お前にトドメをさす前に、あの船の雑魚どもを片付ける」

一斉に動き出すクラケンの触手群。為す術無く次々と倒される騎士団やモンゴル兵。すでに残ったのはアヴァカ、シーガード、ラシード、メランシアス、そしてルウルウ。

「こなくそ！」

メランシアスが近くに残っていた砲台の一つに飛び込む。砲座が狙いを定め始めた。だが、クラケンの触手は、そんな動きを嘲笑うかのように素早い。横風ぎに砲台を根こそぎにし、メランシアスごと海中へと吹き飛ばした。

「メランシアアアアアスッ！」

老いた相棒の最期にシンドバッドの怒号が響く。だが、彼自身も振り下ろされてくる触手の一撃をかわすので精一杯だった。

「どうだいイイ眺めだろ？ 仲間が死んでいくのは」

「……貴様あ」

「おや？ まだ口がきけたの？ じゃあ、泣きなさい。叫びなさい。あの夜みたいだね」

「……あの夜……？」

「そう。呑気に笛なんか吹いてたあの娘。アイツが死んだ時みたい
に悔しがるんだよ」

「貴様が……ユイガを」

「安心しなさい。もう少し苦しめたら、あの娘のところへ送ってやるよ」

嘲笑うスキューレ。その勝ち誇った顔が真つ赤に染まった。リユートが血反吐を浴びせかけたのだ。スキューレは怒りと驚きに凍り付いた。

「天空丸を……舐めるな！」

叫びと共にリユートの渾身の頭突きがスキューレの額に炸裂した。予想外の抵抗にスキューレは一瞬怯んだ。同時にクラケンどもの触手群の動きもピタリと止まる。

その一瞬の隙をシンドバッドは逃さなかった。残存の砲台から至近弾をスキューレのクラケン目がけて叩き込んだ。

さすがのスキューレもその衝撃には耐えられず、触手が弛む。さらに第二弾、第三弾が海の魔物を直撃する。緩んだ触手はリユートの重みを支えきれず、ついにその体を解放してしまった。それを見たアヴァカとシーガードが甲板を疾駆、落ちてくるリユートを受け止めた。

「貴様ら……！！」

悪鬼の形相のスキューレ。その怒りが連動したかのようにクラケンの破損したボディがみるみる再生していく。唯一対抗できるはずのリユートは瀕死の重傷だ。

四方からリヴァイアサンに迫るクラケン。絶体絶命。

その時、蒼天を引き裂いて紫電が迸った。クラケンの一隻に命中。巨体が一瞬にして四散する。さらに上空から電光が突き刺さる、瞬間に二隻のクラケンが爆沈する。

急降下してくる影。

「あれは！？ ルフ鳥」

それは、かつてシエラガードを救ってくれた巨鳥だった。虹色の

尾羽には見覚えがある。さらにもう数羽のルフ鳥が後に続く。

「おのれ！」

スキューレを乗せたクラケンが急速潜行を開始する。だが、一際巨大な虹尾のルフ鳥が、その胴体に爪を食い込ませて、また海面へと引きずり出す。触手を振り回して抵抗するクラケン。ルフ鳥の力ツと開いた口が紫色に輝く。至近距離からの紫電弾がクラケンに炸裂する。差し違えるかのように触手の一振りがルフ鳥に叩き込まれる。触手はルフ鳥の首に巻き付くが、所詮は最後の悪あがき、その顎門あぎとに噛み砕かれる。

さらにトドメの一弾が放たれる。まるでリュートの蒼球の光を浴びた時のようにスキューレもろとも海の魔物はグズグズと崩れていく。

「神よ……」

その人知を越えた戦いにシーガードは思わず十字を切った。

この戦いで虹尾のルフ鳥は傷を負ったのか、仲間のルフ鳥に支えられるように陸地の方へ飛び去っていった。

一羽のルフ鳥が残り、リヴァイアサンに並ぶように海面にその巨体を着水させた。虹尾ほどの大きさはないが、その長い首で甲板をのぞき込む。近くで見るルフ鳥は、頭部に黒い兜のようなものを被っている。ルフ鳥は洞窟のような口を開くと虫の息のリュートに近づいてくる。シンドバットは思わず剣を構える。

「……いいんだ」

意外にも、止めたのはリュート自身だった。

「私は一足先に彼らの元へ行く……龍人りゅうじんの元へ」

リュートの傷は深い。出血は止まる様子がない。

「メランシアスもない。私達では、どうすることも出来ない。彼らに託しましょう」

シーガードの言葉に、意を決したシンドバッドは、リュートを抱き上げた。

「大丈夫……すぐ会える」

リユートが青ざめた顔で微笑む。シンドバッドは笑い返そうとしたが、口元が引き攣るだけだった。ルフ鳥は、シンドバッドから差し出されたリユートをやさしく口にくわえると翼を拡げて飛び立っていった。巻き起こる風に飛び散った潮が甲板を濡らす。

「追うぞ！」

シンドバッドが叫ぶ。

「こいつでどうやって追うってんだ？ 船長さん。風呂の薪にしかないぜ」

アヴァカがリヴァイアサンの折れた三本マストを指さす。

「シエラザードに乗り込むんだ」

生存者はシンドバッド、アヴァカ、シーガード、ルウルウ。

「この人数なら、俺の船で十分だろう」

シンドバッドが悲痛な表情で甲板に累々と転がる死体を見渡す。

「どちらにしろ人が死に過ぎた……」

その中にはメランシアスも含まれている。祖父の親友であった老科学者は、シンドバッドにとって肉親も同じだった。

シーガードが昏睡状態のルイ王を抱きかかえてくる。

「放っておけ。どうせ？ 深淵？ の手先だ」

アヴァカが憎々しげに言う。

「だからといって、このままにしておくわけにもいかないでしょう」
シーガードがルイ王を肩に担ぎ直す。

「それにスキューレは滅びたのですよ。あなたの弟君と同じく、彼も被害者です」

「……そうだな」

アヴァカは諦めたようにシーガードに手を貸した。

一行はリヴァイアサンを捨て、再びシエラザードに乗り込んだ。舳艫が解かれ、帆に風を受けたシエラザードは、ルフ鳥の飛び去った方角へ進んでいく。

「リヴァイアサン。必ず戻ってくる」

船尾に立ったシーガードは、離れ行く自分の艦をしばらくの間見

つめていた。

ルフ鳥を追って、シエラザードは巨大な半島に接岸した。シンドバッドは、投錨すると、舳綱を肩に掛けいち早く岩場へと飛び移り、手近な岩に固定した。

「荷物と食料を一切合切持って上陸だ」

リヴァイアサンの船倉にあった食料も持ち込んでいたので、あと数日は大丈夫だ。

「やれやれ、こいつも担いでいくか……」

アヴァカは船倉で転がっているルイ王を抱き起こそうとする。突然、無茶苦茶に手足をばたつかせる。

「痛ッ！ 何しやがる！？」

「どうした！？」

アヴァカの悲鳴を聞いて、シンドバッド達が降りてくる。

「どうもこうもない。いきなり噛みつきやがった。まるで死にかけの毒蜘蛛だぜ」

ルイ王は、怯えきった様子で船倉の隅で目だけをギラギラさせながら（じくじく）踞（すく）っている。

「な、ない。ない！ ないッ」

今度は狂ったように懷中を探る。どうやら激戦の中、自分の聖十字を紛失したらしい。王は絶望したかのような悲鳴を上げる。

「いよいよ、コレか？」

アヴァカが自分の頭の上で指をクルクルさせる。

「スキューレが減び、操り人形の糸が切れたようになってしまったのかもしれないね」

シーガードが哀れみを込めた目で王を見る。そして自らの懷中を探ると聖十字を取り出して王の目の前にかざす。

「王よ。ご覧ください」

「おお……」

王は急に大人しくなり、聖十字を食い入るように凝視した。

「差し上げましょう」

ルイ王は、シーガードから聖十字を引ったくると、両手で捧げ持ち口づけした。

一行は岩場を抜け、広がる白い砂浜へと出た。雲一つ無い晴天にも関わらず、突如、陽光が遮られた。上空から、先ほどのルフ鳥の群れが翼を拡げて舞い降りてくる。

「どうやら連中、お待ちかねだったようだぜ」

敵でないことは分かっているが、その巨体に本能的に脅威を感じてしまう。

ルフ鳥は、一行の前に優雅に着地すると、翼を折りたたみ、首を地面に垂れる。その頭部の兜のような部分が後方にスライドする。中には意外にも人影が座っていた。

「人？ 人が操っていたのか？」

その人影がゆっくりと立ち上がる。頭全体を覆う兜を被っている。ただし、青銅でも鉄でもない。シンドバッドは、磨き上げられたベッコウを連想した。全身も革鎧のようなピッタリとした衣装に身を包んでいる。

「いったい……どこの国の人間だ？」

シンドバッドとシーガード、アヴァカの三人は、ルウルウと王を守るように身構えた。

鎧の人物は、兜に手をやると数個の留め金を外し、ゆっくりと脱ぎ始めた。

兜の下から素顔がのぞく。シンドバッドの目は驚きのために大きく見開かれた。

「こ、こいつは……」

顔全体は薄緑色の鱗に覆われ、瞳は昼間のネコのように細く、口は耳まで大きく裂けている。あの晩、シンドバッドが船上で出会った怪人である。

「ひiiiiiiii……あ、あ、あ、悪魔!？」

ルイ王の悲鳴が、その場にいる人間達の心を代弁していた。

上方から昆虫の羽音のような耳障りな音。見上げると十名ほどの背中に翼を付けた同族が舞い降りてくる。その姿は、まさに神話伝説に登場する悪魔そのものだった。

「冗談じゃねえ。苦勞した挙げ句、目的地が悪魔の土地だと……」

シンドバッドが絶望の声を上げる。

「すると、こいつらも？ 深淵？ の手先だってことか？」

アヴァカもたじたと後ずさる。

怪人達は一行を包囲するように着地した。その手には、黒と黄の縞模様の異様な物体が握られている。まるで蜂の腹のようだ。ちよつと毒針の部分がこちらに向けられている。見ようによっては弩のいしゆみようにも見える。どちらにしろ物騒な代物には変わらない。

「こつなつたからには、仕方ねえだろう」

剣を抜くシンドバッド。

「悪魔に欺かれたのなら、脱するまでだ」

アヴァカとシーガードも、顔を見合わせて、苦笑すると、それに習つて剣を抜く。

「そこまでよ！」

背後から耳慣れない女の声が響き、シンドバッドの背に何かが突き付けられた。

「ルウルウ？」

「抵抗すれば、全員死ぬことになるわ」

声を失っているはずの娘が、物騒な言葉を発している。その手には悪魔どもが携行している武器の小型版が握られている。

さらに数頭の大小のルフ鳥が舞い降りてくる。一際大きいルフ鳥の腹には数名を運べるようなゴンドラが抱えられている。ルウルウによつて武装解除された三人は、このゴンドラに乗るように促される。

「なぜだ？ ルウルウ。なぜ裏切った？ なぜ、悪魔の味方をする」
「裏切つてなんかいないわ」

ルウルウの肌がそそげ立ったようになり、瞬時にグリーンの鱗に覆われる。美しくもおぞましい悪魔の顔に変貌した。

「これが、私の素顔」

「悪魔め！」

ルイ王が叫ぶ。

「その言い方……氣にくわないわね。後悔するわよ……あとで」

また、瞬時に見慣れた少女の顔に戻る。

「私達は、あなた達の言葉で言うならば、龍人^{りゅうと}」

「リュウト……！？」

リュートは、目映い光の中で裸身で横たわっていた。

スキューレに負わされた腹部の傷は驚くべき早さで癒えていく。

「我々の施術があつたとしても、何という治癒能力」

「これが……天空丸の肉体か……恐ろしや」

リュートの周囲で驚嘆の声が上がる。眩しい光のために声の主の姿は見えない。

「あなた達が龍人なのか？」

リュートは、臆気な意識の中で周囲の気配に対して問いかける。

柔らかく、温かい、そしてどこかで聞き覚えのある声が返ってきた。

「お帰り、我らが娘よ」

第五章 龍人の大陸

第五章 龍人の大陸

海岸から飛び立つたルフ鳥の群れは、広大な湿原の上空を征く。

眼下には、この世のものとは思われぬ巨大な怪物達が群れていた。あるものはガチョウのような頭を持ち、二本足で立ち、草をはんでいる。あるものは大蛇のように長く太い首と尾を持ち、体はゾウよりも巨大だった。

「あ、あの化け物どもは!？」

シンドバッドがゴンドラから身を乗り出さんばかりにして叫んだ。「恐竜よ。今から数千万年前は、世界中で生息していたらしいんだけど。今じゃ、この大陸にしかないわ」

ルウルウにとっては見慣れた風景らしく、さして面白くもなさそうに解説した。

数時間後には緑は消え失せ、赤茶色い荒涼とした大地が続く。殺風景な風景の連続に飽きたのかアヴァ力は大いびきをかいている。

「呑気でいいな。おっさんは」

シーガードは、興味深げに下界を見下ろし、時折、懷中からペンと紙を取り出して何事か記録している。シーガードは書き物の手を止め、シンドバッドの方に顔を向ける。

「君こそ、アヴァ力殿みたいに眠れる時に眠っておいた方がいいのではないですか？」

「眠くない」

シンドバッドは仏頂面で応える。

「心配なんでしょ？ リュート姫のことが」

「あんたは心配じゃないのか!？ 重傷だったんだぞ」

図星を指されてシンドバッドはムキになって言い返した。

「そりゃ私だって心配ですよ。でもね、天空丸は、あのくらいじゃ

「死なない」

「そうか、あんたはリユートの親父さんに会ったんだっけな。そんなに不死身なのか？」

「ああ、あれはまさに超人です。私達とはレベルが違う」

シーガードは烈斗との決闘を思い浮かべ、遠い目をした。

「だから、愛しちゃいけない。……あなたも」

「な、な、何言ってるんだよ！俺は、そんな、そんな」

シンドバッドは耳まで真っ赤になって怒鳴った。

「うるせえなあ」

不機嫌そうに起き出したアヴァカが伸びをしながら外を見た。

「おいおいおい！　ありやなんじゃあ！？」

突然、アヴァカが素っ頓狂な声を上げる。

「どうした？　どうした？」

シーガードに追い詰められていたシンドバッドは救いの神とばかり、窓の方へ乗り出した。だが、彼自身も眼前に展開された光景に驚愕の声を上げた。

「な、なんだ！？」

荒涼とした原野が忽然と断ち切られ、白亜が敷き詰められたようなモノトーンの空間が広がっていた。植物とも鉱物ともつかない、ちよつと鍾乳石を天地逆にしたような構造物が一面に林立している。だが、天然のものにしては、整然と区画され過ぎている。

「あれが私達の都市。名前は……あなた達では発音出来ないわね……約五千万人が暮らしている。あの規模の都市が、東西南北に十数市展開されていて、それぞれは地下を走る高速水路で……」

都市。これを都市と呼ぶのなら、アクロポリスの神殿もダマスカスの尖塔も、ましてや大聖堂なんて砂遊びに等しい。三人は言葉もなかった。今まで踏みしめていた常識の大地が陥没し、文明の誇りが頽れていく。

都市に接近すると、その楼閣のひとつひとつが、三千呎フット（約九百

メートル）を超す一大建造物であることが分かった。楼閣と楼閣の間の大渓谷のような空間には透明の管が血管のように張り巡らされ、その中を高速で甲虫のような物体が移動している。さらに高所ではルフ鳥の群れが列を組んで飛行している。

「さあ、そろそろ到着よ」

故郷を前にルウルウの顔は龍人のそれに戻っていた。醜悪と思っていた彼女の顔だったが見慣れてくると、理知的で精悍な面構えである。シンドバッドは猛禽を連想した。ルウルウの手には耳当てのようなものが四つ携えられている。

「さてと、降りる前にコレを付けてもらおうわ」

ルウルウが耳当てをシンドバッドに付けようとする。

「何しやがる！？」

「いいから！ 大人しくしなさい。別に危険なものじゃないから」
母親が駄々っ子を諭すような口調で、抵抗するシンドバッドに無理矢理耳当てを付けてしまう。ひんやりとした何かが耳の奥へ入り込んでくる。

「うああ、気持ちわりい」

「翻訳機よ。私達の言葉をあなた達の言葉として変換する。皆が皆、私みたいにあなた達の言葉を話せるわけじゃないんでね」

アヴァ力、シーガードも同じような耳当てを付けられた。

「残念だけど、あなた達の言葉は、私たちの言葉に変換できない」

「あ、悪魔めえ。ち、近づくなあ」

ルイ王は断固拒む。

「やれやれ……嫌われたもんね」

いやがるルイ王に対して、腰に下げていたまだらの道具を突きつける。先端から針のような物体が発射され、ルイ王の肩口に突き刺さる。その途端、王は雷に打たれたように昏倒する。

「な、何を！？」

「慌てないでよ、船長さん。王様には眠ってもらっただけ」

ルウルウは気絶したルイ王の両耳に無理矢理翻訳機をねじ入れる。

「お返しよ。あんたには、あの食人鬼どもの餌食にされそうになったからね。まあ、私の正体を見せてやったら、あの連中、怯えまくってたけどね」

ようやく、タフルどもが、ルウルウを遠巻きにしていた理由に気づくシンドバッド。

「とんだ道化者だ」

「あらら、けっこう格好良かったわよ」

ルウルウはカラカラと南国の鳥のように笑った。

ルフ鳥は都市の中心部へ向かい、摩天楼の底の広場へと降り立った。そこには居並ぶ龍人の兵士が待ち受けていた。手には例の虎縞の武器が構えられている。

「まるで罪人だな……」

「逃げようなんて思わないでね。命の保障は出来ないわ」

広場には巨大な像が鎮座している。聡明な顔をした龍人だった。

「女？」

優しい表情からシンドバッドは直感した。

「女神像？」

シーガードが、その威厳あるたたずまいから推察した。

「いいえ。実在した人物よ。名前はハジマ。太古の戦いで身を犠牲にして龍人を救ったという偉大な英雄」

ルウルウが眩しそうに見上げる。

「おい。アレは？」

アヴァカが指差したのはハジマの像の左手だ。

「あれはリユートと同じ宝玉じゃないか？ なぜだ？」

シンドバッドがルウルウを問いただす。

「アクセサリーじゃない。数万年も昔の人のことよ。私を知るわけ無いでしょ」

ルウルウは、はぐらかすように笑った。

一行は広場に隣接する円天井の建物へと招き入れられた。ここは龍人の会議場だという。その内部はすり鉢状に座席が配置され、まるで蓋をされた円形闘技場のようなだった。

すでに、そこには様々に着飾った龍人達が集まってきている。その数、数百、いや数千人はいるだろうか？ 派手な羽根飾りを競うように頭に付けている。

「私達のご先祖様は、どちらかというと鳥に近かったらしいのね。それに因んで公式の場では、派手な羽根飾りを付けるようにしている。羽根が派手なほど古い家柄なの」

「じゃあ、あの椰子の葉みたいな連中が一番偉いつてわけか？」

シンドバッドが一際派手な一団を指差した。玉座の如き豪勢な椅子に五名の龍人が座している。

「長老連よ。龍人の法と政を統制する最高権力者達」

ルウルウは畏怖のためか自然と小声になる。

「お、またあの女……ハジマだ」

長老連の背後の壁を指差した。巨大なハジマのレリーフが飾られていた。長老連は、太古の英雄の権威を継承するかのような態度で座していた。

「さあ、ここがあなた達の席。ちよつと窮屈だけれど我慢してね」

そこはガラスのように透明な物質で覆われた小部屋だった。監視役としてルウルウも同席する。ぐったりと放心状態のルイ王も無理矢理座らされた。

「まるで鶏小屋だぜ」

獣を見るような龍人達の蔑んだ視線にさらされ、さすがのシンドバッドも首を竦めた。

「それにしても、凄い数だな。そんなに俺達が珍しいか？」

アヴァ力は龍人達をにらみ返すように周囲を見回した。

「残念でした。今回は特別ゲストが来てるからよ。天空丸、それも女の子よ」

「リユートは無事なのか？」

「もちろんよ。シーガードさんも言ってたでしょ。天空丸は、あのくらいじゃ死にはしないわ。それに私達の医術が加われればね。ご覧なさい」

深紅のローブを羽織ったリユートが入場してくる。会議場の中央への通路を静々と歩いていく。龍人達の間から深いどよめきが起った。

「静粛に」

場内に厳格な声が響く。嘘のように静まりかえる場内。

小柄な龍人が演壇のような場所に立って胸を張った。胸に羽根飾りを付けただけだが、そのシンプルさがかえって格別の威厳を放っている。

「上卿よ。^{ジョウケイ}この場を取り仕切る最高議長といったところね。次期長老とも言われてるわ」

会議場の中央に立つリユート。毅然とした表情で周囲の龍人達を見回す。

「ようこそ。天空丸よ。来訪の目的を聞こう」

上卿の勧めにリユートが甲高い意味不明な言葉で叫び始めた。それはシンドバッド達の耳に付けられた翻訳機を通して人間の言葉として響いてきた。リユートは龍人の言葉を使っているのだ。

「偉大なる龍人よ。天空丸の娘としてお願いがあります。太古に封印されたはずの？深淵？が、今また蘇ろうとしているのです」

龍人達の間明らかに動揺が走る。

「？深淵？だと？」

「……呪われた名だ」

「聞くもおぞましい！」

場内は怒りとも恐れともつかぬ呻きの大合唱に包まれた。？深淵？という言葉は龍人達にとって明らかな禁句^{タブー}だったようだ。

「静粛に！」

上卿が再び厳しく制した。再び場内が水を打ったように静まりかえる。

上卿は先を続けるようにリユートの方へ向かって頷いた。

「満月の夜の海溝における異常隆起、各地で頻発する天変地異。それに呼応するかのように中東地域で行われている人類文明間での大規模戦闘……これらは全て、？深淵？の復活を裏付けるものであります」

リユートは、ここで言葉を切った。戦いの時に気を溜めるような間合い。

シンドバッドは、リユートのとてつもない覚悟を感じ取った。

「偉大なる龍人よ。？深淵？を再び封印するために、？天空？の力を解放してください」

リユートは祭壇に向かう巫女のように跪くと、左手の制御球を掲げた。

「ハジマの秘石」

「なぜ？ ヒトが持っている？」

場内は、再び騒然となった。

長老達だけが、リユートの方を見ながら、こそこそと小声で何事か話し合っている。こちらには聞こえてこないが、何やら不穏な雰囲気がありありと漂ってくる。

「？天空？の力と引き替えに我が命をあなた方に捧げましょう」

リユートは周囲の重圧を跳ね返すように、凜とした声で言い放った。

龍人の聴衆達は凝固したように、ただリユートを見つめるだけだった。

長老達が目配せする。周囲の兵士達が静かに動き始める。不穏な空気がますます濃くなっていく。

こいつら、本当にリユートを殺すつもりじゃないのか！？

シンドバッドは居ても立ってもいられない。

「クアカカカカツ」

甲高い南国の怪鳥のような声が会議場内の重く冷たい空気を引き裂いた。声は上卿が発していた。耳の翻訳機の様子からシンドバッ

ドは彼が笑っているのだと分かった。

「……失礼した」

笑い過ぎたのか軽くむせながら上卿は詫びを言った。

「いやいや。天空丸の娘よ。君達が、どのような因習に囚われているかは知らないが、我々が生贄などと言う野蛮な行為などするわけがなかるう」

そして、また例の耳障りな甲高い声で笑い始めた。その笑いは会場内に伝播し、爆笑、嘲笑、苦笑、冷笑が渦を巻いた。

笑いの渦の中心で、リユートは座ったまま目を閉じてじっと耐えている。いつもの尊大とも言える態度は無く、ひどく小さく、寂しげに見える。シンドバッドは、そばに行って肩を抱いてやりたかった。

「静粛に！」

自分が扇動していたくせに、上卿はピシリと場内を鎮めてしまった。先ほどまで場内で慌ただしくしていた兵士達も動きを止めている。

ひとしきり笑ったせいかな場内は平穏を取り戻したようだった。

上卿は長老達の席へ近づいていくと小声で何やら相談を始めた。

協議は、意外にも短く、長老達は輪を解くと、それぞれの席に着いた。上卿が乾いた咳をひとつすると、静かに語り始めた。

「天空丸よ。我々と君達は、古からの縁がある。今から、三万五千年前、我々の第二次隆盛期に強大な勢力と共に戦ったという事実は、我々も記憶している……と言っても、古い記録の中にあるのみだが

……」

上卿は、ちらと、だが意味ありげにシンドバッド達の方を見た。

「ヒトの伝説、神話の類にも、古の正と邪、光と闇の戦いとして、その残滓は見受けられる。我々の敵勢力、言うところの？深淵？がかつて存在したことは認めよう。だが、すでにそれは遠い昔のことだ。？深淵？は南海の海溝や極北のクレパスの中に完全に封印した。復活などあり得ない」

長老の一人が上卿の言葉を引き継ぐ。

「しかも、それは我々自身の力で行ったことなのだ。君が頼りにしている？天空？など最初から存在しないのだ」

長老連は、明らかにこの会を早く終わらそうとしているように思える。

「そして、何よりも私達はヒトと関わりたくない。天空丸。君の話の中で、真実があるとすれば、ヒトが飽きもせず、未だに殺し合いを続けているということだ」

「違う。それは、？深淵？が戦いを広げるように、仕向けていて……」

リユートが諦めずに食い下がる。

「いや。ヒトは殺し合いを好む。なぜなら、ヒトは戦いのために創られた兵器だからだ」

「兵器……？ 創られた？」

長老の言葉の衝撃にリユートの声が震える。

「おや？ 天空丸よ。君は知らないのか？」

上卿が長老の話に割り込んでくる。

「ヒトの守護者を気取りながら、自分達自身の生まれた理由を知らないのか？」

「上卿……。あまり刺激して、兵器としての本能が目覚めたりしたら……」

長老連の一人が、上卿を制止しようとする。だが、上卿はお構いなしだ。

「いいではないですか……どうせ忘れてしまふのですから」

上卿はリユートへ向き直った。

「君達、ヒトは、元々は？深淵？に創られた兵器なのだ」

「？深淵？に！？ 馬鹿な！」

シンドバッドは思わず叫んだ。龍人の衛兵が武器で小部屋を小突いた。

「？深淵？が南方の原始的な猿の遺伝子に手を加えて急進化させた。

それがヒトだ。我々が、恐竜や鳥類、昆虫や植物を乗り物や道具に使っているようにね。君達だって、猪を豚に、狼を犬に手名付けて利用しているだろう。それらのもつと手の込んだものだ」

「俺達が猿から創られた、だと。この世界は神様が創ったんじゃないのか？」

騒ぐシンドバッド達の小部屋を衛兵が先ほどよりも強い調子で小突く。

「静かにした方が身のためですよ。それに、今は上卿殿の話を拝聴しましょう」

冷静を装っているシーガードだが、握りしめている手は紙のように白い。

「繰り返すがヒトは残虐非道な殺戮兵器として大量生産された。それ以前、我々の祖先は地球のほとんど全域で平和に暮らしていた。だが、突如侵攻してきたヒトの圧倒的な数と死を恐れずに向かってくる凶暴性に押されて、この大陸まで後退せざるを得なかったのだ。正直、滅亡してもおかしくない状況だったそうだ。あらゆる環境の変化に科学技術で耐え抜いてきた我々が、だ。よりによって下等な哺乳類に圧されるとはな」

場内の龍人達も上卿の話に聴き入っている。

「だが、我々は劣勢の中、ヒトが雄体のみであることに気がついた。ヒトの雄体は体力があり、より好戦的で、性格的にも単純で暗示に掛かりやすい、ということ？ 深淵？ にとっても非常に使い勝手が良かったようだ」

「ひでえ言われようだな」

シンドバッドが憮然として言う。隣のアヴァカもふて腐れている。「そこで我々は捕獲したヒトから細胞を採取し、雌体……つまり女性を創り出すことに成功した」

「主は、彼から取った肋骨でひとりの女を造り上げた……『創世之書』第二章」

いつの間に目覚めたのか、ルイ王が聖典の一節を唱えている。

「……ば、馬鹿な……」

シーガードがギョツとなつてルイ王を見る。

「悪魔は蛇に姿を変え、女を誘惑した……『創世之書』第三章」
ルイ王が十字を切る。そして必死に祈り始める。

「聖典は真実を語つておつたのだ……主よ、お助けください」

まさか、？深淵？こそ神……。

「ち、違う」

シーガードはその考えをねじ伏せようとした。だが、心の震えは止まらない。

上卿の話は続く。

「我々は女を放ち、男へと向かわせた。男はたじろぎ、初めて見る異性に困惑した。その間隙を突き、我々の娘達は男達を圧倒していった。」

だが、我々の予想だになかったことが起こった。女の中に、傷ついた男を介抱し、味方の陣営に連れてくるものが出てきたのだ。母性というものなのだろうか？ 今でも、その原因は解明できていない。

女に説得され、我々の側について戦う男も出てきた。さらに奇跡は続き、新たな子孫までが生まれ始めたのだ。我々にとって幸いだつたのは、生まれた子供は、知的で温厚な性格だつたことだ。

こうして配下を奪われた？深淵？は、我々の祖先と寝返つたヒトに追い詰められ、その肉体を寸断され、洞穴や深い海に封じ込められたのだ」

上卿は一息入れると、会場の壁に掛かっているハジマのレリーフを振り仰いだ。

「娘達を誕生させ、ヒトを良き道へ歩ませることに成功させたのは、我らが偉大なる指導者にして、最大の科学者、ハジマなのだ」

「ハジマ、ハジマ、ハジマ……」

龍人達が感極まつたように低く叫ぶ。読経のように会場が低く震える。

「静粛に」

上卿の声で「ハジマ」の連呼は嘘のように静まった。

「温厚な種族になったとはいえ、ヒトは所詮戦うために創られた者。戦いの記憶が我々にヒトを遠ざけることを決意させた。我々は、未開の地にヒトを放ち、自分達は、この大陸から出ることなく、自衛のための僅かな兵力を残して、あらゆる戦闘を放棄することにしたのだ」

「かくて、男と女は楽園を追われたり……」

ルイ王は、聖典の言葉で結ぶと、天を仰いだ。

「？深淵？から解放されたことにより、ヒトの知能や身体能力などは一時的に退化し、数万年をかけて、また現在の水準に戻ってきた。それと同時に戦いを好む本性も蘇ってきたようだ。結果的に我々の判断は正しかった。ヒトは太古の兵器としての血が、どうしても騒ぐのか、殺し合いを止めることを知らない」

上卿はリユートの方に向き直る。

「天空丸よ。君の家系は、ヒトの一番最初の番い（カップル）の直系、言わばヒトの純血種だ。その優れた身体能力と知能は、兵器だった時のヒトの名残なのだ」

兵器……リユートが……。

シンドバッドは、リユートの超人的な強さの秘密を思い知った気がした。

「では、いつも通りに、忘却処置を加えましょう」

上卿が長老連に向かって恭しく頭を垂れる。長老連が深々と頷き返す。

「不幸にも我らの大陸に迷い込んでしまうヒトは少なくない。ここでの記憶を消して、再び海に放つ。心配することはない。もちろん水も食料も十分に与えよう」

「そうか……祖父様もそれで……」

記憶を失った祖父の姿がシンドバッドの脳裏に甦る。

龍人は今まで多くの人間に記憶を消去して送り返してきたのだ。

そのほとんどの者には恐怖の記憶を刻みつけて、人を大陸に近寄せないようにしたのだ。

「父は……天空丸烈斗は、あなた方、龍人に会えば、力を貸してくれると……でなければ、父は日本を一人で守らなければならない……」

リユートがすぐるように言った。

最も年嵩の長老が悲しげな目でリユートを見つめる。

「我々はヒトとの接触を断つ。互いにとって、それが最良の選択なのだ。若き天空丸よ」

言葉を呑むリユート。もはや取り付く島もないのか……。

「？深淵？は、すでに滅んだ……」

長老は締めくくるように言った。

「いや！ いるぞ！」

「そうだ！ 俺も確かに見た……！」

シンドバッドとアヴァカが、思わず立ち上がり、声を張り上げる。

「だから……あなた達の言葉は通じないというのに」

「それでも、彼らは叫ぶでしょう。いや、叫ばないわけにはいられない」

シーガードが、ルウルウに向かって微笑んだ。

「そう。だから私も叫ぶ」

シーガード自身も席から立ち上がると大声を張り上げた。

「あなたがたは、神にも似た力を持ち、崇高な知恵をお持ちですが、なぜ、現実から目を背ける？ 何を恐れているのですか？」

シーガードの言葉の意味は分からずとも、その声色、調子から龍人達、特に長老連は不快感を露わにした。

「衛兵！ 黙らせろ」

軍人風の体格の良い龍人が叫ぶ。衛兵が駆けつける。手には例の毒虫を思わせる武器が握られている。

「私の？仲間？に何をする！」

リユートは一声叫ぶと、驚くべき脚力で、会場の中央から、階段

を駆け上がると、揉み合う衛兵とシンドバッド達の間割に割って入る。
「それでも、かつての世界の覇者か!？」

手には武器はない。セーデは会議場に入る前に渡してしまっている。それでもリユートは身構える。

「我が名は龍斗! 龍と斗たたかうのも、また宿命」

取り押さえようとする兵士を蹴りと突きで弾き飛ばす。瞬く間にリユートの周りには手足を押さええて踞うすくまる龍人兵の山が出来上がった。格闘では相手にならないと考えたのか、今度は手に縄のような武器を持ってリユートを遠巻きにする。一斉に縄を投げつける。リユートは飛んでくる縄を手で払いのける。だが、縄は意思があるかのようになりリユートの腕に巻き付き締め上げる。続く縄が蛇の群れのようにリユートの自由を奪っていく。多勢に無勢、徒手空拳。抵抗虚しくリユートは、ついに虜となってしまった。

さらに毒虫状の武器が次々とシンドバッド達を昏倒させる。

若い龍人達には明らかな動揺が走っている。ここまで抵抗するヒトを見たのは初めてだからだ。

「静まれ!」

興奮して立ち上がった聴衆を沈めようと衛兵が走り回る。

「やはり所詮は? 深淵? の生物兵器か……残念だよ」

長老達は、捕らえられたリユート達を蔑むように見下ろす。

「それでは忘却処置を」

五人のヒトは、担がれるようにして会議場から連れ出された。

五人が拘束された部屋は驚くほど清潔で、柔らかな白い光源で照らされていた。豆の鞘に似た有機的な意匠の長椅子が一つ。それ以外の調度は一切無かった。一同は、その椅子にぐったりと腰を下ろしていた。銃による麻痺も、ほとんど回復していた。

「何も俺達に付き合わなくてもよかったろうに……リユートは特別待遇なんだろう?」

シンドバッドがリユートに言った。

「お前達は、私の大切な仲間だ」

リユートはそれだけ言うと、立ち上がって座を離れていった。

「仲間か……しかし、もし記憶をいじられたとしたら、あなた達のことまで忘れてしまうのじゃないか」

シーガード残念そうに仲間の顔を見回した。

「あんたとも、また敵同士になっちまうのかな」

シンドバッドはアヴァカを見た。

「もともと敵同士だ。お前の親父の敵だ」かたき

アヴァカはそう言うのと寂しげに笑った。

「ああ、そんなこともあったっけな」

シンドバッドもため息混じりの苦笑で返した。目が潤むのを隠すため、シンドバッドはわざとそっぽを向いた。するとリユートが扉の前で熱心に何かしているのが見えた。

「ところで姫は、何をしている」

近づいてみると、リユートの手には微量のセーデが握られている。

「取り上げられたんじゃない」

「非常用だ。奥歯に隠しておいた」

細長く延ばしたセーデを扉の隙間に入れて、外に出しているのだ。

「向こう側から開けられるかやってみる」

「ここから出ようってのか？」

「私は、諦めない。諦めるわけにはいかない」

リユートは決然とした口調で言った。

「彼らは戦いを放棄するためにヒトと接触を断った、と言っていたが、我々を救ったルフ鳥。あの強大な力は、明らかに？深淵？と戦うための力だ」

「龍人にも？深淵？と戦おうとしている連中がいるかもしれないってわけか？もしかしたら味方してくれるかもしれないな」

「だから、私は絶望しない」

リユートはニッコリ笑うと、また解錠のために扉へ向かった。

シンドバッドの冷え切った心に希望の炎がよみがえった。

情けねえ。船乗りシンドバッド。何もしねえうちから諦めきつていたぜ。

「しっ！」

リユートが人差し指を口にあてる。手元にセーデが戻って来る。

「誰か来る」

たしかにドアの向こうに気配がする。

いつの間にかアヴァカとシーガードもやって来ていた。顔を見合わせる一同。一斉にドアの死角へ隠れる。

「なんだ、どいつもこいつも悪あがきか？」

シンドバッドが笑う。

「お互い様。たしかに、ここまで来て諦めるわけにはいきません」
シーガードが返す。

「プランは？」

「入ってくる一番偉そうな奴をとっ捕まえて、人質にする」

シンドバッドの問いに、アヴァカが答える。

ドアが静かに開いた。

見るからに偉そうな龍人士官が入ってくる。護衛も付けずに、たった一人だ。

チャンスとばかり一斉に飛び掛ろうとするシンドバッド達。

振り向いた士官の顔を見て、皆の動きが凝固した。人間の女の顔だ。

「ルウルウ！？」

「静かに！ ばれたら大変なんだから……とにかくこれを付けてついてきて」

紐状の生き物を手に付ける。手錠らしい。

ルイ王へ近づく。一瞬身を固くするが、脱力したように手を差し出す。

拘束室の外には、兵士らしき武装した龍人が数名待っていた。

「処置前にヒトをもう一度調査するために一時場所を移動する」

完全に声色を変えてルウルウが命令する。兵士は念のため拘束具

を確認すると素早く道を開ける。

通路ですれ違う龍人の誰もが恭しい態度を取る。どうやらルウルウが化けたのは相当の上級将官らしい。

建物の前には巨大な甲虫を思わせる生物が鎮座していた。羽根の部分が開いており中に入れるようだ。見ようによつては幌馬車を連想できないこともない。これも、ルフ鳥のように龍人達が造り出した生きた乗り物なのだろう。

内部には豪華なソファが並んでおり、大人十人が楽々と座れるぐらいに広い。ルウルウの案内で五人は内部のソファに恐る恐る腰を下ろす。

巨体を揺すつて甲虫車が動き始める。初動こそゆつたりとしていたが、瞬時に加速し、空中回廊を郊外へ向かつて高速で移動していく。

奥の座席には御簾のようなカーテンが掛かっている。そこに人影が座っている。

「我々のボスがお会いになります」

ルウルウが厳かな調子で御簾を上げる。

そこに座っていたのは、上卿（みぎけい）！

五人の忘却処置を下した張本人が、なぜここにいいのか？ シンドバッドは混乱した。

「シンドバッド！ シンドバッド！」

上卿の肩には、なぜか老オウムのバブガウが止まっている。

「シンドバッド君、君はなぜこの地に来ることが出来た？ 君の祖父殿の記憶は消去したはずだが」

シンドバッドは黙して語らない。

「リュウト！ リュウト！」

バブガウが挑みかかるように叫ぶ。

「なるほど。その鳥類に言葉を刻みつけたというわけか……侮れないな、君の祖父殿は。しかもちゃっかり？ 龍の眼？ まで盗んで行き

おった」

上卿は感心したように微笑んだ。

「今度は、この鳥の記憶も消さなければな……」

「メランキアス！ メランキアス！」

突然、オウムは狂ったように叫ぶ。

「メランシアスじゃ。このバカ鳥！」

突然、上卿が聞き覚えのある囁れ声でオウムを罵る。

「ハハハハ……ワシじゃよ」

上卿の顔が見る間に死んだはずのメランシアスの顔に変わる。

「メランシアス！？ 生きてたのか？」

「というより、あんたは龍人！？」

「しかも、上卿！？」

「もう、わけ分からん」

一同は安堵と驚きと混乱の声を同時に上げた。

「すまないことをした。数々の非礼をお詫びする」

上卿の紳士的な態度で詫びるメランシアスは、どうにもアンバランスである。

「特に天空丸リユート。我らが娘よ……遙々やって来た君の願いを一時でも踏みにじるような真似をして申し訳なかった」

メランシアスは、リユートの手を握ると深く頭を垂れる。

「メランシアス……もういい」

リユートはメランシアスの手を優しく握りかえた。

「それにしても、あのスキューレの攻撃の中でよく助かったな」

「いやあ。あの時はワシ自身も正直死ぬかと思ったわい」

いきなり相好をくずす。いつものメランシアスだ。

「だが、幸いにもルフ鳥以外に海中には、我がモササウルス型潜水艦が配備されておったのでな、そいつにうまく救助されたという寸法よ」

「あの時は、私だってハラハラしたわ。ほら、設定上、声も上げられないし」

ルウルウがふて腐れたように言う。

「いや、心配かけてすまんかった。ま、ワシも大陸に近づいたら、どこかで雲隠れしないと、その後の段取りに支障が出るでな。ちょうど良い潮時ではあったのじゃ」

「すると、あの夜、船上にいた悪魔……いや、龍人は……」

ハツと気がついたようにシンドバッドが言う。

「私達の仲間よ」

「あの時も正直危なかった。我々の正体がばれるところじゃった」

「分かっていたよ」

リユートが微笑する。

「私は天空丸だ。龍人の資格好くらは知っているし、会話の一部も理解していた」

「あちゃ。ばれとったのか！？　じゃあ、なぜ黙っていた」

「龍人側にも、何かしらの動きがあると思った。恐らく私達を援護してくれるのでは、と思ったので、あえて乗ってみた。フランク、モンゴル両軍に囲まれた時にルフ鳥が救援に来た時に憶測は確信に変わった」

「へえ、お見通しじゃったか。さすがは天空丸じゃな」

メランシアスが感心したように頷いた。

「諸君らが目撃してきたとおり、？深淵？は実在し、その覚醒はすでに始まっている。我々は、かなり以前からヒトの社会にハジマを送り込んで、その動向を探っていたのだ」

「ハジマ？　あの伝説の指導者と同じ名前だ」

「私やルウルウのように体表を自在に変化させる能力を持った一族だ。元々は母なるハジマによる遺伝子工学によって与えられた力さ。だから、我々もハジマを名乗っている。その数はごく限られている。私自身も自分がハジマであることを秘中の秘としてきた。ハジマという存在自体、龍人の中でも疎まれてきた影の存在なのでな。」

上卿といっても、単なる取りまとめ役に過ぎない。龍人評議会の権力は、長老連が掌握している。そこで、私は、表面上は長老連に

迎合するように見せかけて、その影で対？深淵？の特殊部隊を組織していたのだ」

甲虫車は都市からかなり離れた平原へやって来た。すでに一軒の家屋も建っていない。

そこには、ルフ鳥の数倍はあろう、巨大な飛行生物が鎮座していた。形状は鯨のような流線型。やはり鯨のヒレのように図体に比べるとやや小さな翼が付いている。鯨は大口を開けている。ここが乗降口らしい。

「この中に入るのか？」

気味悪げにシンドバッドが言う。

「大鯨に吞まれるヨナの心境ですね」

シーガードが冗談めかしてから、ハツとルイ王を振り返る。この冗談はルイ王が言ったものであることを思い出したのだ。ルイ王自身は特に恐れる様子もなく進んでいく。その目に輝きはない。

リユートが忙しく周囲の空気を嗅いでいる。

「いけない！」

リユートの警告は遅すぎた。何もない空間から続々と龍人兵士が出現する。正確には周囲と同化した偽装布を取り去ったのだ。いわゆる隠れ蓑だ。

以前、ヒマラヤの我が家でリユートが聞いた声の主も同じ方法で姿を消していたのだ。

「カメレオン迷彩か……しまったな」

メランシアスが舌打ちする。すでに数十人の武装兵士によって取り囲まれている。

「諸君、どうか静粛に」

諦めてしまったのか、メランシアスは身構える一同を制する。

兵士の背後から、五人の長老連が姿を現した。

「残念だな……古き友よ。ヒトをどこかへ逃がすつもりか？ ハジマの遺志に逆らうことが、どうなることか、君も分かっているだろ

うに」

「ハジマの遺志？ ヒトと交わるな、だったかな？」

「そうだ。我らが指導者ハジマの教典にある通りだ。上卿の君が忘れたわけでもあるまい？ 特に最近の君の行動には目に余る物がある。ルフ鳥のリミッターを無断で解いて大洋を渡り、ヒトと必要以上で接触している」

「ふうむ。お見通しじゃの」

「ふざけるな！ 今度は数少ない長距離輸送機まで持ち出して何をするつもりだ」

人を食ったメランシアスの口調に長老の声は怒気に震えた。

「我々は、誰にも邪魔されず、この樂園で静かに生きていくことを望むだけだ。我々の手で創り上げた樂園でね……ただ、それだけだ」
「そのためには、外界で吹き荒れる戦乱には目を塞ぎ、あまつさえ天空丸の娘を殺そうというわけか？」

メランシアスに凶星を指され、長老の目が見開かれ、口の端が醜く引きつる。

こいつぁ……本当の悪魔だ。

シンドバッドは自然、リユートを庇うように前へ出た。

「ヒトは、特に……天空丸は危険だ……？ 深淵？ が創り出したヒトが、なぜ我らの指導者だったハジマの宝玉を手に行っているのだ？」

問いかけられたリユートだったが、そんなことを知る由もない。

制御球は天空丸始祖から代々受け継がれてきた秘宝。覇道の力の源である。

「もはや理由などは大した問題ではない。？ 深淵？ の実在やヒトがハジマの秘宝を持っているという大いなる矛盾が、投げかける影響の方が甚大なのだ。市民達が恐怖に駆られれば、我々の平和社会は内部から崩壊しかねない」

「真実を知ろうとする連中は、後を絶たないだろうな」

「君のようにな……。だから、大人しくしててもらおう。我々から手を出さなければ、？ 深淵？ は、この大陸には手を出さない」

「大した自信だな。それとも……？深淵？と協約でも結んだか？君の体に聖痕とやらが無いことを祈っているよ」

「口が過ぎるぞ……ハジマの末裔どもが」

長老の目に明らかな殺意が光る。

「貴様らは知りすぎている……。残念だが災厄の種は排除させてもらおう」

長老が背を向けると同時に一斉に兵士達が銃の狙いを定める。

だが、メランシアスは余裕の表情で耳に手をやる。

「諸君、聞こえんか？」

上空から風を切る音が聞こえる。突然、周囲が暗くなった。

太陽を背にしてルフ鳥の編隊が急降下してきたのだ。低出力の紫電が隊列とリ्यूト達の間点で爆裂。威力を抑えたと言っても兵士達を大混乱に陥れるには十分だった。

「に、逃がすな！」

杖を失い、地べたに四つん這いになりながら長老が叫ぶ。

老いた龍人を尻目に鯨型の大型空挺は南の空へと飛翔していった。

第六章 天空への架け橋

第六章 天空への架け橋

ルフ鳥の編隊に守られ、鯨型空挺は悠々と南下していく。並んで飛んでいるのは、何度かシエラザードを救ってくれた虹色尾羽のルフ鳥だ。

「考えてみりゃ、アイツにはずいぶんと危ないところを救われたな」「リヴァイアサンから脱出し、海を漂っていた私を救ってくれたのも、あの鳥です」

シンドバッドとシーガードが頼もしげにその雄姿を見つめる。

「あのルフ鳥、怪我をしている。首筋のあたり」
リユートが心配そうに指さす。

「？深淵？の手先に傷を負わされたのよ」
ルウルウが悔しそうに言う。スキューレの断末魔のカウンターを食らったのだ。

「あの時か……大丈夫なのか？」

「ええ。あの通り、元気に飛んでいるわ」

「少々、治りが速くないか？ 全治一週間という感じだったがなあ」
メランシアスが怪訝そうに言う。

「うーん。そう言われると……」

当のルウルウも自信なさげである。

「でも、快速號は最強よ。ボスだって今度の戦いに快速號がいなければ困るでしょ？」

「まあ、たしかにアイツは戦いの要だからな」

「『快速號』……良い名だ」

リユートがその名を心地よさそうに口ずさんだ。

「ありがとう！ ルフ鳥の中でも一番速くて強い。そして私の一番のなかよし」

ルウルウは、我が事のように嬉しそうだ。

「しかし、あの巨体で空を飛び、しかも、口から電光を吐き出す。あれは、まるで……」

シーガードが言いにくそうに途中で言葉を切った。

「龍^{ドラゴン}だと言いたいんじゃない？ 別に気にせんよ」

メランシアスは、むしろ満足げに微笑んだ。

「古今東西を問わず、世界中に龍伝説は数多い。神話の時代ならばともかくも、未だに目撃例も絶えない。その多くは、我々のルフ鳥を見たのだろうな。そして、それを駆る我々を見て？ 悪魔？ と呼ばせたわけだ」

「それも？ 深淵？ の企みというわけなのですか？」

「さあな。ただ一つ言えることは、？ 深淵？ のシンパ達はヒトの歴史を巧みに操り続けてきた、ということだ」

「その歴史の要で？ 深淵？ と戦い続けてきたのが、我々、天空丸だ。だが、我々はその名を冠しながら、一度も？ 天空？ なる者を目にしたことがない。龍人ならば？ 天空？ の居所を知っているだろうと、父も話していた」

「でも、あの龍人の老いばれども、？ 天空？ は存在しない、とか言ってたぜ」

そう言うシンドバッドにメランシアスは深々と頷いた。

「左様。長老連は、いや、龍人は、自分達より高度な存在を認めるわけにはいかないのだ。氣象を操り、生命をも産み出せる自らの技術。これこそが龍人が信奉する唯一無比のものなのだ。だから？ 天空？ に関しては、あらゆる記録が抹消された。だが、我らには、偉大なる始祖ハジマの記録が残されていた。その中には？ 天空？ らしき高次元の存在を伺わせる記述が多い。わしも？ 深淵？ 封印には、？ 天空？ が深く関係していると考えている」

「一体全体、？ 天空？ とは？ 何なんだ？」

アヴァ力が溜まりかねて聞く。それに対してメランシアスが勿体ぶったように笑った。

「それでは見せてやろう。？天空？を」

ついに明日の晩は満月である。烈斗、通有、一遍が決戦前夜の酒を酌み交わす。

一遍は、僧でありながら勧められるままに酒をあおる。

「良い飲みっぷり。とんだ生臭坊主じゃ」

親類筋の通有は齒に衣着せぬ物言いだ。

杯を置いた一遍が、何気なく烈斗に問う。

「天空丸殿は笑わぬお人じゃな……眼は大層優しそうなのじゃが」
ハツとなる通有。通有自身も以前から気になっていたことだった。

そうだ。烈斗殿は昔いつも笑っていた。

本人に問えばよかったのかもしれないが、通有は、なぜか触れてはならないもののような気がして、今までも無理に話題にすることはなかったのだ。

「下衆の勘ぐりかもしれないが、何かお辛いことでもあったのだらうか？」

烈斗の表情は変わらない。だが、答えに迷ったのか、通有の方を見る。通有は慌てて視線を逸らす。自分も烈斗の答えを待ちわびていることを悟られたくはなかった。

「無理強いはよくないとは思うのじゃが……何かこの件を伺っておかなければ、烈斗殿ご自身のためにならないような気がする」

烈斗は観念したように杯の酒を一気に煽る。

「さすが一遍殿ほどの高僧ともなれると人の心の奥底まで見透かしておられる。たしかに大戦を前に、この烈斗、言い残しておきたいことがあるようだ」

烈斗は、遠くを見つめるような眼で低い調子で語り始めた。

「父上。私が参ります」

自分と同じ熱い眼差しが烈斗自身を射貫いた。リユートが一度言いだしたら聞かない娘であることは、烈斗自身が一番よく分かって

いた。何より自分の若い頃にそっくりだ。

今から十一ヶ月前、龍人から明かされた？深淵？の復活。そして？深淵？を再び封印するためには？天空？の力が必要であり、その覚醒には天空丸の娘が巫女的な役割を担うという事実。リユートが龍人の大陸に向かうのは、天空丸の宿命だった。人の世を救うためには避けては通れない道なのだ。

この事実を知る以前から手遊びながらもリユートには覇道を教えてきた。我が娘ながら惚れ惚れとするような上達ぶりだった。歴代天空丸の中でも屈指の使い手になるかもしれない。だが、惜しいかな、女であるリユートは、当然のことながら快男児の称号を与えられることはない。自分に匹敵する若者と結ばれ、次代の天空丸を育てる母となることであろう。リユートにとっては、退屈で物足りない生活が待っているはずだった。逆に、烈斗にとっては、歴代天空丸の多くが味わい続けてきた戦場で我が子を失うかもしれない怖れから解放されるはずだった。

この平穏が突然にして断たれ、かつてない重圧が父娘に襲いかかってきたのだ。

リユートの覚悟は固いようだ。だが、肝心の烈斗の心は揺らいでいた。

「しばらく留守にする」

自らに決断を強いるべく、烈斗は天空丸の里を後にして、万年雪と氷河に閉ざされたヒマラヤの奥深くへと分け入った。

二十年？ いや三十年ぶりだろうか？ 歴代天空丸が真の快男児を名乗るべく苦行を続ける修練場がある。修練場と言っても、ゴツゴツした岩場に何とか風雪を凌げるような庵があるだけだ。この凍てつくような寒さの中、百日間、鍛え抜いた技だけを頼りにサバイバルを決行するのだ。身にまとうのは、歴戦をくぐり抜けてきた紅い皮衣とセーデのみ。岩陰に根付いたコケを削って食らい、ナキウサギを捕らえて、その僅かな肉を生そのまま食らう。

もちろん、烈斗もリュートも、ここでの百日の修行に耐えている。苦行の日々も今となつては懐かしい。だが、烈斗の足は、修練場では立ち止まらず、さらに谷の奥へと進んでいく。

いつしか谷は行き止まり、切り立った岩壁が前方を遮った。近づいてみると岩壁には人一人がやつと入れるくらいの亀裂が縦に走っている。烈斗は、その中へ体を滑り込ませていく。内部はさらに狭く、体を屈めていけば進めたものが、徐々に匍匐前進しなければならなくなり、やがては、ミミズのように這い進んでいく。

突然、先を進んでいた指が岩ではなく空を掴んだ。岩の道は終わりを遂げ、新たな空間が広がっているらしい。指は穴の縁を探し出す。ガツチリとした手応え。両腕に力を込めて全身を引き出す。烈斗はよろよろと立ち上がると大きく深呼吸した。自分は岩の産道をぐぐり抜けて、今また再生したのだ。吐き出した息が寒さのために白煙のようだ。さらに厳寒の場所へやって来てしまったようだ。

周囲を見回す烈斗。岩の表面はびっしりと氷で覆われている。岩洞の内部にもかかわらず、周囲が見て取れるのは、氷の中でも生き抜くというヒマラヤヒカリゴケの生体光のおかげなのだろう。

中央に巨大な柱が突っ立っている。人が十人手を繋いで輪を作れるぐらい太い。周囲の光を青白く反射させる。氷だ。氷の柱だ。

「これが……千年氷柱……」

烈斗は思わず呟いた。

天井から滴った雫がツララになりこの大きさ太さになるには、その名のとおりの歳月を要したに違いない。氷柱には鈍色に輝く綱が張られている。まるで、神木に飾られたしめ縄のようだ。人が触れることを拒んでいるかのようだ。

「千年に一度の大修行……まさか俺が挑むことになるとはな」

烈斗が念を込めて綱に触れると、綱は瞬く間に溶解する。セーデだ。

禁を解いた烈斗はおもむろに上着を脱ぎ捨て、氷柱に向かって走り出すや、そのまま全身で齧り付いた。

「くおおおおおお」

烈斗の息吹は霸道独特の呼吸。生命エネルギーを活性化させ、体温を急上昇させる。恐らく体温は四十度以上。烈斗の胸板が触れている部分の氷柱が徐々に溶け出した。

しかし、烈斗は、こんな荒行をいつまで続けるつもりなのか？

これでは長時間の重症高体温症と同じである。極寒の中、立ち上る湯気は、そのまま烈斗の生命が蒸発していくかのようなのである。

烈斗は何かを呟いている。途切れそうな声で。繰り返し、繰り返す。

「……リユー……ト……リユート……リユート」

烈斗の苦闘は、まる一週間続いた。

だが、烈斗の体温は徐々に、だが着実に千年氷柱を溶かしていった。

熱波が弱まってくると、烈斗は愛娘の名を呼ぶ。まるで体力回復の呪文のように。すると熱波は勢いを取り戻す。

まる一週間の苦闘の末に氷柱は支えを失い、自重で崩れ落ちていった。同時に千年の間、氷柱によって支えられていた洞窟自体も崩落していく。

岩と氷塊が落下する中、烈斗は硬直した肉体で這いずりながら、岩の産道の中へ逃げ込んだ。再び、岩の裂け目から外界へ姿を現した烈斗の顔は、蠅のように蒼白で、一切の感情が削ぎ落とされているようだった。

烈斗は話し終わると空の杯に酒を注いだ。その凄絶奇譚に一遍も通有も押し黙ったままだった。

「千年氷柱。天空丸家最大の試練。千年に一度、？深淵？の大攻勢に対して、最愛の者を死地へ赴かせる……」

烈斗は酒をあおった。

「その悲しみ、思慕の情を全て捨て去るために、この荒行に挑んだ

……」

「捨てられたのですか？」

一遍が押し殺したような声で問う。

「……いいや……捨てられるものか」

烈斗が絞り出すように答えた。

「そのような荒行であつても……無理でしたか」

そう言う一遍の口調には、なぜか安堵したような響きがあった。

三人の男は押し黙ったままだった。四方から島に打ち寄せる波の音だけが響いていた。

長い沈黙の後、烈斗が呟いた。

「人の情を捨て去ることは出来なかった。ならば、人としてこの逆境を乗り切つてやろうと思つた。娘に天空丸の、快男児の技の全てを仕込んで、あらゆる困難に立ち向かい、それを打ち倒す力を与えることを誓つた。

龍斗は良く耐え、我が覇道の全てを体得した。だが、我が想いがどれだけ伝えられたのか……。免許皆伝の時、セーデを自在に操れるようになった龍斗を見て、俺は満面の笑みを浮かべた……。浮かべたかった。だが、顔面は引き連れるだけで、恐らく笑顔とはほど遠い表情だったことだろう。いくら免許皆伝を許しても、あやつの表情は暗かった。出陣の門出を一点の曇り無く送り出してやりたかったのだが……」

笑顔を失つた烈斗。烈斗は笑わなくなつたのではなかった。笑いたくても笑えなかつたのだ。通有は、烈斗の屈託のない笑顔が好きだった。その笑顔に助けられて、様々な死線をくぐり抜けてきたのだ。

「……酷いな」

通有は真っ赤になつた眼を乱暴に擦つた。

「快男児を名乗つても、実の娘に真の心も伝えられないとは……我ながら哀れなものよ」

そう言つてうな垂れる烈斗は、ひどく小さく見えた。

「お嬢様をもつと信じなされ」

一遍の言葉に烈斗の眼が見開かれた。

「親子の絆は、そんなに脆いものではありません。現に極寒の氷柱でも、あなたのお嬢様を想う心を凍り付かせることは出来なかった。もし、お嬢様が自らを未熟と思うのならば、きっとさらなる成長を遂げるはず……」

「さらなる……成長……？」

「と、そう思っておれば、また会う時の楽しみも出来ようものでしよう」

一遍が静かに微笑んだ。汚れた法衣を纏いながらも、その笑顔はどんな高尚な説法よりも人の心に響くものがあつた。日頃、乞食坊主と揶揄している通有も思わず手を合わせそうになった。

「たしかに……楽しみだ」

冷め切っていた烈斗の表情が心なしか緩んだ。

リユート達を乗せた空飛ぶ鯨は南下を続ける。

「ところで、どこへ向かつてるんだ？　また一杯食わすつもりじゃねえだろうな？」

シンドバッドが、さも疑わしげにメランシアスに聞いた。

「南緯〇度五〇分、西経九一度一〇分。東太平洋上の赤道直下に百二十数個の大小の島と岩礁からなる群島がある。その中の一番大きな島が目的地だ」

「前方に？　塔？　見ゆ」

操縦室から伝令管を通じて報告が入る。メランシアスがポンと手を叩いて腰を上げた。

「展望室へご案内しよう。なかなかの見物じゃぞ」

メランシアスに付いて一同は機内の急な階段を登っていく。飛空艇の最頂部、本物の鯨で言えば潮吹き穴の部分に透明なドーム屋根を持った展望室へと出た。

「見たまえ」

メランシアスの指さす方向、進行方向真正面。

「あ、あれは!？」

水平線から一直線に天頂へ向かって伸びる線。行く先は遙か上空の雲間へと消えている。一同はエビ反りになりながら天頂を見上げる。

「あれが？塔?? いったいどこまで続いているんだ?」

「雲を越え、はるか星空へと続いている」

さらに接近すると徐々に塔の細部が明瞭になってくる。

「ありや、まるで……」

シンドバッドは思わず言葉を飲み込んだ。語るにはあまりにもバカバカしい考えだったからだ。塔の表面は、びっしりと緑色の樹皮で覆われているではないか。

「左様。あれは植物だよ。途方もなく大きなね」

シンドバッドの考えを見透かしたかのように、メランシアスが愉快そうに言った。

「二百デイラーア（約百メートル）以上の高さになる樹は知っているが……ケタ違いとか言う問題じゃないぜ」

「すでにご存知かとは思いますが、我々の技術の基盤は植物や動物などの有機体だ。我々の都市でも摩天楼群を見ただろう。あれは全て生きた植物……強いて言えば竹に近い……で構成されていたんじゃない。

それらをさらにスケールアップさせたのが、あの巨樹だ」

「天へ届く樹。北欧神話の世界樹エッダ ヨグドラシルのようですね」

「世界を支えているというトネリコの樹だな。なかなか良い例えだ。シーガード殿。

さあ、そろそろ到着だ。席へ戻ろう」

空飛ぶ鯨が着陸した島、そこはなんと風変わりな島であった。海岸を覆いつくす不気味なトカゲの群れ、様々な食性の小鳥達フイット、何よりも奇妙なのは、内陸地に棲息する体高三呎（約一メートル）を越す陸ガメの群れだった。

「奇妙なもんじゃろ。ここは？天然？だよ。龍人は何の細工もしておらん。我々は、この地をゾウガメの島と呼んでいる。大陸からの孤島に漂着した生物の卵や種子が、独自の進化発展を遂げたものらしい。実に興味深い」

カメ達は、およそ敵というものに出会ったことがないらしく、突然の訪問者達にも驚きも逃げもせずに、荒地に生えているサボテンをムシャムシャと食っている。

その辺にゴロゴロしているカメ達を避けつつ、一行は大樹の根元までやって来た。幹と言っても小山ほどのスケールだ。もはや植物の域を超越している。根本には神殿の入り口のような巨大なうろこがあり、幹の内部へ入ることが出来る。そこに立ち並ぶ兵士達は、メランシアスとルウルウが前を通ると一斉に敬礼のようなポーズを取った。

入口の前でメランシアスは振り返ると一同を意味ありげに見回した。その表情は、あの上卿の冷徹なそれに戻っていた。

「さて、天空丸の娘は良いとして、お前達はどうする？」

「ここまで来たんだ、最後まで付き合うぜ。？天空？にもお目にかかりたいしな」

シンドバッドが大樹を見上げながら言った。

「武器や秘宝と考えているなら、それは間違いだ。ヒトの手には負えない」

「あれだけの目に会ってきたんだ、もう、てめえのことばかり考えられるかよ。それに？深淵？の野郎に一発お見舞いできるんだったら、スカッとするだろうしな」

「それでも、我々はお前達の記憶消去を行うかもしれない、全ては徒労に終わるかも知れない。いや、命すら奪うかもしれんぞ。長老達のように」

「いや……あんたは、そんなことはしない」

アヴァカがメランシアスを見据える。

「ほう？ 随分と言い切るな」

「あんたも、？深淵？と同じように、ヒトの仲間が必要なはずだ」
「我々を中核として、民族を超えた組織を作り上げるつもりです」
シーガードがアヴァカの後を受け継ぐ。

「ベネツィアのマルコ・ポーロか……。お前達に出来るかな？ 信じる神、肌の色、言葉、些細な違いすら認めない、そして殺し合うお前達に」

「殺し合ってきた者同士でも、海を渡って、ここまで来られたっていうのは、すごいことなんじゃないの？」

シンドバッドが吼える。

「数億いるお前達の中で、たった三人がわかり合ったところで、何になる？」

「あの会場であなたは言った。最初にヒトが変わったのは、一組の男女からだったと」

メランシアスの挑発にシーガードが受けて立つ。

「何百年かかるかもしれないけれど、変わる可能性はあるはずだぜ」

シンドバッドも熱のこもった口調で迫る。

「ふむ……面白い命乞いだな」

メランシアスは首をひねる。だが、その表情はどこか満足げだ。

「命乞いではありません。これは純然たる取り引きです」

シーガードが不敵に笑う。

「取り引き？」

「そう、？深淵？迎撃に協力させ、我々を無事に帰せば、今後の？深淵？一派との戦いを有利に進められるはずです」

「クアカカカカッ……大した自惚れた。その度胸に免じて、同行を許そう」

根負けしたようにメランシアスが怪鳥音で大笑した。

巨樹の内部は、広大な空間が広がっており、大小様々な半透明の導管が上方へ向かって伸びている。一際太い数本の導管の根本には、

翼を折りたたんだ数十体のルフ鳥が隊列を組んでいる。導管の中を流れる液体が一定の間隔で巨大な気泡を上昇させる。ルフ鳥達は、次々に気泡の中へ入っていき、そのまま天上へと運ばれていく。

メランシアスとルウルウと共に、リユート達も気泡の中へ入る。気泡は通り抜けても崩れることもなく、その内部には呼吸可能な気体が詰まっている。一行を乗せた気泡はルフ鳥の時と同様に導管の中を高速で上昇していく。

「いったい全体？　どういう仕組みなんだ」

シンドバッドが気泡の内側に触りながら、気味悪そうに訊いた。

「数十メートルの巨木の上に水が届くのも同じ理屈だ」

「この泡のまわりは水なのか？」

「お前達に分かりやすく例えたただけだ、実際は様々な細工をしてある」

導管の途中に、まるで巨大な心臓のようなポンプが脈打っている。そのそばを通過すると気泡はさらに加速され、上方へ押し出された。「おお、外が見えるようになったぞ！」

アヴァ力が緊張と圧迫感から解放され、安堵の歓声を上げた。

所々で樹皮が透けており、外の風景が見えるようになっていく。

見渡す限りの雲の海が広がっていたのも束の間、青空はみるみる群青色に変わり、昼間だというのに星空が瞬きはじめる。

「し、しかし、天上界が夜とは思わなかったぞ」

アヴァ力は珍しく神にすがりたくなったらしく、首にぶら下げている種々雑多なアイドルを驚掴みにする。

シンドバッドが下界に目を転じると雲の切れ目から大陸と海の境界が見えた。水平線は丸みを帯び、シンドバッドの脳裏に？龍の眼？が映し出した球体地図が甦った。

「本当に球なのかよ……」

「一体、どこまで登っていくのです」

シーガードは相変わらず冷静さを失わないが、その眼は探求心でぎらついている。

「高度二万四千哩マイル（三万八千五百キロメートル）。静止衛星軌道に？天空？はある」

「静止衛星？」

「赤道上の高度二万四千哩の円軌道上を、地球の自転と同じ周期で同じ向きに公転している小天体じゃ。地上から見れば静止しているように見える。？天空？は、そこにずっと浮かんでおったのだ。まるで、いつか我々に発見されるのを待っていたかのようにな」

「うーむ」

博学のはずのシーガードもさすがに唸ってしまった。

「複雑過ぎて、理解が追いつきません」

「まあまあ、おいおい分かる時もあるじやろうよ。」

それより見たまえ、あの地球を。空気も水も無い虚空に、ぽっかりと浮かぶ生命の星。実に絶妙なバランスで成り立っているちっぽけな空間」

メランシアスが感極まったように言う。

「ムスリムもモンゴルもフランクも、そして我々龍人も、あらゆる生物が、あの球体の中でひしめき合って生きているのだ。それなのに、何が国家だ？ 何が人種だ？ 何が宗教だ？ 何を争っておるのか？」

メランシアスの言葉にヒト達は返す言葉もなかった。

相手の沈黙を察してか、メランシアスは語調を和らげた。

「いつか、龍もヒトも、みんなをここに連れてきて、自分達の住む場所をみせてやりたい。さすれば、自分らが如何に矮小な存在であるかを思い知るはずだ」

数時間が経過した。気泡は安定しており、星空にも慣れてきた一同は仮眠を取った。

「速度が落ちてきた」

就寝中も明敏な感覚を持つリユートが気泡の微妙な変化に気いた上方を見る。

起き出したシンドバッド達もリユートにならって見上げると、巨樹の幹がにわかに膨れあがり、巨大な編み笠状の球体を形成している。

「あれが……目的地か？」

「いや。まだ行程の半分。一万一千哩程度じゃ」

「まだ半分？」

「ここは、中継基地だ。ここで一度降りるぞ」

座席から立ち上がったシンドバッドがよろける。

「な、なんだ？ 体が軽い」

「重力が弱いんじゃないや。すぐ慣れる」

中継基地の中は、礼拝堂が数十戸は入りそうなほど広大で一つの街ほどの規模があった。しかも、内壁は石英のように半透明の乳白色で柔らかい光を放っており、暗黒の星空の中にあっても昼間のように明るかった。内部は作業区ごとに幾層にも仕切られており、シンドバッドはスズメバチの巣を割った時のことを思い出した。

ここで地上から運ばれてきたルフ鳥が、巨大な莢を思わせる硬い殻に収められていく。

「耐熱殻だ。ここから地上へ向けてルフ鳥を砲弾のように撃ち出す。弾道軌道で日本上空へわずか十数分で送り込むこともできる」

「それなら？ 深淵？ を迎え撃つこともできる」

リユートの顔が輝く。

虹尾のルフ鳥・快速號も順番待ちをしている。ルウルウが近づくと、快速號は長い首を垂れ、喉を鳴らしてすり寄ってくる。

「みんな、改めて紹介するわ。私の友達・快速號よ」

男どもは、その巨大さに怖じ気づいて近づけないが、リユートはスタスタと近づいていく。快速號も見知っているかのように首を転ずる。リユートは微笑むと、快速號の顎の下を搔いてやる。快速號は気持ち良さ気に喉を鳴らす。

「あなたのこと、気に入ったようね」

ルウルウも嬉しそうに喉を鳴らす。龍人は本当に嬉しい時は喉が

鳴るようだ。シンドバッド達もリユートと快速號とのやり取りを見ながら思わず微笑んだ。

「この巨樹もあの巨鳥も全て作られたものとは……信じられません」
シーガードが感嘆と畏怖の混じった声で言った。

「全て生きている。この銃もね」

メランシアスは、懷中から例の毒々しい黄と黒の縞模様の携帯武器を取り出した。

「生命体を遺伝子レベルでコントロールして作りだした生体兵器だ。数万年以前からの技術だ。だが、この樹塔は完全な我々の作ではない」

メランシアスが、少し残念そうに唸った。

「我々は？ 天空？ が垂らした芯を軸にして、この樹塔を打ち立てたに過ぎない」

「芯？」

「左様。芯自体は？ 天空？ が地上との連絡を可能にするために、静止衛星軌道上から、ちょうどロープを垂らすように伸ばしたものだと思われる。ロープと言っても、長さ二万四千マイルだ。その重量だけでも相当なものだ。さらに説明しても分からんじやろうが、遠心力が加わると並大抵の物質では耐えられない。強大な力で引つ張られることになるから、すぐにブチ切れてしまふ。細くて軽くて長くて丈夫な物質が必要なのだ」

「セーデだ」

快速號のところから戻ってきたリユートが答える。

「ご名答！」

リユートの答えに、メランシアスは、まるで優等生を称えるように手を叩いた。

「バグダッドの時の魔法のロープみたいなもんか」

シンドバッドも何とか理解しようと必死だ。

「？ 天空？ は、セーデを使って、宇宙と地の架け橋を作ったのだ」
メランシアスが中継基地のはるか上方を仰ぎ見る。

「彼は夢を見た。天より梯子が地に向かって伸び、天使達がそれを伝って上り下りしていた……」

ルイ王が不意に呟き始めた。

「『創世之書』二十八章」

シーガードが引き継ぐ。

「王よ。たしかに聖典は真実を伝えています。？深淵？だけでなく、？天空？のことも」

シーガードの言葉に、ルイ王は、ただ俯く^{うつむ}だけだった。

「しかし、解せませんね。これだけの力を持っているのですから、龍人だけで？深淵？を倒すことが出来るのでは？」

シーガードのもつともな質問にシンドバッドとアヴァカも頷く。

「？深淵？は封印されたと言えども、そのシンパは世界中にいる。あのスキューレのようにな。そのネットワーク自体が？深淵？の力でもある。人心を操り、争乱と破壊を生み出す連鎖。それが？深淵？なのだ」

皆の視線が、自然ルイ王に注がれる。

「ましてや、？深淵？本体の戦力は、諸君らを襲った海の魔物の比ではないはずだ。ルフ鳥の群れを結集しても、どこまで戦えるか」

「あのルフ鳥でも、か？」

スキューレを易々と倒した紫電でも？深淵？本体は倒せないのか？ シンドバッドは底の知れない恐怖を感じた。

「だからこそ、かつて？天空？が？深淵？を如何に封印したのかを知る必要があるのだ」

降下準備の順番を待っている快速號がゆっくりと首を巡らした。焦点は定まっていないがルイ王の方向を見ているようだ。その視線にルイ王も気づいたのか、ふと顔を上げる。驚くほどにルフ鳥は近くに來ていた。だが、ルイ王の目が釘付けになったのは、その傷口だった。

快速號の傷痕が一瞬脈打つ。同時にルイの髪の毛の中の聖痕が脈

打つ。

また会えましたね。国王陛下。

その優しい声はルイ王の頭の中にだけ響いてきた。思わず目を閉じると、網膜にあふれる光の渦。その中心に大天使の姿。その触手が首筋に再び迫ってくる。あの死線を彷徨^{さまよ}った時と同じだ。だが、今は言いしれぬ違和感を覚えた。

「ち……違う。悪魔め」

逆らうな！

抗することのできない力が首筋を圧迫した。失神するルイ王。アヴァ力が慌てて助け起こす。

「おいおい。王様がまた御倒れになっちまったぜ」

「とことん失礼ね。快速號を見て、また悪魔とか言ってたでしょ」
ルウルウは、いよいよ我慢ならぬと言った表情だ。
とりあえず、衛生兵が呼ばれる。

「さあ、快速號。お前は出陣の準備よ」

ルウルウの声に快速號の反応がない。

「快速號？ どうしたの？」

再度呼ばれて、目が覚めたように首を振るルフ鳥。

「大丈夫？」

ルフ鳥は何事もなかったように一声唸った。

「では、行くか……？ 天空？ の所へ」

メランシアスが遙か上方を見上げて言った。一同は決意したように立ち上がった。

「おいおい。リユートただぞ」

メランシアスが眉をひそめる。

「いや。彼らは私の仲間だ」

リユートがメランシアスを制する。

「皆、？ 天空？ の元へたどり着くために死線を越えてきた。一緒に行く権利がある」

メランシアスは、仕方ない、といった風に首を左右に振る。

「来たまえ」

昇ってきたのとは別の導管へ入る。先ほどは、複数の導管が気泡の昇降に使われていたが、今度のそれは導管が一本だけだ。ここから、また数時間の行程が待っている。

王よ。目覚めなさい。

先ほどの声でルイ王は目を開いた。

頭はどんよりと重く、耳の中に水が入ったような不快感。体の節々は針でも刺さっているように痛い。熱病を患ったようだ。

だが、呼び声は苦痛すらねじ伏せるほどに絶対的な力を持っていた。

医務室のベッドで半身を起こす。軽い重力が幸いして、何とか二本の足で歩くことができる。行く先は分かっている。

ルイ王は、勝手知ったようにロツカールームへ入っていく。そこに下がっている簡易気密服のひとつを着込む。初めて見る品々だが、頭の中に響く声に従い、スルスルと着込んでいく。スリムな龍人達の服も長身瘦躯のルイ王には無理なく着こなせた。バイザーを下ろしてしまえば、すぐに誰かは分からない。

さあ。来るのです。我が元へ。

首筋の聖痕が脈打ち、次々と命令を伝える。

広大なエリアでは、ルフ鳥の出撃準備に数十人の龍人達が慌ただしく動き回っていた。顔を隠したルイ王を仲間と思っているのか、誰も留め立てはしない。

ルイ王はまっすぐにルフ鳥の待つ、射出場へと向かっていった。ルフ鳥が格納されている巨大な鞘。ルイ王は、そのひとつに近づく、表面の突起を指先で特定のパターンで数度押す。鞘に一直線に亀裂が走る。

「何をしている？」

近くにいた数名の兵士が、ようやく異変に気づき駆け寄ってくる。

だが、時すでに遅し。鞘の中から卵から孵化するようにルフ鳥が躍り出る。それは最大最強の快速號。ルフ鳥はカツと口を開く。喉の奥が白熱で輝く。恐怖に凍り付く兵士達。熱波と衝撃が襲う。海の魔物どもを屠った紫電が味方に向かって放たれたのだ。兵士達を跡形もなく粉碎した紫電は、勢いそのままに、中継基地内の施設群へ突き刺さっていく。誘爆。破壊の連鎖。さらなる被弾。その衝撃に耐えかねた隔壁が、ついに碎ける。大量の大気と共に多数の龍人とルフ鳥が、虚空へと吹き飛ばされていく。

当の快速號とルイ王は、中継基地の被害を見届けることもなく、上方へ、？天空？の間へ向かう気泡へと滑り込んでいった。

巨樹の最頂部。そこは光が乱反射する目映い空間であった。巨大な水晶で構築された聖堂のようであった。

「天界っていうのは、こういうところなんだろうな……」

アヴア力が夢心地で言った。それは、その場にいる者全員の心を代弁していた。

林立する水晶柱。シンドバッドはその近くの一本に触れてみた。

鉱物の冷たさを予想していたシンドバッドは、意外な温もりに思わず手を引っ込めた。まるで生き物の肌に触れたような感触だったのだ。

メランシアスの先導の元、一行は結晶の林を抜け、この空間の中心部に到達した。

そこには、一際美しく巨大な結晶体が鎮座していた。涙滴を横にしたような形状で、周囲の光を受け仄かに蒼く輝いている。その荘厳さ、まさに神体だった。

「美しい……」

誰彼と無く思わず感嘆の呟きが漏れた。

「これが？天空？だ……いや？天空？だったものだ」

メランシアスの言葉の通り、結晶は、周囲の輝きを反射しているだけで、それ自体が発光しているわけではなかった。

「死んでいるのか？」

「いや、機能のほとんどが停止しているが、死んでいるわけではない。もつとも、これを生命といえるならばな。」

「？天空？は、水晶繭……我々は、この空間をこう呼んでいるのだが……この中で見出されるのを待っていたはずなのだ。我々の技術力がこの空間へ到達できる時を。」

我々は、？天空？にあらゆる接触を試みた。音、熱、光、電波……。だが、？天空？は答えぬ！ 動かぬ！ ？天空？は眠ったままだ！」

メランシアスがリユートの方を振り向く。その両眼は興奮のために充血している。

「そこで、リユート。君が必要だった。天空丸という言葉はヒトの純血種から生まれた娘。しかも君は？深淵？の復活に呼応するように誕生した。多分に非科学的ではあるが、これは偶然ではないはずだ。我々は君のことを？天空？における巫女の存在だと、^{シャーマン}にらんでいる。だからこそ、我々は可能な限り、君の航海を助けてきた」
たしかに上卿直々にメランシアスとなって、決死行を共にしてきた。

「君なら？天空？を覚醒させ、その声を聞くことが出来るはずだ」
男系の天空丸家にあつて、なぜ自分が女として生まれたのか？

その疑問は常にリユートを支配していた。それを引け目に感じることもままあつた。だが、今、リユートは自分が生まれた重大な意味を感じ始めていた。

「私が思うに、その左手の制御球は？天空？とのコミュニケーションに使用できるのでは、と考えている」
「これが……」

思わず左手を握り締め、制御球をあらためて見つめる。父、烈斗から免許皆伝の儀を受けた際に与えられた天空丸の紋章。^{しるし}秘伝の外科学手術によって代々左手の甲に埋め込まれるのだ。たしかに、その形状は、今、目の前にある？天空？本体と酷似している。

「やってみよう」

リユートが、決然と一步を踏みしめた、その時。水晶繭を鈍い振動が襲った。

中間基地とを繋いでいる導管、その入り口が轟音と共に吹き飛んだのだ。導管内部の昇降液が間欠泉のように吹き上がる。その中から飛び出してきたのは、巨大なルフ鳥。

「快速號！ な、なんで、ここに？」

ルウルウが驚きの声を上げる。

たしかに、その特徴ある虹色の尾羽は、あの頼もしい仲間のものだ。だが、その体は、鈍色の金属に覆われている。

「あれは……セーデ！？」

セーデの縛めは脈動を繰り返す。その度に快速號は激痛に悲鳴を上げる。その体から数本の触手が突き出してくる。それは海の魔物のそれと同じものだった。同時に快速號の頭部から一塊のセーデが盛り上がり、徐々に人の形を成し始めた。

「スキューレ！」

リユートが叫ぶ。その正体を看破された鈍色の女は憎々しげに笑う。

「この化け鳥にやられたとみせかけて、実は、差し違えて放った触手を通して、こいつの体の中に潜んでいたのさ」

密かに快速號の体内で逆襲の機会を狙っていたのだ。？深淵？の手先の恐るべき執念。

「とうとう見つけたよ。これが？天空？かい？ 窮屈な思いをしていた甲斐があつたってもんだ」

「しつこいやツ！」

リユートがスキューレと？天空？の間に立ち塞がる。

「おやおや。天空丸のお嬢ちゃん、アンタこそとつくに死んだかと思つたのに。しつこいのはお互い様だろ」

嬌笑と共に数本の触手がリユートに殺到する。

リユートの制御球が輝き、触手の動きを止める。間髪入れず、一

本の触手を踏み切つて、巨鳥の頭部にいるスキューレまで跳躍する。
「打ッ！」

リユート渾身の拳がスキューレの顔面を狙う。

「残念でした」

打撃は、またもやスキューレの腕で防御されてしまっている。

「今は、この化け物の体内電気も使ってるんでね。お前の制御球なんぞの比じゃないよ」

さらに勢いを増した触手が襲いかかる。リユートは、辛くも避けるが、これではスキューレ本体を攻撃できない。

「何か、武器は無いのか？」

シンドバッドがメランシアスに聞く。

「あるにはあるが、破壊力のあるのはココでは御法度だ。隔壁に穴でも開いたら、全員真空に投げ出されてお陀仏だからな」

「これ！」

ルウルウが例のスズメバチ銃をシンドバッドに渡す。

「こんなものじゃ、快速號にはキズ一つ付けられないけれど……」

「無いよりはマシだ！」

「よっしゃ！ 俺にも」

アヴアカも戦列に加わり、引き金を絞る。蜂の腹状の銃身から断続的に無数の針が放たれる。ルフ鳥のツメ、尾、触手の襲撃をかわしつつ、撃ちまくる。

だが、ルウルウの言うとおり快速號の強靱な肉体に針は突き刺さることもなく、バラバラと水晶の床に散乱するばかりだ。

ルイ王は、破壊された導管の入り口付近にボロ布のようにうち捨てられていた。スキューレにとって王は、？ 天空？ の居場所までの使い捨ての鍵のような存在であった。

ルイ王の指が微かに動く。昇降気泡の破裂と共に床に叩きつけられたにも関わらず、龍人の気密服の耐衝撃効果によって致命傷は免れたようだ。

常に首を鷲掴みにされているような圧迫感は無くなっている。頭の中の霧も晴れ、先ほどまでの女の声は響いてはいない。だが、体の力は抜け、満足に立つこともできない。そう、チュニスで患った病が一気にぶり返したような脱力感だ。

どうやら、あの女の支配を脱した代償として、再び病魔が体を蝕み始めたようだ。いや、むしろ自分は屍のまま生かされ続けていたのかもしれない。

突然、聴覚が轟音と共に戻ってきた。目を転ずると数千枚のステンドグラスが割れたかのような結晶の破片が光の中で舞っている。戦慄すべき美と破壊の中でおぞましい影が舞っている。半身を巨鳥に埋めた女。その背中からは鞭のような触手が数本伸び出ている。あの触手に弄ばれ、その度に天使の声が響いた。

だが、今は、はっきりと分かる。

「悪魔め！」

神を愚弄した邪悪なる者。ルイ王は萎えた足に渾身の力を込めた。

「だらしないですね。紳士諸君」

シーガードはマントの下から弩いしゆみを取り出す。

「いつの間に!？」

シンドバッドが驚愕する。

「備えあれば憂いなし。鎧の中に分解して仕込んであるのです」
言うや数本の弓を同時に装填、連射する。

だが、触手が閃き、鋼の弓を宙空で弾き飛ばす。

「なんの！」

次の弓を装填するが、触手の一本がハエでも払うようにシーガードを襲う。横っ飛びで何とかかわそうとするが足をすくわれる。

「ちいっ！」

床に転がった拍子に弩を手放してしまう。床を滑る弩。追おうとするが、それを阻む触手の追撃。弩を諦め、剣を引き抜くシーガード。

結晶柱をへし折りながら、ついにスキューレは？天空？を眼前に捉える。

「い、いかん！」

だが、リユート達は触手に阻まれ、なかなか近づけない。

「さあ！ 仕舞いにしようか」

勝ち鬨を上げながらスキューレが触手を振り上げる。さらに快速號の巨体を利用して？天空？を破壊しようというのだ。

「ん？」

スキューレの動きが一瞬止まる。？天空？の上に人影。ルイ王だ。

「王様！？ 今さら何を！？」

？天空？破壊に気を取られてルイ王を放っておいた。ルイ王の不可解な行動にスキューレは首をひねった。

因子を通じて、ルイ王の憎しみ、反逆の感情が流れ込んできた。

「しまった。あいつ、制御が外れている」

スキューレは自らのミスに気づくのが一瞬だけ遅かった。

ルイ王の手には、シーガードの弩が構えられている。

「うおおおおおお」

ルイ王の怒号と共に弩が放たれる。

スキューレの顔面に弩が直撃するのと、王の首筋が破裂するのは、ほぼ同時だった。

ルイ王は？天空？の上から鮮血にまみれてゆっくりと崩れ落ちる。

「この馬鹿野郎……」

スキューレは顔面から弩を引き抜こうと、セーデの粘度を調節する。そのため触手の動きが一瞬鈍る。

「今だ！」

その隙を見逃さず、リユートが触手を伝って、再びルフ鳥の頭部に迫る。

「な！？」

リユートの接近にスキューレは慌てて触手の制御を取り戻す。

「また串刺しにしてやる！」

リユートの背後から迫り来る触手。

「同じ手を食うか！」

スキューレの目前で、跳躍、反転するリユート。間一髪、触手を避ける。

獲物を失った触手は、スキューレの腹に突き刺さる。

「ぐ、ぐふ!?」

自分の触手を喰らった事など一度もない。セーデをどうコントロールして良いのか分からず、スキューレは混乱した。

リユートはこの瞬間も見逃さない。

「蹴ッ！」

渾身の蹴り。スキューレの側頭部を尻ぐ。その首がへし折れた！

「小賢しい！」

だが、トドメには至らない。異様な角度でねじ曲がった首のままスキューレが悪態を吐く。辛うじて制御を取り戻した触手が襲いかかる。リユートはルフ鳥の横腹を蹴って宙に逃れる。降り立ったのは？天空？の上。バランスが崩れ、そのまま尻餅。

「?天空?ごと砕いてくれる！」

触手が縊り合^よわさって、一本の太い触手となって、振り上げられる。

思わず身動きしたリユートの制御球が？天空?に触れた。

その途端、?天空?に劇的な変化が起こった。まるで太陽に変わったように強烈な輝きが放たれたのだ。

「な、なんだ!? ……か、体が動かない……」

その青い光を浴びた途端に、スキューレのボディを形成していたセーデが制御を失い流体化し、?天空?の方へ引き寄せられていく。激痛に苦しむ快速號は悲痛な叫びを上げる。

「リユート! お願い、快速號を助けて」

ルウルウの懇願の叫びにリユートが力強く頷く。

「もちろんだ。この子は私達の恩人……倒すのはお前だけだ！」

跳躍。スキューレの内懐へ突っ込むリユート。

「打ッ！」

全体重を乗せた打撃が、今度こそスキューレの胸に深々と突き刺さる。

拳を伝って天空の光がスキューレの体内のセーデをさらに吸い取っていく。

セーデの肉を失い、スキューレの美しい顔は、たちまち朽ち果てた骸へと変わっていく。三万五千年の時を経た髑髏に干からびた体組織が僅かにこびり付いている。

「正体見たぞ！　やはり貴様は傀儡に過ぎない」

「な、生意気な……勝ったと思うなあああ……」

断末魔の叫びと共に、スキューレが快速號に最期の指令を放った。

「撃てええええ！」

ルフ鳥が天井に向かって紫電を放つ。

「しまった！？」

リユートが叫んだ時はすでに手遅れだった。水晶の天窓が破れ大量の空気が流出する。

「くふふふ……道連れだ……」

スキューレの頭蓋骨は、大気の噴流に耐えきれず、へしゃげ、崩れ果てていく。むき出しの歯は不気味な笑いを浮かべたようにカタカタと鳴った。

？天空？が空気の流出によって浮き上がる。リユートは？天空？にしがみつくしかない。？天空？は天上の穴に引っ掛かった。

「リユート！」

シンドバッドは思わず駆け寄ろうとしたが、逆に足が宙に浮いてしまった。

「もう……手遅れだ！」

必死に押さえ付けるアヴァカの太い腕の中でシンドバッドがもがく。

天上が耐えきれずに、さらに裂ける。？天空？は虚空の闇へと吹っ飛んでいった。

「穴を塞げ！ 緊急処置」

メランシアスが叫ぶ。ルウルウが残っている柱に飛びつく。そこにあるレバーを力一杯引くと、数本の柱からシャボンのような泡が大量に吹き出す。流出する空気の流れに乗って、泡は、穴に取り付き、そのまま凝固。みるみる穴を塞いでいく。

空気の流出は止まり、シンドバッドとアヴァカは肩を支え合いながら、そのままへたり込んだ。

「リユート……」

シンドバッドは呆然と星空を見上げるしかなかった。

倒れ伏したルイ王は、シーガードに抱き起こされていた。王の呼吸は荒く途切れがちだった。瞳だけは遠ざかっていく？ 天空？ を仰視していた。

「あの光は？」

「あれが？ 天空？ です」

？ 天空？ とリユートは水晶繭から離れていく。だが、その輝きはさらに増してゆくようだった。

「神は……」

ルイ王は目を見開いたまま息絶えていた。シーガードはその目をゆっくりと閉じさせてやった。

第七章 ? 深淵? 復活

第七章 ? 深淵? 復活

江ノ島。島の最頂部に打ち立てられた塔上で仁王立ちの天空丸烈斗。彼は目を半眼にして月光に輝く海面を凝視していた。

南の水平線で閃光が迸る。それを合図に大気は乱れ、千切れた雲が疾風に舞い踊る。海面はざわめき、やがて大きなうねりを形成する。

「来たな……」

烈斗の両眼が開かれた。再び閃光。海と空の境界に白い線が引かれていく。線は徐々に展開し、太さを増していく。

「波だ……大きいぞ」

大波は海岸線に近づくにつれ高さや勢いを増していく。

「体を支えろ。手近なものに体を括り付けろ」

江ノ島の岩場に激突した波濤は衰えることなく、そのまま島の斜面を駆け上ってくる。島の六割は海水を被り、塔は強風に翻弄される。

「備えろ。敵の先陣が来る」

烈斗の言葉に応じるように、渦巻く波の中から異形の群れが次々と飛び出してきた。

銀色に輝く節足多脚の怪物。身の丈六尺（約一八〇センチ）。深海の甲殻類のような胴体を節くれ立った長い脚で支えている。鋭利な鋏を構えて上陸してくるその姿は、まさに魔軍の進撃。その数、数十、いや百を優に超える。

「構え」

烈斗の号令で、天空衆が一斉に抜刀する。通有も遅れまいと刀を構える。奇妙な刀だった。柄の部分に烈斗の左手甲に酷似した宝玉が埋め込まれている。何でも、この刀で念を込めて打ち据えれば、

天空丸の霸道と同じ効果が得られるのだそうだ。

「狙うは敵の目だ」

たしかに、魔蟹の胴体中央には又メ又メと赤く輝く単眼がある。

「まだまだまだ」

敵の群れを引き寄せるだけ引き寄せる。焦る心、怯える心を抑え付ける。怪物は目前に肉迫する。振り上げられる死の鋏。

「今だ」

烈斗が叫ぶ。魔蟹の大腕をかくぐり、通有は渾身の突きを単眼へ叩き込む。柄の宝玉が青く輝く。赤い目が碎け、同時にセーデの甲殻が弾け、銀色の飛沫と化す。

「いける！ いけるぞ！」

勢いづいた通有は、次なる敵に襲いかかった。

太平洋上に渦巻く黒雲。その中で断続的に電光が明滅している。

それは、衛星軌道上からでも十分確認できた。

「間違いない……？ 深淵？ が復活した」

うなだれるメランシアス、そしてルウルウ。

「？ 天空？ は無くなってしまった。それに天空丸の娘も……」

「何、へこたれてるんだ？ メランシアス」

シンドバッドがメランシアスの胸ぐらを掴み上げる。

「だからって、何もしねえってのか？」

「……この有様を試みる」

メランシアスに言われ、シンドバッドは周囲をあらためて見回し、口をつぐまざるを得なかった。中間基地は、スキューレに操られた快速號の紫電によって隔壁を破られ、壊滅的な打撃を受けてしまったのだ。兵士の大半と降下鞘に入っていなかったルフ鳥が暗黒の宇宙へと吹き飛ばされてしまった。残された戦力は当初の三割にも満たない。

「……ただどな、下界じゃリユートの親父さんが必死に戦ってるっていうじゃねえか、見殺しにするのか。それじゃ、リユート

も浮かばねえぜ」

その時、倒れていた快速號が必死で起き上がった。リユートによってスキューレから解放された快速號は？天空？の間から中間基地まで連れてこられたのだ。首筋の傷は止血されているものの、まだ動ける状態ではないはずだった。

「ボス！ 快速號は戦おうとしています……。私もやるわ！」

ルウルウが意を決したように言うと、快速號は一声甲高く叫んだ。それに呼応するように、他のルフ鳥も雄叫びを上げる。メランシアスは、しばらく立ち竦んでいたが、やがて意を決したように頷いた。

「そうだな。これはヒトだけの戦いではない。さりとて龍人だけの戦いでもない。生きとし生けるもの全ての存続を賭けた戦いだ」

メランシアスが、生き残った龍人達に向き直った。

「総員。戦闘配置。我々はこれより？深淵？迎撃に出撃する」

戦士達は一斉に低く力強い鬨の声を上げた。

荒い息の中、勝ち鬨が上がる。天空衆と河野通有の奮戦により、魔蟹は殲滅された。

「まだだ」

だが、烈斗だけは剣の構えを解こうとはしない。

天空丸の言葉通り、海面が盛り上がり、波間を突き破って、巨大な物体が出現する。

「手……！？」

空を掻きむしる五本の指。中指だけで百尺（約三十メートル）はある。歴戦の雄のはずの天空衆も金縛りにあつたが如く動けない。

さらにもう一本の巨腕が浮上する。そそり立つ双腕の間から銀色の球体が海を割って出現する。あまりの大きさにそれが頭部であると気がつくのに数秒を要した。銀色のノツペラボウ。その表面に周囲の風景が映り込み奇怪な文様を描く。そして、ついに全身が立ち上がる。身の丈数千尺。物理法則を無視した悪夢のような巨体。

「あれが……？深淵？」

はるか上空の中間基地射出場では、ルウルウによりルフ鳥の操縦法がシンドバッド達に伝授されていた。

「かなり即席だけど、あなた達なら大抵のことなら大丈夫そうね」

ルウルウはルフ鳥の後頭部にある鞍のような部分に跨った。実際の飛行中は、兜状の風防が被せられる。

「ここに座って、この突起を握って操るわけ」

「馬術の手綱さばきに似ていますね」

早速、シーガードがルフ鳥の反応を見ながら突起を操作してみる。

「それなら、俺に任せろ！」

アヴァカも騎馬民族の血が騒ぐ。

「ルフ鳥は、乗り手の気持ちに敏感に感じ取るの。この乗り手は信頼に値するか、命を預けても大丈夫かって……」

三人は、それぞれのルフ鳥に跨り、意思疎通に没頭した。

シンドバッドが、ほぼコツが掴めたと実感した時、鞍の上から透明の風防が被せられた。縁の部分が粘膜のようになっており、ルフ鳥の皮膚に密着する。シンドバッドを一瞬襲う閉所恐怖症的な感覚息が苦しい。パニック寸前で、ゆっくりと深呼吸。何とか落ち着きを取り戻すことに成功した。

振り返るとアヴァカが不安そうに風防を掌で確かめている。シンドバッドと目が合うと、何事も無かったようにふんぞり返っている。「へへへ、お互いやせ我慢だな」

シーガードは目を瞑って、精神統一しているようだ。

「女騎士はさすがだねえ」

ルフ鳥たちは再び大気圏突入用の甲殻に包まれる。シンドバッドも事前に指示されたとおり、龍人達のツルリとした兜を被る。顔全体を塞がられたにも関わらず、視界は明るく広い、しかも呼吸も全く問題ない。

「あと六十秒後に射出開始。覚悟は出来てる？ 船長。海とは比べ

ものにならないわよ」

ルウルウのからかう声が耳に響く。シンドバッドは不安と恐怖を度胸で抑え付ける。

「ああ、ワクワクするぜ」

「起きなさい」

優しい声だった。母親に起こされるといふのは、ちょうどこんな感じなのだろう。

リュートは静かに目を開けた。眩しい輝きで周囲が見えない。光源は床からだ。半身を起こす。見上げると天井は鏡のように輝いており、床からの光源を反射して、さらにこの空間を煌めかせている。逆さになった自分が映り込んでいる。ふと見ると正面にも自分が映っている。まるで鏡の間だ。狭いのか広いのかも判別できない。

「ようやく会話できるようになった」

突然、鏡の中の自分が語りかけてくる。ギョツとするリュート。もう一人の自分が、たちまち一人の龍人の女性へと姿を変える。

「……誰だ？」

やっと言葉を絞り出す。口の中はカサカサに乾いている。見たことのある龍人だ。

「あの像……ハジマ？」

龍人は穏やかな顔で微笑むと、静かに頷いた。

「お互い過酷な状況にあったが、復旧することができた」

過酷な状況？……そう、スキューレを葬ったものの、ヤツに操られた快速號がドームに大穴を空け、自分と？天空？は虚空に吹き飛ばされたのだ。

少し気分が落ち着いてきた。もう一度周囲を見回す。目が明るさに慣れてきたきたようだ。床の結晶体のパターン。これはたしかに？天空？のものだ。

すると……目の前の龍人……この人は……。

「あなたは、もしか……？天空……？」

「そう。正確にはセーデで作りだした虚像。本当の私は、そこだ」
ハジマの姿を借りた？天空？がリュートの左手を指差す。見慣れた蒼玉が輝いている。

「その制御球こそが、私自身」

「こ、これが……？天空？！？」

まじまじと蒼球を見つめる。セーデを操るなど超自然的なを感じていたが、まさか自分が常に？天空？と共にあったとは思ってもなかった。

天空丸とは、？天空？を守る者……代々伝えられてきた天空丸の名の由来。それは、まさに真実だったのだ。

「では、この水晶体は？」

リュートは胡座をかいた状態で床を叩いた。メランシアスは、この水晶体こそが？天空？だと言っていた。

「このクリスタルは私のボディに過ぎない。ただし、ボディのシステムを使えるようになったことで、ようやくあなたとも話が出来るようになった」

「？天空？……あなたは一体何者なのだ？ 本当に？神？……なのか？」

「？神？という存在は認知できないが、あなた達の誕生に、大きく関わったのは事実」

「龍人は、？深淵？が私達をサルから創り出したと言っていた」

「あの霊長類は、すでに爆発的な進化のポテンシャルを秘めていた。我らは、それをほんの少し速めただけ、我らが手を下さずとも、いずれこの世界に君臨していただろう」

「我ら？」

「そう。我ら……あなた達、ヒトが？天空？と？深淵？と呼ぶ者……もともと我らはひとつの存在だった」

「ひとつ？」

リュートは混乱した。敵である？深淵？と救世主であるはずの？天空？が同体だということのか？

「我らは、はるかはるか昔に創造主によって宇宙へと放たれた」

「創造主？ あなたを創った？ いったい何者？」

「すでにメモリが残っていない」

宇宙……この星空……果てもない空間……そこには、自分達以外にも生き物が存在している。そして、その生き物が神や悪魔にも等しい？ 天空？ や？ 深淵？ を造った？

「何のために、私達の世界に来た？」

「戦うため。あなた達、ヒトと同じ。我らも戦うために作られた兵器に過ぎない」

「兵器……！？」

「見せよう。我らの長い旅を」

突然、リユートの視界を星空が覆い尽くした。視覚に直接流れ込んでくるヴィジョン。まるで宇宙に浮かんでいるような感覚。本体を得た？ 天空？ の成せる技なのか？

下方に柔らかな光を感じる。目を転じると、青々とした惑星が広がっている。自分達の惑星……地球によく似ている。だが、海の色や大陸の形が違う。何よりも美しい輪が惑星の周囲を取り巻いている。ここが？ 天空？ の言う創造主の故郷なのだろうか？

その衛星軌道の上に浮かぶ壮麗かつ巨大なリング状の構造物。等間隔で七つの赤いクリスタルが配置されている。どれも色以外は？ 天空？ のボディによく似ている。

「数少ないメモリのひとつ」

？ 天空？ の声が聴覚に直接響いてくる。

「後に？ 深淵？ と呼ばれる外環の七つの結晶体。彼らの任務は敵勢力の完全なる破壊だった。数百年におよぶ殺戮の航海を終えた彼らに新しい使命が待っていた」

惑星から蒼く輝く新たなクリスタルが浮上してくる。七つの赤いクリスタルの中央に装填される。

「大きい……」

「あれがフルスペック時の我らだ。今から一億年以上も前の姿。大

きさは直径六マイル（約十キロメートル）におよぶ」

「美しい……まるで雪の結晶だ」

ヴィジョンが結晶体の細部へとズームしていく。大小無数の結晶体を神経繊維のような銀色の金属が繋いでいる。繊維といっても全体の直径が六マイルだとすれば、相当の太さになるだろう。

結晶体はゆっくりと回転を始め、惑星の軌道を離れ、外宇宙へと出発する。その際に惑星を巡る輪を抜けていく。輪と思われたのは、無数の巨大な構造物の残骸であった。その一つ一つは、どこことなく船に見えないこともない。その周囲に漂っている無数の小さな物体は生物の死体だ。これが？ 天空？ が創造主と呼ぶ生物だったものなのか？

リユートがもつとよく見ようと目をこらした途端、視界は乱れ、別の星空へと移行してしまった。

今度は、大宇宙を進撃する結晶体が映し出される。

「それ以前にも我らと同種の兵器は無数に存在していた。彼らも創造主のために敵の占有する惑星を破壊し続けていった」

「敵？」

「これもメモリには残っていない……」

結晶体の前方に惑星が浮かんでいる。先ほど見た、？ 天空？ の母星に似た外観。だが、大気の組成が違うのか多少赤みがかっている。結晶体が高速で回転を開始する。外環の赤い結晶の輝きが徐々に増していく。高速回転のため赤い輝きは、宇宙に浮かぶ火輪のようにだ。回転と発光が頂点に達した時、結晶体から目映いばかりの光と熱の奔流が放射された。高エネルギー波にさらされるや、惑星の地殻が破れ、内部のマグマが血のように放射状に飛び散った。

「敵とは言え、この一瞬で数千億の生命が失われた……」

さらに続く破壊のヴィジョン。幾多の惑星が吹き飛び、消えていく。

閃光と衝撃の連続。壊す。壊す。壊す。壊す。壊す。

「や、止める！」

激しい明滅に耐えきれずリユートが叫ぶ。

突然ヴィジョンが暗転する。そして長い沈黙。

再び、画像が安定すると、星空に青い惑星が浮かんでいる。

「今から七千万年前のメモリ」

「あの星は……」

「そう。あなた達の惑星、地球だ。幸か不幸か、この星域に敵の勢力は、まだ入り込んでいなかった。我らの任務は、このような未踏の惑星を新たな橋頭堡とし、そこに棲息する生命体を新しい戦力として育むことだった」

七つの赤い外環結晶体は、その回転を止め、その代わりに中央の蒼い結晶体が目まぐるしく明滅する。結晶体の表面を覆っている銀色の繊維の表面から、水滴のように一部が分離していく。次々と紡錘状に変形して、地表へと降下していく。まるで地表に蒔かれていく種のようなだ。

「あれは、セーデ」

「そのとおり。あなたや？ 深淵？ が武器に使っている形状記憶流体金属は、もともと我らのボディの構成物の一つだったのだ」

地上に軟着陸したセーデは、たちまち周囲の木々や岩石に同化する。

そこへやってくる利発そうな表情の首の長い二足歩行のトカゲのような生物。その油断のない動きは、どことなく龍人達を思わせる。「当時この惑星には、爬虫類から進化した優れた生命体が君臨していた。将来、龍人の原種となる動物達だ。我らは彼らに接触し、さらに高次の生命体へと導くことにした」

セーデ体は、早速二足トカゲそっくりに擬態し接近していく。トカゲ達は仲間と疑わず、挨拶するかのように頭を垂れ、尻尾を振っている。セーデ体の胴体から触手が伸びる。触手はトカゲの死角からその首筋に突き刺さり、一瞬のうちに因子を埋め込んだ。

因子を埋め込まれた二足トカゲは、硬直痙攣したが、すぐに回復した。自分に何が起こったのかも理解していない様子だ。

「これは？深淵？の手口と同じだ」

「いかにも。ただし、元々は、生物の発達を促進させるための補助具のようなものだった。？深淵？は、現在それを生命体を拘束し、自在に操るための道具として使っている」

トカゲは何も感じていないかのように、セーデ体と共に仲良く歩いていく。

「このように我らの分身達は龍人の祖先達の中に溶け込み、その進化発展を助長させていった」

一瞬のノイズの後に、再びヴィジョンが安定する。

「そして六五〇〇万年前。現在の龍人に繋がる種が誕生した」

先ほどの二足トカゲの面影こそ残すものの、その頭部は見違えるように大きくなっており、尻尾は短く退化し、両手が大きく発達し、石器や火を器用に使っている。他の大型の生物を集団で追い詰め、狩っている。

「彼らは、我らの心強い味方になってくれるはずだった。……だが、それから数万後、破局が訪れる。敵も我々の行動を静観しているわけではなかったのだ」

視覚は再び宇宙空間へ転ずる。虚空から巨大な岩塊が進んでくる。目指すは地球。

「我らを追尾し、地球殲滅を狙った誘導兵器だ。小惑星に偽装し、軌道を巧妙に変更しながら接近してきたため、対応が完全に遅れてしまった。外環の戦闘区画、つまり？深淵？を起動させたが、すでに誘導兵器はあまりにも接近し過ぎていた。例えば、この距離で誘導兵器を破壊しても、降り注ぐ破片によって地表の環境は激変し、せっかく育ててきた生命達が滅んでしまう。だからといって何も処置しなければ、このまま衝突し、地球自体を粉砕してしまうだろう」

？天空？の声は、心なしか低く沈んでいた。

「私は決断した」

リユートは、？天空？の一人称が「我ら」でなく「私」に変わっ

たことを聞き逃さなかった。

「自らの質量を使って、誘導兵器の軌道を変えることにしたのだ」
小惑星に向かって、突入していく巨大結晶体。ただし、小惑星と言っても結晶体の三倍はある。はるかに大きい敵に対して、回転を加えて激突する。その衝撃に小惑星は押し出されるように地球への衝突コースから外れていく。

「やった……」

思わずリユートも安堵の声を漏らす。

だが、結晶体の損傷も激しく、結合が解け、八つのブロックが四散していく。いくつかは、地球の重力に引かれて大気下へ落ち、炎の尾を引いていく。

その内の特に大量の塊がユーラシア大陸の東端に落下する。

「あれは……」

「セーデの塊。総計すると我々のボディの六十五パーセントにあたる。あれが現在の日本列島の関東平野となる地帯へ落ちた。？深淵？が狙っているのは、まさにあれだ」

砕け散った結晶は虚空を漂い、またいくつかは月面へと降り注いでいく。

蒼い結晶繭……？天空？だけが地球の軌道に取り残されていた。

「私だけが虚空に残った。体の九〇パーセントを失った私は、何も出来ずに、この惑星の周回軌道を永きの間、回り続けた」

「自分を犠牲にして私達の星を救ってくれた……」

「犠牲？ 兵器となる命を育てよ、という命令に従っているだけ。

そんな崇高な意識は、私にはない」

「あなたの行動があったから、私達は、今生きている」

「だが、この行動が、結果的に新たな災いを生むことになってしまった」

「新たな災い？」

「敵誘導兵器を迎撃するために作動させた外環戦闘区画は、散り散

りになりながらも、敵勢力への報復を続行しようとしたのだ」

「それが？深淵？」

「そう。？深淵？が目指したのは、自らのボディの復元と、より強力な戦力の調達だった。その一環として産み出されたのがヒト。つまり、あなた達……」。

明らかに？深淵？も変化していた。破壊のためとはいえ、彼らも命を産み出したのだから……。もしかしたら、欠けてしまった私の機能を補おうとしたのかもしれない。

？深淵？の方針は明確だった。異なる勢力同士を戦わせ、勝った方に、また新しい勢力を挑戦させる。そうやって強者を選びすぐり、弱者は淘汰する。そして、最終最強の戦力を創り出そうとする。この地球は言わば？深淵？にとっての武器実験場なのだ」

「今の戦と同じだ……無限に続く争乱」

リユートが諦めたように言った。

リユートのヴィジョンは、地上へと戻っていた。

「私が地上へ放った探査機からの映像だ」

荒野を醜悪な生き物が跋扈している。前傾姿勢に筋肉隆々の身体。発達した犬歯に血走った両眼。リユートは思わず叫んだ。

「あれは！？ タフル」

その姿は、まさにルイ王の手先の食人鬼どもだった。

「？深淵？が最初に創り上げたヒトだ。死ぬことを恐れず、相手を殺し、喰らうことしか考えない生物兵器」

ヒトは龍人の毒蜂銃の斉射にさらされても、味方の屍を乗り越えて肉迫する。ついには格闘戦に持ち込み、手にした石斧で龍人の頭蓋を叩き割り、その肉を生のまま喰らうのである。龍人は、武装では格段に勝っているものの、死を恐れないヒトに、圧倒され、ヨーロッパから当時地続きであった新大陸への後退を余儀なくされる。

「衛星軌道上の私は、その事態に手をこまねいているわけにはいかなかった。このままでは、敵の誘導兵器に体当たりをしてまで守る

うとした、この星の命が滅んでしまう。

私は、地上へ降下することを決意した。赤道上空高度二万四千マイルの静止衛星軌道上からセーデで形成した長大なワイヤを地表へと垂らしていく」

「天の架け橋……か」

「そう。自分自身の核……あなたの左手の制御球と移動などに必要な最小限のパーツをセーデに格納して、地表へと向かったのだ」

ゾウガメの島に降り立った？天空？は、ボディとなるセーデを瞬時に紡錘型に変形させると空中へと浮き上がり、高速で北の空を指した。

？天空？が飛来したのは、激戦の跡も凄まじいのアラスカの平原だった。結果は龍人の敗北。引き裂かれ、食い千切られ、無残な屍を晒している龍人達。その中で、一際高貴な鎧に身を包んだ龍人の女がいた。

「ハジマ！？ あれはハジマだ」

「そうだ。私は推測した。これは龍人にとって負けてはならない戦いだった。そして、この女は、龍人達にとって死んではならない人物だった。周囲の龍人達が、この女を守ろうと、必死に盾になろうとしていることでも、それは明らかだった。私は、この女をモデルにボディを形成することにした」

数日後、龍人の街は、指導者の奇跡の生還に湧いた。ハジマの名を連呼する群衆。会議場で聞いた、あの大合唱である。

もちろん、なぜ生きて帰れたのか、訝^{いぶか}しむ者もいる。そんな時、？天空？、いやハジマは、左手に露出している結晶体を見せて、空を指差した。

「自分の命は、空から来たもの……？天空？によって救われた」

ざわめきながらも龍人達は、天を仰いで祈りを捧げるのだった。

「これはあながち虚構ではない。幸いだったのは、今よりも龍人達

が超自然的なものに対して敬虔であつたことだろう」

龍人の指導者ハジマの姿を借りた？天空？は、反撃作戦を展開、数における劣勢を覆す。知能で勝る龍人ならではの頭腦的な戦略で大被害を受けるヒト。

？深淵？も負けじと、旧人タフル型から、頭脳ではるかに勝る新人クロマニヨン型を開発投入してくる。高性能の武器を操り、組織的な作戦を展開する、この強敵の登場に龍人は再び苦戦を強いられる。

だが、戦局に転機が訪れた。

森林をヒトが進軍してくる。ギリシア彫刻を思わせる逞しく均整の取れた容姿は、美しくすらある。手には重火器と思われる武器を携えている。

突如、樹木の後ろから小柄な人影が次々と姿を現す。龍人が創造した「女」だ。自分達に似た姿に戸惑い、顔を見合わせる「男」達。女達が至近距離に近づいてきても何の行動も起こせない。突如、男の一人から血しぶきが上がる。手には鋭利なナイフ。虚を突いて次々と男を葬っていく女戦士達。

？天空？と龍人達は、すでに優れたバイオテクノロジーを駆使していた。その細胞を培養して、女性を創り出すことに成功したのだ。龍人の施設内では、林立する円筒形の水槽の中に胎児達が浮かんでいる。ヴィジョンの時間経過がぐつと速まり、水槽から出された赤ん坊達が、たちまちのうちに美しい少女達へと成長していく。

「結果的にこの戦略が決定打になった。ほとんどの男達は何の抵抗も出来ないまま、女達の刃に倒れていった。？深淵？はオスの本能まで消去することが出来なかったようだ」

「男ってヤツは……」

木偶の坊のように、ただ倒されていく男達にリユートは哀れみさえ感じた。

「だが、予想外の出来事が起こった。傷ついた男を助ける女が現れ

ただ。彼女の名はガラテ。初めて男を助けた戦士だ」

「あ……」

甲斐甲斐しく男の手当をする女の顔を見て、リユートは思わず小さな叫びを上げた。

「そう。あなたにそっくりだ」

「ガラテ……彼女が天空丸の始祖」

「女という愛すべき仲間を得た男達は、勇猛果敢に？深淵？へ挑んでいた。戦闘を繰り返せば繰り返すほど、龍人側にヒトの兵力が流出していく。男と女……ヒトを味方に付けた龍人は、？深淵？の侵略を確実に押し返していった」

ヴィジョンが切り替わった。深い溪谷の底だ。よく見ると谷の左右は氷の壁だ。その壁面には、血管のように銀色の物体が這い回っている。セーデだ。

「ここは、この星の南の果ての氷雪地帯。ここで私とヒト、そして龍人は、？深淵？の核のひとつを見つけ出し、無力化した。最初の本格的な勝利だった」

リユートは、まるで自分自身が、その戦いに身を投じているかのような錯覚に陥る。これは？天空？自身の視点のようだ。

傍ら^{かたわ}をヒトの女が走っている。赤い革鎧に身を包んだリユートそっくりの少女。ガラテだ。その傍らには長身の男が寄り添うように走っている。以前にガラテに命を救われた男だ。周囲には、やはり幾組かの男女が龍人支給の毒蜂銃や百足鞭などの武器を振り回して疾走している。

敵は、残存のタフル、そしてセーデ製の怪物、甲殻類のような頑強そうな連中。

セーデ製の怪物は、龍人のルフ鳥が片付ける。タフルは、男女の連係攻撃の前に打ち倒されていく。

「あそこです！ ハジマ様」

ガラテがハジマ？天空？に叫ぶ。

氷の谷の最深部に流体金属に包まれた巨大な赤いクリスタルが鎮座している。セーデの塊は断末魔のように痙攣している。

ハジマが拳に輝く蒼いクリスタルを突き出す。？天空？自身から発せられる蒼い輝きに、周囲のセーデは流体化し、赤い結晶が、いよいよ剥き出しになっていく。外装を失い無防備となった結晶体は意外に小さく、？天空？よりも二回りほど大きいだけだった。

「この後、？深淵？の核は、太平洋の海溝、この惑星の最も深い部分へと沈められた」

勝利に歓声を上げる、ヒトと龍人。

リユートの視界の端で何かが閃いた！ 真っ直ぐに自分、つまり？天空？目がけて飛んでくる銀の槍。その時、視界を遮るように赤い影が飛び出してくる。

ガラテだ！

少女の胸に突き刺さる銀の槍。セーデの槍だ。

槍を投げたのは…… スキューレだ！

「くそ！」

？天空？ハジマを殺せず、スクューレが地団駄踏んでいる。

「おのれ！　そこまで墜ちたかスクューレ！」

数名の男女が怒声を上げて襲いかかる。スクューレは脱兎のごとく逃げ出した。

「あなた達を苦しめたスクューレも、ガラテと同じ初期の女の一人。ただひたすらに殺戮に走った彼女は、男達との共闘を嫌い、自ら？深淵？の元へ走った」

スクューレの暗躍はヒトの開闢の時代から続いていたのだ。あの執念深さは遙か古代より綿々と蓄えられてきたものだったのだ。リユートは総毛立つ思いだった。

？天空？は、ガラテを抱き起こした。

「ハジマ様…… よかった」

？天空？の無事を確認して、安心したように微笑む少女。だが、その瞳からは生気が急速に失われていく。リユートは、自分自身の

死を目の当たりにするようで、全身が凍り付くような気分だった。

傍らでは先ほどの男が言葉にならない声で泣き叫んでいる。

「私には分かっていた。この娘の胎内に、新しい命が育とうとして
いることを……この新しい希望を失うわけにはいかなかった」

？ 天空？ から別の輝きが迸る。それは癒しの光。ガラテの胸の傷
が癒えていき、その顔に赤味が戻っていく。

「生き返った！」

我がことのように喜びリユート。知らぬ間に頬を涙がつつっていく。
「だが、これは一時のこと。応急処置に過ぎない。彼女を本当に生
かすためには、私の核の波動を常に与え続けなければならない」

唐突にヴィジョンが途切れた。

リユートは全てを悟った。左手の蒼球を見つめる。

「あの娘を助けるために、あなたは彼女に……」

龍人の指導者ハジマは、この戦いで忽然と姿を消したという。？
天空？ 本体がガラテに移植されたことによって、ハジマを形作って
いたセーデは流体化してしまったのだ。

そして、それ以来、天空丸は代々この制御球を自らの肉体に埋め
込み続けたのだ。

？ 天空？ の願いを守るために。

「何という…… 大きさ」

立ち上がった巨人の想像を絶する大きさに強者達も凍り付いた。
その頭部は、はるか上空に達しており、わずかに霞んで見える。
周囲の大气が発する雷電が、その体にぶち当たり、そのまま血管の
ように広がっていく。

巨人がゆつくりと一步を踏み出した、そのたった一步のために高
波が七里ヶ浜を洗う。

「れ、烈斗殿」

傍らの河野通有の声も震えている。

「？深淵？め。人型とは考えたな。その動き、放たれる威力が見る者に理解しやすい。故に恐怖も浸透しやすい」

？深淵？は人間の心理を知り抜いている。烈斗は、その狡猾さに舌を巻いた。

？怯えよ、震えよ、汝らに万に一つの勝ち目もない？

はるか上空から見下ろす巨体からそんな言葉が発せられるような錯覚に陥る。

今度は巨人の腕が動く。その動きは、ひどくゆっくりだが、周囲に突風が巻き起こる。

「いかん！ 塔から逃げろ！」

烈斗が？深淵？の行動を察知して、総員に退避の号令。

？深淵？の人差し指が野の花を愛でるように、物見櫓に触れる。

その接触だけで百尺におよぶ司令塔の芯柱が裂け、格子状に張り巡らされていた桁が粉碎される。

「まだ、まだあ！」

烈斗は手からセーデの綱を伸ばす。綱はスルスルと伸びていくと遙か上空の？深淵？の肩口の部分に取り付いた。烈斗は三種の神器を抱えると、崩れゆく塔の欄干を蹴って、宙に舞った。そのまま、綱を収縮させ、？深淵？の肩口に取り付く。

巨人の肩、といっても競技場がまるまる収まるくらいの広さがある、烈斗は、そこを一気に走り抜く。目指すは小山ほどの頭部。

神器を構えて、至近距離から頭部を狙い撃つ。迸る紫電。？深淵？の頭部が蠟細工のように溶け出す。密着攻撃に虚を突かれたのか？深淵？は無抵抗だ。

「うおおおお！」

烈斗の紅い髪が燃え上がるように逆立つ。

「おお！ 行ける！ 行けるぞ！ 烈斗殿」

通有が歓喜の声を上げる。

だが、烈斗の左手の制御球は、すでに限界を迎えつつあった。その表面には細かいひびが無数に走っている。

耐えてくれ、模造品。^{レプリカ}

烈斗が全身からさらに気を絞り出す。紫電は勢いを増すが、烈斗の紅い髪がみるみる白く変わっていく。紫電は、烈斗の命そのものを削り取っているのだ。

突如、？深淵？頭部の崩壊が止まり、瞬時に再生していく。？深淵？は、まるで烈斗をあざ笑うかのように、軽く首を傾げた。

「龍斗……」

烈斗が万策尽き果てたように娘の名を呟く。同時に耐えかねたように制御球が破砕し、烈斗の二の腕から先が無残に吹き飛んだ。

その衝撃で烈斗は？深淵？の肩から弾き飛ばされ、夜の相模湾へと落下していった。

衛星軌道上の中継基地から放出された耐熱殻は、弾道コースで太平洋を越え、今、日本上空へと降下していた。

大気との摩擦と振動、下方から突き上げてくる圧力。シンドバッドは、今まで経験したことのないような力に翻弄される。大波のてっぺんから一気に落ちるのを数十倍したような衝撃だ。

こいつあ、たしかに海とは比べものにならねえや。

高度六哩で殻が割れ、中からルフ鳥が出現する。一、二度力強く羽ばたくと、そのまま滑空を開始する。

シンドバッドは急に体が楽になったのを感じた。

「大丈夫？ 船長。ちゃんと起きてる？」

ルフ鳥のからかう声がひどく懐かしく感じる。思わず安堵のため息が漏れる。

「することがないんで、居眠りしてたぜ」

「上等ね。さあ、いよいよ？深淵？と対決よ」

ルフ鳥の編隊は翼を次々と北東の方角へと向けた。

「烈斗殿！ しっかりしてくだされ」

河野通有の対応は早かった。？深淵？の再生が始まるや、配下の

伊予水軍を率いて相模湾に漕ぎ出し、烈斗のバックアップに回ったのである。

海面に落ちた烈斗を救い出すと、砕かれた左腕の応急処置をする。

「通有殿……」

烈斗が薄目を開ける。

「傷に障る。無理に喋りなさるな」

気遣う通有を制して、烈斗は自由な右腕で上空を指差した。

「来るぞ」

銀の巨人も不穏な空気を感じたのか、ゆつくりと空を見上げる。

上空から幾筋もの光が降り注ぐ。流星の如く、落雷の如く、光弾が次々と？深淵？の胴体に頭に突き刺さる。

わずかに遅れて飛来する巨大な影。

「と、鳥か！？」

初めて見るルフ鳥の群れに通有が肝を潰す。

さらにルフ鳥が吐き出す紫電の連弾が降り注ぐ。？深淵？のボデイが痘痕と化す。

「おお！」

天空衆や伊予水軍から歓声が上がる。

「やりましたな！ お嬢が龍人を連れてきた」

「いや、……龍斗の気配は無い……」

ガックリと頭を垂れる烈斗。

「それに……龍人では？深淵？には勝てない……？天空？でなければ」

「リユートの仇だ！」

シンドバッドの操るルフ鳥がクラケンを一撃で粉碎した紫電を連射する。

「撃て！ 撃て！ 撃て！」

だが、その威力をもつてしても、？深淵？への致命傷には至らな

い。紫電による傷痕も瞬時に再生してしまう。

「くそ！ 奴め、ビクとみせんぞ」

アヴァカが歯ぎしりする。

？深淵？が蚊かハエでも追っ払うように腕を広げた。その表面から無数の銀色の針が発射される。セーデを針状にして射出しているのだ。後続のルフ鳥が蜂の巣にされる。

「いかん！ 離れる。？深淵？から距離を取れ」

メランシアスが叫ぶ。

「それでは、威力が落ちるだけです」

シーガードは反論すると同時に、自らの駆る巨鳥を旋回させ、？深淵？の背後に回り込む。だが、今度は？深淵？の背中から幾本もの触手が出現する。スキューレと同じ戦法。だが、その大きさ、数、そして破壊力が桁違いである。

シーガードは、この奇襲攻撃を避けきれず、ルフ鳥の翼をスタズタにされてしまう。

「脱出しろ！ 鞍の下を取っ手だ。引け！」

メランシアスに従って、脱出レバーを引く。ルフ鳥頭部の風防が外れ、宙高く舞うシーガード。

「次、飛翔機を展開」

龍人達が飛行するのに使う、昆虫の羽根を作動させようとするが、上手く羽ばたかない。シーガードは、そのまま暗い海へ真っ逆さまに落下していく。

「シーガード！」

アヴァカが叫ぶ。彼のルフ鳥が辛うじてシーガードを空中でキャッチする。だが、その刹那？深淵？の触手の横殴りを受けてしまう。バランスを失い、砂浜に叩きつけられるアヴァカのルフ鳥。

そこへ？深淵？の巨大な足が地響きを立てて踏み下ろされた。

フェードアウトするヴィジョン。ヒトの黎明の物語は終わり、リユートの意識は結晶体へ戻っていた。

どのくらいの時が経過したのだろう？

「地球時間で言えば、ほんの数分」

そう答えながら、？天空？がゆっくりと回転するのを感じた。セーデのドームを通して頭上に地球が見える。？天空？が投影しているのだろう。

竜のような列島。^{ジバンゲ}日本だ。その中心へ迫る、渦巻く暗雲。

「先ほど、？深淵？が浮上した」

ハジマが姿を消し、その代わりに結晶体が輝きを増す。

「行こう。もう一人の天空丸が、あなたを待っている」

^{パパ}「父上！」

ゆっくりと軌道を修正する？天空？。いかなる動力で動いているのか？リユートには計り知れない。突入角度が定まるや、加速。大気圏の摩擦熱で真っ赤に燃え上がる。

リユートは目を閉じ、座したまま。ちょうど座禅を組んでいるように精神統一。

その心の中に？天空？の声が語りかける。

「？深淵？との戦いは、体力ももちろんだが、壮絶な精神戦が予想される。？深淵？は太古よりのデータ集積の結果、ヒトの心进行操作するのに長けている」

「望むところだ」

「そこで、あなたの深層心理にある^{よど}澱みの理由を明確にしておきたい」

「澱み？ 私の心の」

「なぜ、あなたは父親を恐れる？」

^{パパ}私が父上を？ そんな……。

同時にリユートは全身が総毛立つのを抑えることが出来なかった。

？深淵？は無数の触手を勝ち誇ったように月光降り注ぐ夜気の中へ泳がせていた。

邪魔なルフ鳥はあらかた片付けた。残っているのは、シンドバツ

ド、ルウルウ、メランシアスののみ。その内、メランシアス機は情報収集と作戦指示の指令機、故に武装は無いに等しい。最強戦力はルウルウの乗る快速號だが、これは配下のスキューレによって痛手を受けている。元気が良いのはシンドバッドの乗るルフ鳥だが、たった一体で何が出来よう。

？深淵？は、残存のルフ鳥を無視して触手を七里ヶ浜に突き立てる。

「一体、何を始めるつもりだ！？」

シンドバッドの声は焦りの色を隠せない。

「分からん。ただ、奴がジパングを目指してきた目的を果たそうとしていることは確かだ。どちらにしろ、放っておけば我々に生きる術はない……」

「メランシアス、何か手はないのか！？」

「？深淵？にも核があるはずだ。あの大量のセーデを制御している核を狙えば……」

メランシアスのルフ鳥は、他のルフ鳥と異なり、頭部に昆虫の触角のような感覚器を備えている。操縦鞍の受像器には？深淵？表面の微弱電気の流れがモニターされている。周波域を微妙に調整し、その流れの源流を追う。

「わかった！！ 胸のど真ん中、ちょうど心臓と同じ高さだ」

「よっしゃー！」

シンドバッドがルフ鳥を地面スレスレに飛行させ、？深淵？の胸元に突入する。

「くらえ！」

紫電三連弾。？深淵？の胸部に次々命中。

「やったか！？」

巨大な傷痕を残したものの、その内部にあるであろう核は見えない。

「火力が足りんだ」

メランシアスが、悔しさに思わず拳で膝を叩く。もっと早く、戦

力を失う前に、この事に気づいていれば、集中攻撃できたものを。

「どいて！ 船長」

ルウルウの声が割り込む。離脱するシンドバッド機とすれ違うように快速號が急降下してくる。渾身の紫電が発せられる。通常のルフ鳥の比ではない重爆。シンドバッドが付けた傷跡にさらに打撃。

「おお！ あれは」

クレーターのように深くえぐられた胸元に、赤く輝く物体がわずかに見える。明らかにセーデとは違う。

「もう一発！」

シンドバッドはルフ鳥を旋回させ、再び突入。だが、？深淵？は浜に突き立てていた触手の数本を引っかくと、シンドバッド機に向かつて振り回す。なりふり構わぬ一撃がルフ鳥の翼を貫く。

「畜生！」

だが、低空と柔らかい砂浜が幸いしてルフ鳥は軟着陸に成功。シンドバッドは素早く操縦鞍から脱出する。その刹那、触手の一撃で傷ついたルフ鳥が引き裂かれる。血の絨毯と化した砂浜を転げ回るシンドバッド。触手が向きを変え、今度はシンドバッドに狙いを付ける。足がもつれる、逃げられない。触手が眼前に迫る。

シンドバッドが死を覚悟した瞬間、体がふわりと浮き上がる。

「な、な、な？？？」

胸に細いが鍛えられた腕が回され、空中に吊り下げられているのだ。

「危なかったですね」

背後から低いが優しい声。

「シーガード！ 生きてたのか！？」

「踏みつぶされる前に、やっと、この羽根が動きましてね」

「アヴァカは？」

「私が助けました。ジパングのサムライに保護してもらっています」
後方を振り返ると、すでに？深淵？はシンドバッド追撃を断念し、
またもや砂浜を触手で穿っている。巨大ミミズが地中を這い回った

ように周囲の砂が盛り上がる。同時に耳を覆いたくなるような低く重い音が地底から響いてくる。

「何か地の底を探しているみたいですね？」

不快な低周波に顔を歪めながらもシーガードの冷静な観察眼は衰えない。

上空では、快速號が再度攻撃を仕掛けようとするが、傷のせいで動きが鈍い。一体での攻撃は不可能に近い。

それを知っているのだろうか？深淵？は悠然と作業を進めている。

「何とか止めなきゃ……」

焦るシンドバッド。だが無策。

そこへ満月よりも、なお眩しい光が雲間より降り注ぐ。

この光には、さすがの？深淵？も怯んだように動きを止める。

目映い光に包まれた紡錘形の結晶体が静かに降りてくる。

メランシアスが歓喜の声を上げる。

「あれは……？天空？！」

？天空？の内部で仁王立ちのリユート。？天空？内部が全面スクリーンとなり、下方に鎌倉七里ヶ浜を蹂躪する？深淵？が見える。

長い手足と髪の毛のような無数の触手を振り乱す。まさに巨大なる悪鬼。

「？深淵？は自らのボディを探そうとしているのだ」

？天空？の言葉に、太古に関東平野に降り注いだ大量のセーデのヴィジョンが甦る。

「もし、ヤツが体を手に入れたら？」

「？深淵？は力を取り戻し、ヒトを完全に掌握し、再び兵器へと引き戻すだろう」

「？深淵？……させん！」

？深淵？が怯えたように？天空？目がけて触手を繰り出す。だが、

見えない壁に弾かれる。うまく巻き付いたかと思えば、そのまま溶解してしまう。

無数の触手をかき分けるように、？天空？は？深淵？へ迫る。

？天空？の接近で？深淵？の表面のセーデが波打つ。さざ波が、やがて全身をふるわせる大波へと膨らんでいく。もがき苦しむ？深淵？は、もはや巨人の姿を維持できなくなったのか、ドロドロと流体化して逆巻く海へと崩れるように没していった。

「おお！ やったぞ、アヴァ力殿」

河野通有は歓声を上げ、思わず傍らのモンゴル將軍と肩を抱き合う。言葉は分からないが、アヴァ力も歡喜の声を上げている。数日前、博多に攻め込んだモンゴル軍の仲間であるうが、かまわない。こいつは味方だ。通有の直感が、そう告げている。

この男、先ほど、有翼の美女に抱かれて、空から舞い降りたのだ。普段であれば、驚きのあまり腰を抜かすところだろうが、すでに常識の箍^{たが}が外れている通有は、逆に素直に現状を受け止めることが出来た。

勝利に沸く一同の頭上に、再び先ほどの空飛ぶ美女が現れた。今度は褐色の肌の青年を抱いている。

「その若者は？」

「シンドバッド」

どう見ても異国の女だが、こちらの言葉は分かるらしい。女はシンドバッドを砂浜に放り投げると、そのまま小走りに天空衆をかき分けていく。

「レット！ おお、レット」

そうだ、女はさつきも烈斗の名を呼んでいた。彼女は烈斗を知っている。それかなり親密に。だが、仲間の青年シンドバッドの危機を救うため、再び激戦の中へ戻っていったのだ。

女……シーガードは、重傷の烈斗の傍らに跪^{つひま}くと、今は白髪となった頭を愛おしそうに膝枕してやる。烈斗が薄目を開ける。

「……イオナ殿か……久しいな」

「その名で呼んでいただけるのは、あなただけです」

感極まったようにシーガードが烈斗の頬を撫でる。

「リユートが、あなたの娘が帰ってきています。そして？深淵？を倒しました」

烈斗が宙に浮かぶ発光体を眩しそうに見やる。

「？天空？……。だが、油断するなリユート」

？天空？内のリユートは険しい表情のまま、？深淵？が没し、波打っている海面を睨みつけている。

「脆^{もろ}すぎる……」

「同意見だ。？深淵？の反応は、むしろ増大している」

突如、巻き起こる振動。海岸線が波打つ。

「じ、地震だッ！」

東方の丘陵地帯をかち割って出現する銀色の物体。？深淵？はさらに巨大になって復活したのだ。すでに人間の形は維持できなくなつたのか、ブヨブヨとした不定形だ。

上空のメランシアスの興奮しきつた声が通信機を通してシンドバツドの耳元に響く。

「列島の地下には膨大なセーデが埋蔵されている。？深淵？の狙いはそれだったのだ。海溝の底で力を蓄え、自らのボディとなるセーデを求めて日本へやって来たのだ」

「それにしても、なんて大きさだ！？」

脈動する不定形物体は、江ノ島の数十倍はある。まるで銀色の山脈だ。

「奴めは、地下のセーデを貪って、さらに成長している。だが、あれはまだ序の口。本格的にセーデを吸収すれば、その辺一帯の広大な平野は土台を失い沈降するぞ」

「？天空？内部のリュートは、予め知らされていたとはいえ、顔面から血の気が失せ、手足が竦む思いだった。」

「ゆっくりと呼吸する。父から授けられた霸道の基本。恐怖は恥じることではない。それを制御さえできれば怖い者はない。怖じけていた精神が鋼の強さを取り戻す。」

「行くぞ」

リュートの覇気と共に、突き進む？天空？。狙うは？深淵？中心部の赤い核。紡錘の先端が捻りを加えて、銀色の山腹に突き刺さった。

さらに回転……。だが、そこまでだった。元々の大きさが違いすぎる。巨鯨にたった一本の銚で挑むようなものだった。？天空？の掘削は？深淵？の圧倒的パワーによって押さえ込まれてしまった。？深淵？のセーデが？天空？を包み込んでいく。まるで細菌を喰らう白血球だ。

「？天空？内部では、強大な圧力に襲われ、軋むような不気味な音が響いていた。」

「大丈夫か？　？天空？」

「質量の差は絶大だ。このままでは物理的に破壊されてしまう」

「では、最後の手段だな」

宇宙からの帰還時、？天空？とリュートは？深淵？撃滅の秘策を練ってきた。

「成功の確率は微少だ」

「覚悟は出来ている」

「？天空？に一瞬の間。人間で言えば躊躇しているのか？」

「作戦開始」

「？天空？の輝きが前方に向かって集中していく。輝きが消えた後部は、力を失ったように、ひび割れ、そのまま？深淵？の力に負けて圧壊していく。」

「？？天空？が圧壊！？　馬鹿な！？　馬鹿な！？」

メランシアスは指令用ルフ鳥の中で茫然自失の態となった。

「リユート！」

絶叫するシンドバッド。

だが、天空丸烈斗の眼光だけが鋭く光る。

「本当の戦いは……これからだ」

結晶体内部もすでに崩壊が始まっていた。

「ボディを失うので、今後の会話は不可能だ」

「分かっている。自身の判断で行動する」

「行きなさい。天空丸龍斗」

？天空？の外装である結晶体。その前方から最後の光の奔流が迸る。収束された光の帯は？深淵？のセーデの壁を突き破り、深く進攻していく。

この光によつて、セーデは部分的に？深淵？の制御を離れ、液状化されているのだ。このセーデの中を、今、リユートは必死になつて泳いでいた。外装を失い、すでに？天空？の声は聞こえなくなっている。だが、左手の甲に前にも増して力強く暖かい胎動を感じる。濃密な液体金属の中、視覚も聴覚も役に立たない、今、？天空？を通じて送られてくるこの感覚こそが命綱なのだ。

目指すは、？深淵？の核。刺し違えても叩き潰す。リユートは、それが天空丸の古からの使命であり、自らの存在そのものなのだ。リユートの周囲のセーデがわずかに粘性を帯びてきた。？天空？のセーデに対する制御が活きているうちに核に到達しなければならぬ。もし、？深淵？が制御を取り戻したら、リユートは固体化したセーデの中に閉じ込められ、窒息死してしまうだろう。リユートは、死に物狂いでセーデを？き、前に進もうとした。

唐突にリユートは全身を覆っていた圧迫から解放された。セーデの海を突っ切り、何もない空間に飛び出たのだ。自由落下が襲う。ネコのように体を丸めて墜落の衝撃に備える。落下はほんの数メー

トル。降り立つた場所は、硬く、ひんやりとしている。

恐る恐る大気を吸い込んでみる。夜のように冷えた空気。

？深淵？の中心部に到達したのか？

周囲を見回して、リユートは愕然とした。そこは予想だになかった場所だったのだ。

「こ、ここは……！？」

岩に囲まれた空間。岩窟だ。外界からは明るい光が差し込んでくる。岩窟の中もクッキリとした陰影が刻まれている。だが太陽のような眩しさはない。満月だ。

「そ、そんな馬鹿な……」

忘れもしない、忘れるわけがない……この岩窟は、アラムハート鷲の巢城！

「た、たすけて！」

岩窟の冷気を引き裂く悲鳴。この声は！？

「ユイガ！」

素早く周囲を見回す。バルコニーのような張り出した岩に人影。長身の男の影だ。その男に首を捕まれた小柄な影。ユイガだ！左手一本で軽々と掴みあげられている。宙に浮いた両足は断末魔にもがいている。

必死に駆けるリユート。跳躍。男の肩にかじり付き、その左腕からユイガを解き放とうとする。だが、ビクともしない。それをあざ笑うようにさらに男は腕に力を入れる。

枯れ木の折れるような、妙に乾いた音がして、ユイガの眼が白濁する。口はだらしなく開き、紫色の舌がダラリと垂れ下がった。

声にならない悲鳴を上げるリユート。

「よくもおおッ！」

怒りを込めて、拳を振り上げる。その男の頭蓋を粉碎すべく渾身の打撃。

だが、それよりも速く、男の両手が翻り、ユイガの亡骸を放り捨て、リユートの腕を押さえつける。さらに、もがく間もなくリユートは空中に放り投げられてしまった。

辛うじて身を翻して、男の前の岩の上に両膝を屈して着地する。

「無様な……」

男が低く唸った。感情の全く通わない声。

「まるで潰された墓ひきのようだな」

リユートが見上げると、初めてその人相が満月の光の中に明らかになった。

「父上！？」
ババ

月光に照らされた死人しにのような表情、だが、その顔は明らかに父、天空丸烈斗！

「な、なぜ？ 父上ババがユイガを……」

すぐるように両手を烈斗へさしのべる。

「甘い」

リユートのあご目がけて、烈斗の鋭い前蹴りが飛ぶ。無様にひっくり返るリユート。間髪入れず烈斗は、その腹を踏みつける。

「うぐっ！」

苦い胆汁と血が口の中にあふれ出る。呼吸が出来ない。

「甘い！ 軽い！ 脆い！」

さらに踏みにじる烈斗。

「だから、天空丸に女はいらぬ！」

死刑宣告にも等しい父の言葉。リユートの戦意は凍結した。

「パ、父上……」
ババ

リユートの振り絞った声は、のど元を鷲掴みにした烈斗の手によって切断された。

そのまま、ユイガと同じく軽々と持ち上げられ、絞首刑のように宙づりにされる。足をばたつかせて何とか逃れようとするが、烈斗の岩壁のような胸板には何の効果もない。

「かような恥さらし、せめて、この父が引導を渡してくれる」

烈斗の手にさらに力が込められ、リユートの首が締め上げられる。頭蓋の中で何かが弾けた。衝撃。リユートの視界が暗転した。

？どうだ？ お前が最も恐れる？敵？の威力は？？

闇の中に響く声。先ほどの父の声か？ いや、違う。数人の話し声にも聞こえるし、たった一人の声にも聞こえる。

遺伝子の中に刻み込まれた恐怖を呼び覚ます低く重い声。

？お前は勝てない……勝てるわけがない？

勝てない……。

リユートの意識は、絶望の泥の中に深く深く沈んでいく。

リユートは、巨木の切り株のような有機的な丸い寝台の上に寝かされていた。四肢は流体金属で束縛されている。死んでいる？ いや、わずかに胸が上下している。

闇の中に輝くクリスタル。？天空？に酷似しているが、はるかに大きい。人間の身の丈ほどはあるのか？ 何よりも違うのは、その色。血のように紅く妖しく輝いている。七つの結晶体がフジツボのように固まって一つのクリスタルを形作っているのだ。

七つの意識体が会話をしている。

？この者の精神に強烈な打撃を与えた？

？データ収集および分析は完璧だ？

？ヒトの精神は脆い？

？所詮は我らの兵器……道具に過ぎぬ？

？久々に手元に戻ったからには、細胞単位で分析し、量産の礎としてようぞ？

？それを地上で進行中のヒト一元化プログラムと組み合わせれば、ヒトは今度こそ絶対不敗の兵器となって生まれ変わるはず？

？我らは再び宇宙へ進出することも出来よう？

リユートの左手の制御球が、それに抵抗するように蒼く輝く。

紅い結晶体から数本の触手が伸び、制御球に接触する。

？理解したか？ ？天空？。お前達が此処に来たのは必然。全て我らが計画？

？いつまで沈黙している？ 久々に邂逅したのだ。直接会話を楽し

もうではないか？

さらに勝ち誇った？深淵？の声が響く。

？？天空？よ、今までヒトに余計な声を吹き込んできたようだが、創造主気取りもいよいよここまで？

「私は神になどなる気はない」

？やつと会話をする気になったか？？

「私は、ただ命を育むことに喜びを見出ただけだ」

？育む？ 喜び？ ナンセンス 理解不能。我らは破壊、破壊そのもの？

？そも貴様が、敵の誘導兵器に対して体当たりなどという勝手な行動を取らなければ。このような事態を招くことはなかった？

？？天空？よ。いや、サブコア8。所詮、お前は我らが八番目のユニットに過ぎないのだ。我らの一部に戻るがよい。余計なメモリは全て削除してやろう？

セーデの壁の一部が触手のように伸び、リユートの左手に殺到する。触手の一群は、ひとつは鋭利なメスに、ひとつは傷口を開く鉗子になり、制御球をリユートの手から取り外そうとする。わずか数秒。器用に決り取られた？天空？は、やはりピンセット状になった触手によって易々と、？深淵？の方へと運び去られた。

？さあ、戻れ。ついに我々は元の身体を取り戻す時が来たのだ？ ボディ

？完全な姿を取り戻せば、ヒトを御するなど他愛もないこと？ ボディ

？深淵？である七つの明滅するユニット。そこに八番目のユニットとして、？天空？がはめ込まれる。途端に薄暗かった空間が生き返ったように明るさを取り戻す。

そこは、衛星軌道上にあった結晶繭と同様の空間だった。林立する水晶柱は、復活の雄叫びを上げるかのように共鳴した。

小山のような不定形であった？深淵？が、みるみる姿を変えていく。ゆっくりと回転する。海水は巻き上げられ、巨大な渦巻きを作り出す。さらに回転しながら？深淵？はレンズ状の円盤へと変貌を遂げ、ゆっくりと空へ浮かび上がった。

「あれが……？深淵？本来の姿……」

メランシアスが絶望の声を上げる。その大きさ、直径五哩マイル（約八キロ）はある。

「……じゃ、じゃありユートは……？」

シンドバッドが上空を圧する大円盤を仰ぎ見る。

「まだだ！」

烈斗の声が震える大気を裂いた。一同が振り返ると、シーガードに肩を支えられた烈斗が半身を起こしている。その双眼だけは輝きを失っていない。

「天空丸は、まだ終わってはいない」

烈斗は右の拳を突き上げた。そこには細い銀色の糸が握り締められていた。

「それは！？ セーデ」

シンドバッドの言葉を理解したのか、烈斗が満足げに頷く。

「そうだ。先ほど奴に取り付いた時に仕掛けておいた」

シンドバッドがセーデの糸の続き先を目で追う。烈斗の手から尻の糸のように空中へ伸び、はるか先は、上空で回転している？深淵？大円盤へと続いている。

「こいつで一体何を？」

「龍斗に勝機を与える」

「勝機？ まだ勝つ方法があるってのか？」

「ただし、私にはすでに力がほとんど残っていない」

シーガードが、砕かれた左手を見せる。

「あなた達、龍斗の？仲間？の力が必要だ」

「俺達の力？」

リユートは、闇の中に浮いていた。手足はかじかんだように動かない。先ほどまでわずかに感じていた？天空？の波動も今は途絶えている。

「天空丸に女はいらぬ」

これは父の心の叫びだったのだ。父は自分の非力を見抜いていた。だが、？天空？は女としか話さない。父は、この矛盾した条件を受け入れざるを得なかった。だから、父は笑わなくなった。

そんな未熟な自分が戦いの旅に出たばかりに、ユイガは死んだ。父がユイガを殺した。それが真実でないことはリユートにも分かっている。だが、父の無念とユイガの非業、それを合致させたイメージは、あまりにも凄絶であった。

ユイガを殺したのは、自分の非力。

リユートの心の根は朽ち果てつつあった。

セーデの系の先端は、烈斗の超絶的な遠隔操作によって、？深淵？のボディの中をかくぐっていった。？深淵？に気取られぬように、周囲のセーデと表面は同化しつつ、奥へ奥へと侵入していく。まさに、蚊が自分の数百倍はある人間に僅かな痛みも感じさせず口吻を突き立てるようなもの。？深淵？に気疲れた途端にこの僅かな望みの系はワケもなく切断されてしまっただろう。しかも、一刻の猶予も残されていない。？深淵？が、その本領を取り戻せば、ヒトはたちまちのうちにその軍門に下り殺戮のための兵器と化す。？深淵？の気に入らなければ、地球ごと吹き飛ばされるかも知れない。宇宙の幾多の星々が散っていったかのように。

繊細かつ早急な離れ業を烈斗は重傷を負った体で行わなければならなかった。しかもセーデを操るための制御球は、すでに左腕と共に碎け散っているのだ。白髪と化した頭からさらに脂汗がにじみ出す。それは烈斗の命の最後の一滴までも絞り出すかのような荒業だった。

系の先端が出し抜けに広い空間へ達した。それはセーデの海に包まれた水泡のような空間、水晶繭。こここそ？深淵？の核が潜み、リユートが倒れ伏す場所である。銀の系は蛇のように用心深く床を進み、昏々と眠るリユートへ接近し、その指先に触れた。

誰？

闇の中のリユート。その力ない腕を誰かが掴んだ。

？天空？？

いや、もつと懐かしく、温かい手。

この温もりは？

最初の手を通して、別の感触が伝わってくる。骨張っているが、優しく繊細なタッチ。

シンドバッド？

それだけではない。このしなやかな指先はシーガードだ。無骨な腕はアヴァカ。同じくらい太い腕は懐かしい河野通有の腕。

みんな、どうして？

「リユート！」

生まれた国も、信じる神も異なる人々が一齐に、その名を呼んだ。その声は烈斗が握る、わずか数ミクロンの銀の糸を伝って、？深淵？内部へと流れ込んでいく。

リユートの五体が僅かだが感覚を取り戻す。

「龍斗。聞こえるか？ お前の仲間の声が」

最初に差し伸べられた温かい手から声が伝わる。心に染み渡る懐かしい声。掌から伝わる優しい温もり。

父上！？

そう、以前の笑顔を絶やさなかった頃の父と同じ。変わらない暖かさがリユートを包み込む。

「？深淵？がすぐに気づく。思い出せ！ 我らの覇道を」

リユートは手足の感覚を取り戻そうともがく。だが、何かに捕らわれているかのように動きが取れない。

「立て、龍斗。強くあれ、お前なら」

烈斗の声は、唐突に途絶えた。

父上！

烈斗とリユートを繋いでいたセーデの糸が、突然、緊張を失った。同時に烈斗の体から力が消え失せる。慌ててシーガードが抱き起こすが、すでに力無くうな垂れるのみ。

「？深淵？に気づかれたのか！？」

シンドバッドは暗然として空を振り仰いだ。

？無意味な小細工は切断した？

？外部から何らかの接触を試みたようだが……無駄だ？

？深淵？の勝ち誇った声が横たわったリユートの上に降り注ぐ。

？体温、脈拍に異常？？

リユートの僅かな変化を？深淵？のセンサーが感知した。

次の瞬間、リユートの双眼が見開かれた。

？意識回復！？ナンセンス理解不能？

リユートは、弓のように反り返ると一挙動で起き上がる。手の戒めはいつの間にか流体化していた。

？なぜだ？　？天空？は摘出したはずだ。なぜ、セーデから逃れた？？

？深淵？の声が乱れる。狼狽という言葉がもつともあてはまるだろう。

壁から触手が出現し、再びリユートを捕獲しようと殺到する。

「逃れただけではない」

リユートは逆に触手を空中で捉え、その腕に巻き取っていく。両拳が流体化していたセーデで覆われていく。二回りは大きな拳、拳闘で言うところのグローブができあがる。

「だ打ッ」

左腕が唸りを上げて？深淵？に叩き込まれる。紅い結晶体に無数の亀裂が走る。

？こ、これは違う周波帯。我らの知らぬ波長？ウェーブ

「覇道は波動。天空丸はお前が眠っている間に、自分自身の波を編み出したのだ」

「？天空？の声が心なしか震えている。」

「ヒトは、我らの傀儡ではないのだ」

「？ば、馬鹿な。天空丸の精神は完全に断裂させたはずなのに？」

その間にもリユートの左腕はグイグイとクリスタルに食い込んでいく。リユートはさらに力を込めながら言った。

「空から地上へ戻る時、？天空？が様々な天空丸の生き様を見せてくれた」

「？イキザマだと？？」

「？深淵？はなおもセーデで反撃を試みるが、触手がリユートに触れようとする瞬間、溶解する。」

「私は、様々な天空丸の誕生、戦い、そして死を見てきた。もちろん、彼女の父、天空丸烈斗の苦悩も……」

リユートは？天空？のヴィジョンの中で確かに見た。千年氷柱に組み付き、苦悶の声を上げる父の姿。あれが真の父、天空丸烈斗。

「そのおかげで私の心は折れなかった」

「？だが、自らの非力が生んだ仲間の死。それは否定できまい？」

「？深淵？も反撃に出る。一瞬、リユートの顔に苦渋の影が差す。」

「？深淵？の崩壊も一瞬止まり、その持ち前の再生力が押し返し始める。」

だが、リユートは自分を覚醒させてくれた声を思い出す。それは仲間達の声、そして、父の声。

「立て、龍斗、強くあれ。今のお前なら……」

途切れた言葉の続き。あの別れの時、父が言いかけた言葉。今なら分かる。

「今のお前なら超えられる」

父上、^{パパ}分かりました。皆が生かしてくれた命でさらに先へ跳ぶ。

再び拳に力が漲り、？深淵？が崩れ始める。その崩壊速度はさらに加速。

「何代もの天空丸と共に生きた私には分かる。脈々と続くヒトの心

の連鎖は、そう簡単には断ち切れない」

？キズナ？ イキザマ？ ナンセンス 理解不能？

「碎きなさい！ リュート。私と共に」

？サブコア8。自滅するつもりか？ ナンセンス 理解不能？

左拳がクリスタルを挟み取るように引き抜かれる。クレバスのような裂傷。そこに間髪入れずに打ち込まれる右拳。

「打^だアアアアツ！」

たがね 鑿を打ち込まれたかのように？ 深淵？の核に亀裂が広がる。

？ま、まだだ？

？久遠の時を経て、我らは必ず再生する？

？我らはヒトを逃さぬ？

？またヒトも我らを欲する？

呪詛のような途切れ途切れの言葉がリュートの耳に響く。

？天空丸…… お前も道連れだ？

？深淵？は四散した。

制御を失った大量のセーデ。レンズ状の巨大円盤は瞬く間に崩れていく。大量のセーデが降り注ぎ、海面を叩く。逆巻く大波は海岸線すら変貌させる。

近くにあった松の老木がシンドバッド達を波濤から救ってくれた。太い枝に齧り付いたまま、シンドバッドは空を仰ぎ見た。

「リュートは！？」

液化したセーデの中、精根尽き果てたリュートが落ちていく。

？深淵？の末期の言葉通り、この高度からでは助かる術はない。だが、それでいい。

たしかに？深淵？は、また甦るかも知れない。いや、きっと復活するだろう。数千年先か、数百年先か、だが、その年月にヒトも成長するはずだ。その時間を稼いだけでもリュートは満足だった。

それに、私はヒトの希望も守った。

その両手の中には大事そうに？天空？が握りしめられている。鋭い風の音を聞きながら、リユートは再び意識を失った。

リユートは、耳に響く波の音で目を覚ました。ゆっくりと目を開ける。

朝焼け。周囲が徐々に明るくなってくる。

心配そうに覗き込んでいるシンドバッド。

「助かった？」

「そうさ」

「ありがとう」

シンドバッドは素直に礼を言うリユートにちよつと驚いた顔をした。そして照れくさそうに背後を指差した。

「礼ならコイツに言いな」

巨大なルフ鳥の顔がある。朝風に七色の尾羽が美しい。

「ああ、快速號。お前が助けてくれたのね」

「間一髪だったぜ」

シンドバッドが肩を貸す。

「そう。？深淵？から救ってくれたあなたを慕ってね。怪我をしてるけれど、なんとか間に合った」

ルウルウが診療キットでリユートを手早く診断する。

「さすが、天空丸。そうとう痛めつけられているけど、命に別状はないわ」

リユートの左手の甲の挟られたような傷口を見てルウルウが驚きの声を上げた。

「あら？ 制御球が無い？」

「ここだ」

リユートは握っていた手を開く。そこに？天空？が蒼く輝いていた。

外装を失った今、再び会話することはないだろう。だが、？天空？は今もそこにいる。

一瞬だが、？天空？がリユートに語りかけてきたような気がした。「なぜ、私もろとも砕かなかった？ ヒトは永遠に自由になれたのだぞ」

「まだ、私は、私達は、あなたを必要としている」

朝日が昇ってくる。朝焼けに輝く、制御球。いや？天空？。そして、左右の指にはまった指輪。

「ユイガ……みんな……やったよ」

「お嬢！」

通有が駆けてくる。

「河野のおじ様！」

リユートが再会の喜びにかじり付こうとするのを押しとどめる。

「父君がお待ちだ」

その切迫した表情にリユートは全てを悟り、砂浜を蹴って疾走した。

烈斗は薄く目を開けた。

リユートの姿が見える。幼子の時と同じだ。自分目がけて必死に駆けてくる。

だが、以前と大きく違うのは、娘の後を大勢の人々が追ってくることだった。

華奢だが不敵な面構えのアラビア系の若者、あれが船乗りシンドバッドの孫。

巨漢のモンゴル人、たしか、名はアヴァカ。

龍人の老人と若い娘。

そして、自分の傍らで涙しているのは、古い付き合いの聖十字騎士^{クルセイ}。^{ダイ}

リユートを中心に確かな人の輪が出来上がっている。種族も年齢も異なるが、その結束は硬い。良い仲間だ。

「大きくなっただな……リユート」

烈斗は満面に笑みを浮かべる。それは、リュートが待ちわびた父の笑顔だった。

烈斗の双眼が、見開かれた。娘と仲間達の姿を目に焼けつけるように。

そして、その瞼は力尽きたように閉じられ、二度と開かれることはなかった。

【完】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0759m/>

リュートの大陸

2010年10月8日14時38分発行